筑波大学
University of Tsukuba

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

2021 October

TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT

2020年度 活動報告書
外部評価委員会報告資料

目　次

はしがき

アクション / プラン

みんな集まって！あそび探検がはじまるよ！（19008A）…… 1
Safety place はなしば（仮19016A）…… 6
Tsukuba × Sweets Project 2（19025A）…… 9
ゆうゆうゆう会 Vol.2（19029A）…… 11
使い捨てプラスチックごみ削減キャンペーン（19031A）…… 14
Tsukuba Mikoshi Club（19033A）…… 17
Higa Coffee 1.5（19034A）…… 21
OB・OG による選考対策講座（19035P）…… 23
つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト Vol.2（19036P）…… 25
つくメイク！（19038A）…… 28
ゆうゆうゆう会 Vol.3（19040A）…… 30
BLUE ONE BEAT! 2020（仮19042A）…… 33
Higa Coffee 2.0（20001A）…… 38
筑波の春を取り戻せプロジェクト（20002A）…… 41
Tsukuba × Sweets Project 3（20003A）…… 43
ドコイコ（20005A）…… 45
オンライン性教育〜意外と知らない私たちの性について〜（20006A）…… 49
ビブリオバトル筑波杯 秋の陣（20007A）…… 53
筑波大生アクションのススメプロジェクト（20008A）…… 56

ボランティア

令和 2 年度茨城県警察大学生サポーターの募集について（19031V）…… 62
外国籍子ども校外学習サポート教室（20001V）…… 63
茨城県のひきこもり支援をもりあげよう（20002V）…… 64
新型コロナ禍における学生への食事支援事業（20004V）…… 66

2020年度　実施状況報告…… 69

2020年度　つくばアクションプロジェクト外部評価委員会報告資料…… 76

編集後記

※成長度（自分はどのくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感はありましたか？）を 5 段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT)の『活動報告書(2021 年 10 月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008 年度（平成 20 年度）に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。令和 3 年度（2021 年度）の今年は、14 年目に入ったことになりますが、昨年度の前半から新型コロナウィルス感染拡大の影響で T-ACT の活動も大きな制限を受けることとなっています。

学生が個々のアイディアを実現させるべく、仲間を集め、共に活動を創ってゆくという T-ACT の本質の部分が、人の集まり（三密）を極力回避するというコロナ感染防止対策により、大きく損なわれています。オンラインを活用して、なんとか企画を立ち上げたり、細々と継続を図ったりの活動はありましたが、年間の活動数は大きく減少しています。

本報告書には、T-ACT で実施された企画・活動のうち、昨年度（2020 年度）に「活動報告書」が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACT アクションおよびプランの企画が 19 件、T-ACT ボランティアの活動が 3 件となっています。ただし、昨年度に企画が立ち上がったもの（企画番号が 20 で始まるもの）に限ると、アクションが 7 件、ボランティアが 2 件となります。例年、70 件ほどのアクション・ボランティアが実施されてきましたので、比べようのない件数です。

その中から印象に残ったアクションを 2 つだけご紹介します（あくまで個人的な印象です)。1 つ目は、「筑波の春を取り戻せプロジェクト」です。2020 年度は合格発表や入学式が中止となり、新入生には自らの入学をお祝いするようなイベントがまったくありませんでした。そのような状況を「取り戻す」意味合いで、祝賀会に相当するようなイベントを自分たちで企画して、実施したいという思いから出発した活動です。カスミ筑波大学店と交渉をして、店の横に「祝 筑波大学入学」の看板を出して記念撮影を行うという「実行編」（報告書は来年度掲載予定）までこぎつけたのですが、感染症の再拡大の時期に重なったりして､当初の計画が再三にわたって頓挫するということがありました。2 つ目は､「オンライン性教育～意外と知らない私たちの性について」です。オンラインでワークショップを行う企画ですが、性を扱うという性質上、匿名性の確保をどうするか、匿名同士の参加者間で議論が成り立つか、興味本位で入室していたずら行為などをする者が出てこないか等々、懸念材料がたくさんありました。実施が危ぶまれた企画でもあったのですが、パートナーの先生のしっかりしたご指導と、プランナーとオーガナイザーの学生さんの頑張りにより、ワークショップは 100 人近くの参加者を得る盛会になったようです。例年より数は減っておりますが、本報告書には、このような学生の（そして、少数の教員の）挑戦と苦労の物語がたくさん詰まっています。ぜひご一読ください。

本報告書には、外部評価委員会の報告資料も掲載させていただきました。昨年の 12 月に大学内外の 7 名の方々にご参集いただき（オンライン)、公開シンポジウムにご出席いただくとともに、外部評価委員会において、おもに T-ACT の第 3 期中期目標期間の運営や活動について評価いただきました。その外部評価委員会による「評価総括」を掲載しておりますが、評価委員の方々には、細かい点までご確認いただき、それに基づいた鋭いご指摘や、今後の活動に向けた期待やアドバイスを頂戴いたしました。当然ながら、次期中期目標期間の活動指針として活用させていただく所存です。この場をお借りして、外部評価委員の方々に心より御礼を申し上げます。

本年度も皆様の変わらぬご支援とご助力をお願いいたします。

2021 年 10 月

T-ACT 推進室長

加賀信広

みんな集まって！あそび探検がはじまるよ！（19008A）

T-ACT プランナー　二宮　綾香（教育研究科修士課程2年）

活動目的

【問題意識】

発達障害の子どもたちは、世間から「困った子」という見方をされる傾向にあります。これは障害を個人に押しつける考え方であり、特性上、様々な場面において、困っているのは子どもたち本人なのです（LITALICO 発達障害ナビ）。特に、同年齢の集団行動を基本とする学校生活においては、困り感が蓄積し、様々な二次的障害にも繋がってしまう傾向があります（LITALICO 発達ナビ）。実際に、発達障害の子どもの保護者の声で「遊ばせにいるときは相当の覚悟がいる。一瞬たりとも目が離せない。周りに迷惑がかかる。」などの報告（みーんなの公園プロジェクト）があり、保護者の負担や社会的な障壁が伺えます。また、「学年が上がり、これまで運動の経験やその楽しさを感じることが少ないまま成長してきた子に対して、運動あそびの中で自信をつけるきっかけになるような場をつくってほしい。」という切実な思いを直接耳にしてきました。

そんな問題意識から、地域において、発達障害の子どもの特性に配慮した環境で、子どもが主体となる自由なあそび経験の蓄積が重要なのではないかと考えました。同じ思いを持つ学生と一緒に、発達障害の子ども一人ひとりが「自分らしく」のびのびと過ごせる空間づくりを進めていきます。

【活動目標】

①発達障害の子どもたちが、個々の特性に配慮した環境で、のびのびと自由にあそぶ経験を蓄積していくことを目指します。そうした経験を通して、主体的や自己肯定感を高めたり、集団あそびや他者とのやりとりの中で人との関わりを自然と獲得していき、日常生活においても「自分らしく」生きていく姿に繋がっていくことを目指します。

②学生一人ひとりが、この活動を通して、発達障害の子ども一人ひとりの個別理解に努め、個々の特性に配慮した関わり方を考え工夫しながら体現していくことで、目の前の子どもと共に、相互主体的に学生自身も成長していくことを目指します。また、参加する子どもや保護者の声に耳を傾け、様々な専門の教職員から指導を受けることで、より多角的な観点からのリフレクションや準備に重点を置き、子どもの個別理解や関わり方に対する深い学び、そして特性に配慮したより良いプログラムの実施に繋がっていくことを期待します。

【活動提供について】

今回の企画実施にあたって、プランナーが茨城 LD 等発達障害親の会 星の子さまに呼びかけ、活動提供を進めていくことになりました。互いにゼロからの企画で、保護者さまも「発達障害支援に関わる学生さんたちと共に育っていきたい」との眼差しで向き合ってくださり、この企画への思いをますます強めています。今後、学生と保護者さまの双方の思いをすり合わせしながら、連携・協力のもと一歩ずつ進めていきます。

具体的な活動計画

【活動ルーティン】

活動前：星の子レク担当さまと連携を取り、活動参加者に合わせた当日プログラムを準備していきます。
活動中：保護者さまと連携して、子どもたちのあそび空間を見守ります。
活動後：当日の子どもの様子、保護者さまの意見を踏まえて、スタッフ間で反省会を行い、専門家の意見を踏まえながら次回プログラムを検討していきます。

【具体的な活動計画】

《当日学生スタッフに対する事前研修》

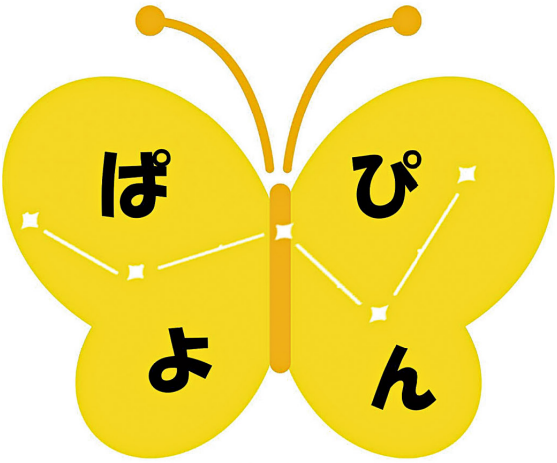
当日学生スタッフに対して、事前研修を行います。

①「発達障害とは」「子どもたちの多様性と個別理解」についての研修（内容について専門家の先生の指導を受けた学生が実施）
②当日のプログラムに関する詳細確認
③個人情報の管理について留意事項
④保護者さまから学生に向けて留意事項
⑤質疑応答

《第 1 回 活動実施日》

・日付：7/21
・学生スタッフ活動時間：12-17時
・場所：野生の森
・参加者活動時間：集合13時、解散16時
・タイムスケジュール：
12：00 スタッフ集合・準備
13：00 参加者集合・保護者さまと情報交換

13：30 はじまりの会
13：45 体ほぐし、アイスブレイク
14：30 運動あそび探検
15：15 おやつパーティー、おわりの会
15：45 保護者さまと意見交換
16：00 参加者解散
16：00-17：00 片付け・当日スタッフ反省会
《第２回 活動実施日》
・日付：8/17
・学生スタッフ活動時間：12-17時
・場所：筑波大学屋内体育施設
・参加者活動時間：集合13時、解散16時
・タイムスケジュール：
12：00 スタッフ集合・準備
12：45 参加者集合・保護者さまと情報交換
13：00 はじまりの会
13：15 体ほぐし、アイスブレイク
13：45 運動あそび探検
14：45 オリジナルパンケーキづくり
15：30 パンケーキパーティー、おわりの会
15：45 保護者さまと意見交換
16：00 参加者解散
16：00-17：00 片付け・当日スタッフ反省会
《第３回 活動実施日》1day キャンプ
・日付：11/23
・学生スタッフ活動時間：9-17時
・場所：野性の森
・参加者活動時間：集合10時、解散16時
・タイムスケジュール：
9：00 スタッフ集合・準備
9：45 参加者集合・保護者さまと情報交換
10：15 はじまりの会
10：30 アイスブレイク：野外運動探検
11：00 運動あそび探検
11：45 お昼ごはんの準備
12：30-13：30 お昼ごはん・片付け
13：30 休けい時間
13：50 体ほぐし、アイスブレイク
14：45 運動あそび探検
15：15 おやつパーティー、おわりの会
15：35 保護者さまと意見交換
16：00 参加者解散
16：00-17：00 片付け・当日スタッフ反省会



【リスクマネジメント】
●学生の共通認識を図るために「情報管理」「安全管理」「発達障害の理解」「子どもの多様性理解」等の留意事項に関する学生スタッフマニュアルを作成します。マニュアル配布後、当日学生スタッフ全体で事前研修を行い、共通認識をもった上で、プログラムの実施を進めていきます。
●活動内容に関して、参加者や保護者さまの声に耳を傾け、様々な専門の教職員から指導を受けることで、より多角的な観点からのリフレクションや準備に重点をおき、学生個々人の学びや反省を共有しながら、次回プログラムの検討、課題修正を進めていきます。活動中は、保護者さまとの連携を大切にし、同じ眼差しで子ども主体のあそび空間を見守ります。
●参加者の個人情報※1 の取り扱いは、パートナーの先生に協力を仰ぎ、厳重な管理体制※2 をとります。学生スタッフが、活動に関して得た参加者の個人情報の取り扱いについては事前研修を行います。
※1：参加する子どもの特性に配慮したあそび空間の設定のため、出欠確認時に以下の情報提供をお願いします。
（名前・生年月日・アレルギーの有無・好き / 得意なものこと・嫌い / 苦手なものこと・留意点・同伴者）
※2：参加者の個人情報は、パートナーの先生所轄の研究室のカギのかかった金庫で保管。管理している情報

データを外部に持ち運ぶ際は、専用ケースに入れ、プランナーかパートナーの先生のみが所持。活動中は、プランナーが、常に身に着けている状態で管理します。（紙データ：同一ファイル、電子データ：専用 USB で一括管理）

活動場所
野性の森・その他大学内の体育施設

活動期間
2019/05/31～2019/11/30

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：橋田慈子（人間総合科学研究科博士後期課程 3 年）、大西麻由（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、小西諒（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、佐々木達人（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、左右田瑶子（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、杉浦澄美（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、辻川美乃利（人間総合科学研究科博士前期課程 2 年）、奈良井舜（教育研究科修士課程 2 年）、村瀬有真（人間総合科学研究科博士前期課 2 年）、小田島協（教育研究科修士課程 1 年）、森春奈（人間総合科学研究科博士前期課程 1 年）、石川伶奈（体育専門学群 4 年）、金田葵（教育学類 3 年）、根岸創馬（教育学類 3 年）、堀田愛（体育専門学群 3 年）
P：上田孝典（人間系）

備考
・学生団体「ぱぴよん」を立ち上げ、運営やプログラム構成から一緒に関わっていきたいというコア学生スタッフが15人程度、当日学生スタッフが35人程度集まっています。
・今後とも活動参加希望の学生を随時募集します。個別対応、事前研修を踏まえて、学生の共通認識を構築し、学生自身にとって成長の場となるように努めます。
・パートナーの上田孝典先生の他にも、野外教育の渡邉仁先生、アダプテッドスポーツ教育の澤江幸則先生、その他、障害科学の先生などにもセカンドオピニオン的に、指導・支援を受けながら進めていきます。

活動報告

実際の活動内容
発達障害のある子ども・青年たちが、地域の中で、のびのびと自由に遊んだり、過ごしたりする経験の蓄積を目指し、県内の発達障害親の会の保護者と学生の協同のもと、多様な子ども・青年たちの居場所づくりを行いました。型にはまったプログラムではなく、個々の特性に配慮した空間の中で、幅広い年齢層かつ多様な子どもたち一人ひとりの“やりたい”という思いを大切にしました。特に、準備段階に力を入れて、定期的に学生ミーティングを実施し、大学内の施設や豊かな自然を存分に活用しながら、多様な遊び空間の提供に努めました。第 1 回目は屋内実施（中央体育館）、第 2 回目は野性の森で実施しました。各プログラムのメイン活動は「うんどう商店街」で、子どもが各々好きな「お店」を回って遊びます。サッカー・的当て・木登り等の体を動かす遊びや、ハンモック・魚つり等ののんびりできる遊びなど、幅広い年齢層を意識した「商店街」です。また、成功体験の積み重ねを目的として、「シールカード」を活用し、スタンプラリー形式でお店を回っていくと共に、学生は子どもの「良いところ」をたくさん発見し、その姿（何が？どんなところが？）を子どもに伝えて「いいねシール」を貼っていきました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
①学生スタッフ運営：かなり学生スタッフの人数が必要だったので、学生スタッフを集めること自体に苦労しました。プランナーとして、かなりの人数の学生とやり取りを一気に抱えることになってスケジュール的にかつかつになってしまいました。
②学内施設の利用：T-ACT の企画として体育系の学内施設の確保をすることにかなり苦心しました。
③雨天時の対応：屋外でのプログラム実施に向けて準備を進めていたので、直前の雨天予報による、屋内実施、もしくは順延の判断に迫られる状況があり、苦労しました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①コアメンバーの学生スタッフと上手く役割分担をしながら、活動準備を進めました。また、T-ACT や発達障害親の会の役員の方のご協力、ご支援のおかげで無事実施することができました。

② T-ACT から体育センターの方に連絡を取ってもらったことと、プランナーが施設責任者の先生に交渉したことで、無事に施設予約をすることができました。

③学生スタッフ、発達障害親の会の役員の保護者さまと相談しながら、臨機応変にプログラム内容・場所を変更しながら対応しました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

第一に、活動のいたる場面で、発達障害のある子ども・青年たち、そして学生スタッフ、保護者さまのたくさんの笑顔が見られたことがなによりも嬉しいです。その場でたくさんの人たちの出会いやか関わり合いが生まれ、それが、企画の目指していた“ありのまま”の姿でいられる空間に繋がっていると実感できたので、企画準備や団体運営等の部分で苦労することも周りに迷惑をかけてしまうことも多々ありましたが、改めて企画実施をすることができて良かったと感じています。また、計画・団体設立・運営・準備などがいかに大変で責任の伴うことであるかということを実感しています。自分のちょっとした判断ミスが大きなミスにつながったり、これだけの人が関わるとその分だけ個々の思いのズレが生じてしまったりする部分については、プランナーとして未熟な部分であったと反省しています。ただ、企画を実施できたのは、学生スタッフ、発達障害親の会の保護者さま、T-ACT 各位のお力添えいただいたおかげであるので、私の猪突猛進的な思いで はじまった企画を支えてくれたたくさんの周りの方々には感謝の思いでいっぱいです。

参加者への影響

プランナーの修士論文のフィールドにさせていただいた関係で、各回、学生スタッフに発達障害のある子ども・青年たちの様子を記録してもらい、子ども・学生スタッフ・保護者さまにアンケートにご協力いただきました。以下、その方々の声を抜粋する形で記述いたします。

第 1 回目：発達障害のある子ども・青年たちにとっては「こちらが何か言うまでもなく始まる前から遊んでいた（小 c）」ように自由に過ごせる場であったり、「簡単に説明したら自分から選んでいた（小 a）」ように、学生との関わりによって「本人の意思」で活動できる場となっていました。また、「声をかけると戸惑っているように見えたが、集団が苦手なことや前に行きたくないことを伝えてくれた（高 b’）」姿、アイスブレイクに入れなかったが、「運動商店街」で「本人の要望で人が少ない時に行き、楽しんでいた（中 h）」姿があったように、「本人の意思」を大切にする関わりを意識することで、“不快”な感情も“ありのまま”出せる場となり、安心感が生まれていたことが伺えます。一方、保護者さまにとっては、「積極的に大人に声をかけていて驚いた（保 A）」「子供の様子を客観的に確認できた（保 C’）」という「わが子の新たな発見の場」、「いつも静かに注意されるが、たくさん話して大丈夫で嬉しそうだった。（保 B）」という「安心して子どもを見守れる場」として機能していました。学生にとっては、学生自身が主体的に楽しめる「場」、子どもの可能性や個々の多様性の理解といった新たな「学び」を促し、成長の「場」として機能していました。

第 2 回目：発達障害のある子ども・青年たちにとっては、「ハンモックに乗れた。こわかったけど楽しかった。（小 e’）」「いろいろできた。丸太にのれた。やったーと思った。（小 b）」という言葉から、ただ“楽しい”だけではなく、意欲を喚起させる「遊び」を工夫することで、日頃なかなかできないものに挑戦して達成感を得ていることが分かります。また、青年が、学生との関わりの中で、自分の興味のある道具や活動を選んで活動していく姿が確認できました。青年の感想の中に、「竹を削ったり、紙やすりでこすったりした事。とても頑張 ったかいがありました。（青 k）」「（次回は）バーベキューを手伝いたい」とあることから、何かを“できた”成功体験が、主体的な思いに繋がっていることが伺えます。保護者さまにとっては、「自身がリフレッシュできる場」「保護者間の交流（情報交換）の場」として機能していました。連続して参加した学生にとっては、知っている子ども・青年であることから、対応や関わり方について「自身の成長を実感する場」として機能していることが分かりました。

このように、発達障害児・者にとっての社会適応を目的としない自由な「遊び」、「遊び場」の意義は、個々の特性が配慮された環境において、“楽しい”“嬉しい”時間であるだけでなく、いろんなことが（自分でも）“できる”ことを知る機会にもなりえ、特に、青年期になると主体的な役割意識を自覚した「遊び」が自信に繋がり、重要であると考えられます。このように、“喜”“楽”の体験、そして成功体験を創出する場として「自尊」の感情が保障されると共に、本人の“ありのまま”の姿を大切にすることで、“休みたい”“嫌だ”という「不快」の感情も素直に表出することができる場として機能していました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

こうして企画を終えてみて、ネガティブな感情も含め、胸に溢れる様々な感情すべてが、今の私の大切な財産となっていると自信を持って言えます。みなさん一人ひとりが持っている胸に秘めた“やってみたい”“やりたい”という思いが、たくさんの人々の笑顔やパワーに繋がるかもしれません。困ったとき、頼れる仲間も先生も

スタッフの方もきっとあなたの力になってくれます。今後ますます素敵な企画やプロジェクトが、大好きなこの地に溢れることを心より願っております。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

広報や公募、印刷や貸し出し備品などの際には大変お世話になりました。企画実施に向けたリスクマネジメントの部分でも丁寧にアドバイスをいただき、とても助かりました。気軽に利用できるような T-ACT 推進室の先生方・スタッフの丁寧な対応や優しくかつ頼りになる温 かな雰囲気に支えられました。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

Safety place はなしば（仮19016A）

T-ACT プランナー　宋　恵恩（国際総合学類4年）

活動目的

「筑波大学に気楽で安心して自分の心と向き合えるサードプレイスを作りたい」
その空間を通して、自分を大切にできる人を筑波大学に増やしていきたいと思っています。
人間関係、家族、将来のこと、何か人とは違うと感じていることなど、、
自分の感情や思いに素直になって聴いてもらえる場所が身近にあったら、少しでもその感情を共有できたら、、
もっと自分を大切にできるんじゃないかそんな思いで、この企画を始めました。

＜活動目的＞
1．自分の心と向き合うためのグループワークや自己受容につながる空間を提供する
2．「人の心と向き合う」ことに関心があり、学生時代から心理分野に関わりたいと思っている学生の実践の機会を与える

具体的な活動計画

【活動内容】
【活動①月１回開催するはなしば（定員10〜12人）】
　４〜５人で１つのグループで、誰かに聴いてほしいと思っていることや、自分の考え・モヤモヤをお互いに聴き合う場です。（各グループ、一人ずつファシリテーターが入ります。）グループみんなが安心して話せるよう、お互いの話に耳を傾け、自分の感じたことを素直に表現できる場をつくっていきます。話す内容・テーマは決めず、そのグループにいる人たちの中で自然と出てきた話が、その場の話のテーマになります。
　はなしばでは、自己受容のきっかけをつくることを目的に、先生のご指導を頂きながら場づくりを行います。月１のはなしばで行うグループワークはその月によって内容が変わる可能性があります。
＜具体的な流れ：グループワーク案①＞
1．場の目的・ルールの共有
2．アイスブレイク（自己紹介、最近あった嬉しい出来事、今の気持ちをシェア）
　※会によって変わることもあります
3．今日話したいことのシェア
4．今日話した自分自身に対して手紙を書く
5．感想シェア
「安心して話せる場」つくるためにも、実施前に杉江先生のもとでご指導をいただきます。
＜安心して話すための場のルール＞
1．ここで聞いた話は「はなしば」以外では話さないこと（守秘義務を守ること）
2．発言を強要しないこと
3．非難したり批判的・評価的発言をしないこと
　「私は〜と思った」と私を主語にして話す（アイメッセージで話す）
＜はなしば全体の禁止事項＞
　宗教や営業の勧誘目的の参加はお断りしています。見つけ次第退出をお願いすることがありますので、ご了承ください。
　上記の行為を見かけたら、運営まで報告を！→ hanashiba.tsukuba@gmail.com
＜安心して話すための枠組み＞
1．自分の呼ばれたい名前またはニックネームを使う
　目的；肩書きや実名をとることで、心理的に自由になって本音と本音の交流を促進させる
2．以上のルールを冒頭に述べ、賛同してくれる方は拍手（儀式）
　目的；集団の凝集性（集団の和）を高めることで、メンバー集団の所属意識を強くさせるため
3．全体で感想シェア
　目的；お互いの感じたことや、考えを共有するため
＜ファシリテーターの役割＞→安心の場を率先してつくっていくこと
① 場のルールの共有、参加者の様子を観察する
② ダメージ（心的外傷）を予防する
　相手を否定するような発言や相手をジャッジする発言あった際に、アイメッセージでいやな気持ちを伝える
③ グループ内のコミュニケーションを観察する
　発言が均等か、姿勢、うなづき、言語のコミュニケーションを観察
④ ルール違反がないか確認する

【活動②週 1、2 でピアサポスペースの開放】
※運営が必ず一人以上は見守り役として常駐（例）木曜日10時～12時ピアサポ開放
　ピアサポーターの場所（許可済）を、はなしば運営や来室者同士で自由に過ごせる空間として開放します。イメージはカフェのような空間です。
　一人で落ち着つくフリースペースとして利用してもよいし、希望があれば気軽に話ができるあたたかい空間にしたいと思っています。
・安心して話すための場のルールは守ることを前提ととします
☆運営は月 2、3 回、はなしば実施前に杉江先生のもとで実施方法における指導を受けて臨むことを約束する
【具体的な活動計画】
6 月第一回はなしば
7 月第二回はなしば
10月第三回はなしば

活動場所
・ピアサポートルーム
・Student commons（要相談）
・Global village（要相談）

活動期間
2019/06/06～2019/11/07

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：森田美咲（心理学類 4 年）、LEE CHANHWA（心理学類 4 年）
P：飯田順子（人間系）、杉江征（人間系）

活動報告

実際の活動内容
①場のルールづくりミーティング
　6 月～ 7 月主にオンラインでのミーティングで、月 1 のワークショップ開催時の場のルールを決めた。
②運営事前ミーティング
　10月21日（月）18：30～当日使う予定のカードゲーム（知人から借りて）で運営同士の交流を深めた。まずは純粋にカードゲームを楽しみ、その後実施に当たっての注意点など共有した。

③仮承認状態でのプレイベント開催
　10月25日（金）11：30～12：30ピアサポルームにて、「カードゲームで仲良くなろう」をテーマにプレイベントを実施した。当日はアイスブレイクとして共通点探しを行い、メインコンテンツとして「アンゲーム」というカードゲームを行った。アンゲームは、お題カードをめくりお題に書かれたテーマについて話し、1 人の話しをみんなで聞き気になる部分を質問するといった、双方のコミュニケーションを促すカードゲームである。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒50％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
①本来やる予定であったカードゲーム（はぁって言うカードゲーム）を事前に用意できなかった。
②引いたカードの中には一部答えづらい質問があった
③ファシリごとの役割が不明瞭であった
解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
①ピアサポに代わりとなるカードゲームあったので、それを使って実施した（アンゲーム）
　→次回開催のときは、1 週間前に必要なものはは用意してある状態にする
②カードを 1 人 3 枚引いてその中で答えたい質問を答えるようにして、選択の自由をつくった。
③役割に縛られず運営側が率先して質問や発言をした。
　→次回開催の時は、メインファシリ、サブファシリと役割を言語化して共有さる

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

仮承認状態で 1 回のプレイベントのみの開催であったが、はなしばの活動ページを見て 1 人、そして実際の参加者 1 人と、学類の違う 2 人もの学生が活動に共感して頂き、活動参画の意志を表明してくれた。改めてはなしばの活動が短期の企画で終わるのではなく、ピアサポとうまく連携して長期的な企画として定着できるよう努めていきたいと思った。活動の意義を再確認することができた機会であった。

参加者への影響

はなしばで作りたい場を共有したことで、参加者が共感して頂き、参加者までも場づくりに携わるといった結果が生まれた。自分が属しているコミュニティ以外に、はなしばのような気軽に人とコミュニケーションをとれる場所を必要としている人がそのニーズを満たしながら、場づくりに参画できる仕組みを今後作っていきたい。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何かこういうものがあったらいいあ、つくりたいな、その小さいな will を実際に行動まで起こしてみることで、自分や他者、自分が生きている社会を少しずつ知っていけます！T-ACT はその一歩を全面的に応援してくれるので、最初のアクションを起こす場所としてぜひ積極的 に利用することをおすすめします。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

・企画実施の上で先生や経験のある方に気軽に相談に乗れること
・活動の一定の信頼を確保できること（学外でやるよりかは）
・T-ACT の先生方があきらめずに応援して下さること
要望は今のところありません。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

Tsukuba × Sweets Project 2（19025A）

T-ACT プランナー　藤井　七彩（生物資源学類2年）

活動目的

『筑波大学生×？？？×スイーツ』をテーマに、企業に協力を仰ぎ、スイーツの開発・販売をすることを通じて、つくばの新しいスイーツを生み出すこと。

学生だけで一から考える商品を企業とコラボして商品開発することで、商品開発に関する知識や渉外活動の経験が得られる。

また、自分たちで全て作り上げることで商品開発に関する確かな自信をつける。

具体的な活動計画

2020年の雙峰祭（11月）でコラボ商品を出品するために、出店申請をする５月までに販売商品を決めることを目標とする。

10月 勉強会開始
11月 コラボ企業探し
12月 コラボ企業決定
2020年１月 商品の考案
２月 商品の決定《今回の申請での経過目標》

以下は次回申請時の活動計画案
３月 パッケージの考案
４月 パッケージの決定
５月 申請する商品完成・学祭出店申請

【具体的な活動内容】
・勉強会
商品開発や、渉外活動をするための知識やマナーを身につける。 週に１回全員で集まり、プレゼン形式で知識やマナーを共有する。
・商品開発
商品やそのパッケージのアイデアを持ち寄り、学んだ知識を活かして議論する。 週に１回集まる時に議論する。
・渉外活動
私たちの活動に協力してくれる企業を探す。企業の方と話合いを重ね、商品を作り出す。週に１回集まる時に、進捗報告をする。

なお、移動は主に公共交通機関を使い、学研災に加入することでメンバーの安全を確保する。

本申請の活動においては，販売行為に直接関与しないようにします。

活動場所
中央図書館、学生控え室など

活動期間
2019/09/01～2020/02/29

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：菅野楓音（生物資源学類２年）
P：高谷直樹（生命環境系）

備考
長期的に活動したいため、活動期間は１年を見積もっています。

活動報告

実際の活動内容

1 月初めに、「粉とクリーム」さんとプロジェクトを進めることが決まり、1 度直接お会いして話をする予定だが、その日程調整が上手くいかずまだ話せていない。2 月の希望日をメールで提出したが返信が無かったため、3 月の希望日を再度メールで送り、現在返信待ちの状態。

また、「Table」というカフェの広報の方（筑波大 1 年生）とお話をし、協力してくださるか 2 月中に返信をもらう予定だが、まだもらっていない。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒50％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

コラボ企業を見つけるのに苦戦したが、それ以上に企業とのやり取りがスムーズにいかず、こちら側として何も出来ないのがもどかしい。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

なるべくこちら側から連絡している。だが、結局返信待ちなので解決できていない。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

菅野さんと計画して、このプロジェクトに賛同してくれる人がたくさんいたことは嬉しかった。

粉くりさんと話が進んだ時は安堵の気持ちもあったが、返信がないためにプロジェクトを進められず、このまま無くなってしまわないか不安が大きい。

参加者への影響

みんなの意見が聞けるように話し合いの場を多く設けてきたため、刺激を与え合うことができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

活動を始める時期も考えるべき。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

今まで淡く抱いていた希望や理想を実現できたことは良かった。この活動を通して、学生のうちに商品開発の難しさを経験するのも私の中の目標であり、十分経験できた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

ゆうゆうゆう会 Vol.2（19029A）

T-ACT プランナー　澤井　雪乃（人文社会科学研究科博士前期課程1年）

活動目的

ゆうゆうゆう会は、吃音のある子ども達の交流会である。2019年５月から T-ACT で活動を開始し、2019年11月まで月一回活動を行ってきた。筑波大学近辺に住む吃音のある小中高生を招き、小学生は遊びを通した交流、中高生および保護者は座談会を実施した。上半期は、回数を重ねるごとにスタッフも活動に慣れて行き、活動内容が充実していった。しかし、運営面でいくつか課題が残った。2019年12月以降は、上半期の活動から浮上した運営面の課題を解決しながら、より充実した交流会を実施していきたい。解決する課題は以下の２点である。

①運営メンバーの募集

一つ目は、運営メンバーの募集である。ゆうゆうゆう会の運営メンバーは現在プランナー１名、オーガナイザー１名の計２名である。上半期では運営メンバーの募集を実施しなかったため、メンバーを増やすことが出来なかった。運営メンバーの事務作業の負担軽減、そして今後の引継ぎのためにも12月以降は積極的に募集していきたいと考えている。

②スタッフの負担

二つ目は、特定のスタッフに負担が集中する点である。特に小学生の交流会では、中高生、保護者の座談会に比べて事前準備が多い。上半期では、プログラムの計画や使用する物品の準備を毎回特定のスタッフが担当することが多く、負担をかけてしまった。したがって、今後はスタッフの負担が分散するような運営体制が必要であると思われる。

以上の課題を解決し、2019年度、下半期「ゆうゆうゆう会 vol.2」を実施したいと考える。

具体的な活動計画

【活動内容】

●実施日：毎月第３日曜日

●対象者：小・中・高校生の吃音のあるお子さん

●スタッフ：筑波大生、教員、言語聴覚士２名、茨城言友会の方（成人吃音の自助グループ）

＊お子さん一人につき参加費200円を毎回徴収する

●内容：

10：00-10：20 はじめの会

10：30-11：50

・小学生：遊びを通した交流

・中学生と高校生：大学生との座談会。近況報告をしたり、吃音で悩んでいることなどを話し合う

・保護者：お子さんを待っている間に座談会をしてもらう

11：50-12：00 おわりの会

12：00-12：30

・スタッフ反省会：運営側でその日の反省を行う

＊各交流会には教員あるいは言語聴覚士のスタッフが最低１人入るようにする

【運営面の課題解決に向けて】

●まず、ゆうゆうゆう会スタッフの LINE グループで運営メンバーを募集する

●集まった運営メンバーで話合い、スタッフの負担を軽減する措置を話し合う

活動場所

2019年11月まで使用していた「人間系学系棟 B 棟」は耐震工事に入るため、12月以降は会場を変更する。筑波大学の春日キャンパス 春日宿泊施設で実施する予定である。

＊パートナー教員から使用許可を得ている。

活動期間

2019/11/18～2020/03/22

対象

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：遠藤優（医学類２年）

P：宮本昌子（人間系）

備考

・社会福祉協議会のボランティア行事用保険に加入する。
・運営は、吃音の臨床経験がある言語聴覚士や教員にアドバイスを頂きながら行う。

活動報告

実際の活動内容

【概要】
○日時：第 3 日曜日10：00～12：00
○場所：春日キャンパス宿泊施設
○実施日：
・12月15日（日）第 1 回実施
・ 1 月13日（月）第 2 回実施
・ 2 月16日（日）第 3 回実施
【活動内容】
10：00-10：20 はじめの会（スタッフ紹介、アイスブレイク）
10：30-11：50
・小学生：自己紹介。カードゲーム、工作で一緒に遊んだ。
・中学生と高校生：大学生との座談会。近況報告をしたり、吃音で悩んでいることを話し合ったりした。
・保護者：子どもの吃音とどう向き合えば良いか？大人になったら吃音はどうなるのか？など質問があった。それに対してスタッフ、言語聴覚士がアドバイスをしたり、保護者同士で話合ったりした。
11：50-12：00 おわりの会
12：00-12：30
・スタッフ反省会：運営側でその日の反省を行った。
＊各交流会には、ことばの教室の先生あるいは言語聴覚士に入って頂いた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

小学生チームに入るスタッフの負担が大きくなってしまった。小学生チームは、保護者チーム・中高生チームと異なり、「どのようなゲームをするか」、また「中に入れないお子さんがいたとき誰がサポートに回るか」など、事前に話し合うべきことが多い。そのため、負担が偏ってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

プランナーがスタッフ割を決める際に、毎回同じスタッフばかり小学生チームに入ることがないように調整した。また、できるだけ各回新しいスタッフが入るように心がけた。さらに、共有サイトを活用し、毎回実施した内容および反省点をスタッフ全員で共有した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回はゆうゆうゆう会（第 1 期）に引き続く活動であったため、活動を実施する面で特に困難はなかった。

ただ、やはり活動を長く続けていくと活動内容がマンネリ化してしまうことを実感した。スタッフとしては、第 1 期から引き続き同じ内容を実施したため余裕を持って活動に取り組めるようになった。一方、参加者は、毎回同じ内容のゆうゆうゆう会に飽きている様子であった。例えば、子ども達からは、「毎回遊ぶだけではつまらない。吃音の勉強がしたい」という要望が上がった。今後は、参加者の要望を丁寧に汲み取りながら、活動内容を発展させていく必要があると思う。

参加者への影響

座談会では、参加者（保護者および中高生）が積極的に話すようになってきた。ゆうゆうゆう会が発足して間もないころは、参加者が自ら話し始めることはほとんどなく、スタッフが話題を提供する必要があった。しかし、最近では中高生が自ら話題を提供する姿や、保護者同士でアドバイスする姿が見受けられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

取り敢えずやりたいことがあったら、企画してみてください。失敗から学ぶことも多いです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT のスタッフさんに丁寧に相談に乗って頂いた。会の活動で行き詰ったときに、助言を頂いて大変助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

使い捨てプラスチックごみ削減キャンペーン（19031A）

T-ACT プランナー　神島　駿太郎（数理物質科学研究群博士前期課程1年）

活動目的

この活動の一番の目的は、レジ袋を断る、という行為をきっかけに環境問題に対して、私たちひとりひとりができることについて学生たちに考え、実行してもらうことです。今日世に出回るプラスチックごみは、マイクロプラスチック問題等の社会問題を引き起こしており、世界的にその対策が取られ始めています。しかし、周りを見ているとそれらの問題に対する行動がいまだ十分にとられていないと感じることが多々あります。例えばコンビニでおにぎりを一個買う際に、店員さんが商品をレジ袋に入れてくれ、家に持ち帰る。この一連の行為が、例えば自分のリュックに空きがあり、袋が必要ないときにでも気付かぬうちに行われています。私たちは学生がこの瞬間に、環境により良い選択ができるのではないか、ということに気付く手助けをしたいと思います。そしてその気付きがきっかけで学生がより多くの場面で環境に良い消費者になってくれれることを願っています。

具体的な活動計画

1．丸善さんのレジ横（レジ横でなくても、会計する際に目につきやすい場所）に「レジ袋結構です、の一声を」というフレーズの入ったポスター掲示をする。（丸善の店員さんたちにも声掛けを徹底してもらう。）

2．学内の掲示板に、上記の運動に参加してもらうよう促すポスターを貼る。（こちらのデザインは今後検討）

3．より学生の集まる食堂のテーブルにキャンペーンを促進する三角 POP 広告を置き、キャンペー ンを身近に感じてもらう。（こちらのデザインも今後検討）

4．キャンペーン前と後での消費者の変化をアンケート等で確認し、次回以降の運動に活かす。

5．以上1-4の計画を潤滑に進めていくため、オーガナイザーで週一回学内でミーティングを行う。（2B 棟学生控室等）プロジェクトの進行具合と改善点について話し合う。

活動場所

学内
（丸善店舗内（コンビニ、書店）、学内掲示板、食堂）

活動期間

2019/12/01～2020/05/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：砂川宥人（人間総合科学研究群博士前期課程 1 年）、Dimaano Leonid Zairion（生物資源学類2019年度卒業）、河村幸音（生物学類 4 年）、Foronda Bryan Angelo（生物資源学類 3 年）、Syifani Rizki Noor Syafira（生物資源学類 4 年）、Alviana Vanya Ingrid（生物資源学類 3 年）、Wachirapumipak Watcharakorn（生物資源学類 3 年）、水野陽太（生物資源学類 4 年）、Horn Som An（生物資源学類 3 年）
P：内海真生（生命環境系）

備考

＊丸善様にはすでに連絡させていただき、プロジェクトに協力していただけるとのことでした。こちらでデザインの下書きを提案し、アドバイスをいただく等、現在もこのプロジェクトがうまく運ぶように協力していただいております。学生生活課、厚生・宿舎チームとも連携して、進めていこうと考えております。（MARUZEN 様の店舗内掲示等を認めて頂く必要がありますので、この企画書には目を通していただく予定です。）

活動報告

実際の活動内容

・レジ袋を断るように促すポスターの作成
・ポスターの掲示（学内の丸善のコンビニと書籍部のレジ横）
・ポスターの影響を評価するための丸善で働くスタッフさんへのアンケートの実施

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒50％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

・サークルがこのプロジェクトの議論の場であったため、サークルの頻度が減少した時期に、プロジェクトの勢いが弱まってしまった。
・このプロジェクトはレジ袋の消費量を削減することが一つの目的であったが、そのレジ袋の消費量を定量化し正確に評価する方法がなかった。（丸善さんとも掛け合ってレジ袋の入荷量の変化をみる、なども検討したが、先方の都合上実現できなかった。）
・評価法があいまいであったために、このプロジェクトの意味が薄れてしまった。
・コロナの影響でサークルが完全にストップしてしまったこと、自宅待機になってしまったこと、授業や在宅研究、就活なども重なり、モチベーションが落ちてしまい、途中からプロジェクトが止まってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

・自分一人で抱え込まず、何か協力してもらえることがあるときはグループのメンバーに協力を求めるようにした。
・正確な定量評価はできなかったが、スタッフの方々にアンケートをとることで、スタッフさんの感覚に頼った数字での評価を行った。
・さらに、数字だけではなく、スタッフさんに消費者の行動傾向を観察してもらうことで、定性的にこのプロジェクトをある程度評価することができた。
・途中でプロジェクトがストップしてしまったことに関しては、解決を先送りにしてしまった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

・自分がやってみたいと思ったことを実行に移すことができた、非常に良い機会であった。
・周囲（学生、学生生活課の皆さん、教授、丸善の方々）を巻き込んで行ったプロジェクトであったために、責任感を持って取り組むことができた。丸善さんや学生生活課に許可をとるなど、責任を伴う仕事は良くできた一方で、責任は伴わないが、プロジェクトをより良くするためのこと（例えば、学内掲示板に貼るデザインの検討や、三角柱の広告の導入など）に対しては自分の忙しさや、議論の場としていたサークル活動の減少によってモチベーションが変化してしまったために、取り組めないことがあった。何かをするにあたってのモチベーションの保ち方や、自分の弱さ、仲間の大切さなどから、プロジェクトのターゲットを絞ること、問題点、それに対する施策や、結果の評価軸など、何かの課題に取り組む際に大事なことを学ぶことができ、ここで学んだことは将来の自分に活かしていけると思う。
・先述したように評価法があいまいだったために、本来意図していた、「レジ袋を断ってくれる人を増やす」だったり、「それをきっかけに環境問題について考えてもらう」という目標を達成できたかどうかはあいまいになってしまったが、それ故に、『プロジェクトの評価法を設定する大切さ』を伝えることができる良い例、と思えばこのプロジェクトも意味のあるものにすることができる、と感じている。

参加者への影響（一緒に運営した仲間や活動に参加した人々の変化など）

・オーガナイザーの変化は特に感じていない。（ということを考えると、あまり仲間と継続的な連携が取れていなかったのだな、と感じる）

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

・プロジェクトを一人で運営するなら、自らのモチベーションを常に保ってやれるかどうかを考えることで、プロジェクトの実現につながると思う。
・仲間と運営するなら、グループのモチベーションを常に保つ方法を考えておくと、良いと思う。私の場合、卒論時期は忙しいことが分かっていたが、グループであればモチベーションを高く保ってやれると思っていた。しかしながら、テスト期間や長期休暇で議論の場としていたサークルの活動がなくなっていったことで、プロジェクトについて話す機会も減り、最低限のこと以外やらなくなってしまった。
・自分の場合、仲間と話すことはプロジェクトを実行するうえで非常に支えになった。コロナ禍で直接人と会うことが憚られる時期があると思うが、オンラインでも良いのでグループで互いの顔を見ながら話し合う時間を

とった方がいいと思う。話し合って、その一週間の予定を決めれば、『みんなにここまでやる！と言ったから、やらなきゃ』という、強制力もはたらき、自然とプロジェクトが進む。このような動機付けも時には必要だと思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

私がやろうと思ったことを実行に移す上での、サポート（実現可能性の評価や、改善のアドバイス、印刷関係のサポート）等、がしっかりしていて、とても助かりました。プロジェクト終了後も、プロジェクトの善し悪しの評価ではなく、ともに反省し、次へどうつなげるかを一緒に考えていただいた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

Tsukuba Mikoshi Club（19033A）

T-ACT プランナー　藤野　真帆（日本語・日本文化学類4年）

活動目的

お神輿を通じて、留学生と日本人学生が交流できる場、日本文化を体験できる場を作りたいという思いから企画を立案しました。

私はこれまで、いくつかのお祭りに参加しお神輿を担ぐ機会を頂いてきました。その中で、お神輿を担ぐ楽しさを知りました。また、日本の文化について考えたり留学生と交流したりするきっかけも生まれました。

そこで、お神輿を担ぎにお祭りに参加する活動を行い、お神輿の面白さや感動を共有できる仲間を増やしたいと考えています。留学生にもぜひ参加してほしい企画です。

具体的な活動計画

①トレーニング 毎週木曜日 18：00～21：00

お神輿を模した道具を組み立て、お神輿を担ぐ練習をします。

お神輿の担ぎ方は地域ごとに特徴があります。トレーニングでは、担ぎ方やお神輿を担ぐときの歌（甚句）の練習をします。

②勉強会・交流会

お祭りのない月をメインに開催します。甚句の練習やお神輿・お祭りの歴史について調べ、お御輿とお神輿のある地域への理解を深めることを目指します。留学生との共同活動を通じて、日本文化や日本人の考え方についてより多くの視点から考える会にしたいです。

勉強会と一緒に、希望者を募って食事など交流会も行いたいと考えています。

③お祭りに参加

お神輿を担ぎにお祭りに参加します。

参加するお祭りは、学外参加者として、宮田宣也さんに紹介していただいています。

お祭りに参加する前に、日本人の神道に対する考え方や習慣について宮田さんに協力していただきながら、事前学習を行います。お祭りに参加するかどうか、神社のお神輿を担ぐという行為が日本の神道に対する信仰的な行動に見える人がいるということを理解した上で、各個人で判断してもらいます。私たちからお祭りへの参加を強制するような発言や行動はしないことを徹底し、個人の意思を尊重します。

参加予定のお祭り

２月

11日 明治神宮「建国祭」（東京都）

明治神宮で建国記念日をお祝いして行われます。

４月

４日、５日 美和神社（山梨県）

おみゆきさんと呼ばれる水防祈願を起源に持つお祭りです。

11日、12日 手力押神社（岐阜県）春の例大祭です。

18日、19日 大須八幡神社（宮城県）

海上安全と大漁を祈る春季例大祭です。

25日、26日 白銀神社（宮城県）春季例大祭です。

29日 備前国総社宮（岡山県）春季例大祭です。

５月

４日、５日 小田原大稲荷神社（神奈川県）春季例大祭です。

６日 府中大國魂神社（東京都）

くらやみ祭と呼ばれる例大祭です。

活動場所

学内：空いている場所（屋外）、図書館のセミナー室、チャットルーム、ラウンジ屋外は、1H と1B、文サ館の間のスペースを希望します。

学外：活動計画を参照

活動期間

2019/12/11～2020/05/10

対象
学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：阿部修一郎（国際総合学類 令和元年度卒業）
P：松下秀介（生命環境系）

備考
①活動にかかる費用はお祭りに行くための交通費です。
お祭りに参加する時の衣装の購入は、各自の判断に任せますが、貸出もできます。
②学外での活動を行う際、学研災への加入をすすめます。また、安全のため代表者の連絡先を事前に共有します。
③学外参加者として、宮田宣也さんと小村政文さんに協力いただいています。
宮田さんには、お祭りの紹介やトレーニングの指導をしていただいています。
小村さんには、お祭り当日などで活動の運営を手伝っていただいています。
宮田宣也さん（一般社団法人明日襷（アシタスキ）代表理事）
神輿や神棚の修理・製作を行う。
また、全国各地の祭礼支援やヨーロッパでの神輿渡御などにより神輿や祭の文化の活性化に取り組んでいる。1987年３月15日横浜生まれ。幼少期、神輿職人の祖父の家で育てられ、祖父の影響を大きく受ける。高校入学時に極真空手を初め、大学四年生の時に全日本準優勝。その後、筑波大学を卒業、筑波大学大学院入学後に東日本大震災が起き、被災地での祭復興の活動に取り組むようになる。 2013年石巻市雄勝町白銀神社の神輿修理、祭礼支援を行い、祭の美しさと住民の祭に対する姿勢に感銘を受け、祭文化を次世代へ繋げるために明日襷（アシタスキ）の活動を開始した。 2014年に行ったフランス神輿渡御を皮切りに、タイ、ドイツ、スロベニアでも神輿渡御に成功。 2017年一般社団法人明日襷設立。代表理事に就任。
2019年宮田宣也をテーマにしたドキュメンタリー映画「祭の男 MIKOSHI GUY」が完成。渋谷アップリンクでの劇場公開他、各地での上映会が行われた。
小村政文さん（勝手につくば大使）
2015年につくばの魅力発信活動「勝手につくば大使」を起ち上げ以降700記事近くの街の情報を Web に公開。2017年より紙面での媒体にも着手しフリーペーパー「ツクバ人間」を刊行。
④参加するお祭りは、宮田さんの紹介で選んでいます。
私たちは、あくまでも、文化体験・文化交流という観点でお神輿を担がせていただいていて、特定の宗教に対する信仰を意図的に助長するような活動は一切行っていません。また、留学生の参加について、お祭りに行く前に私たちの活動内容や参加するお祭りがどういったものかについて情報共有することを徹底します。お祭りへの参加は、そういった情報を加味して個人の判断でするようにお願いします。私たちが参加を強要することは行いません。

活動報告

実際の活動内容
①トレーニング 木曜日 18：00～21：00
お神輿の担ぎ方や掛け声と神輿を担ぐときの歌（甚句）の練習を行いました。
活動開始から１月までは、ほぼ毎週活動を行いました。２月、３月は試験やメンバーの卒業等の理由で、１か月に２回程度の頻度で行いました。４月以降はコロナの影響を考え、活動を控えました。
トレーニングでは、回数を重ねるごとにより重いウエイトのものを担げるようになったり、甚句が歌えるメンバーが増えました。
歌を覚えたいという要望がメンバーからあったため、歌の歌詞をグーグルドライブで共有したり曲調を練習したりする日を追加で設けました。
②勉強会・交流会
トレーニングの後に希望者を募ってご飯会を何度か行いました。メンバー同士が普段どんなことを考えているのか共有しあうことが出来ました。また、ランチミーティングを開催し、トレーニング方法やクラブで取り組みたいことがないか意見交換の場を設けました。
勉強会は、学外参加者の宮田さんに協力していただいて行いました。留学生が多いため、言語の壁は多少ありましたが、宮田さんの講義形式でインプットし、それに対する意見や感想を参加者同士で共有しました。
③お祭りに参加
コロナの影響により、参加予定だったほぼすべてのお祭りが中止となってしまいました。唯一参加できたのは、２月の明治神宮での建国祭のみでした。
活動計画を練る段階でネックだった宗教的な問題については、メンバーと参加のメリット・デメリットを共有

することで解決させる努力をしました。
　メンバーに参加確認を取る際に、参加するお祭りがどういったものなのか、参加することでおこりうる問題はなにかを説明しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒40％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

　冬季はお祭りが少なく、トレーニングや勉強会中心の活動になったため、メンバーのモチベーションの維持が難しかったです。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

　食事会やランチミーティング、個別のチャットでメンバー同士の交流や意見交換を定期的に行えるよう意識しました。参加したメンバーがやってみたいことを聞いて活動の中に取り入れました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

　はじめは学生の仲間が少なく、学外参加者のふたりにアドバイスをもらいながら進めていくことに不安がありました。お祭りのことを詳しく知っているわけでもなく、協力してくれる仲間も少なかったのでうまく活動を盛り上げていけるか心配でした。
　また、活動を申請している段階でも、国際的・宗教的視点からみた神道という自国の文化を多面的かつ複合的に分析して問題の解決策を練ることは非常に難しかったです。しかし、同時に、日本語・日本文化学類に所属した理由にもつながるのですが、日本とはどんな国か？という大きな問題に新たな視点から向き合い考えるきっかけともなりました。このことは、自分自身の知見を広げるという意味で勉強になったと感じています。

　活動を進めていくうえで、常に重視していたのは対話することです。留学生も多い活動ですし、宗教の問題にも絡むことを扱っていたため、参加者同士が何を考え感じているのかを聞き出すことに注力しました。時には言語や文化の違いからもどかしい思いをすることもありました。他にも、自分自身が日本文化を相手に押し付けているのではないか、相手の文化や言わんとしていることをくみ取れていないのではないかと不安になることもたくさんありました。活動中は、メンバーをまとめることや、不満やさみしい思いをするメンバーがいないかということで頭がいっぱいでとにかく必死でした。
　しかし、活動に参加してくれたメンバーはいつも協力的で、意見を求めたときはそれに応えてくれました。活動を一緒にしてくれるメンバーが増えていくことは、非常にうれしく、自分を認められているような気持ちにもなりました。大学生活の中で、これほど短期間の間に深く友人と語りあった経験は今までありませんでした。

　企画の段階から活動を終えるまで、常に不安や心配が心の中にありました。しかし、活動がつまらなかったということは決してなく、むしろ仲間たちと一緒に活動を考え実行していくことに喜びや楽しさを感じていました。
　活動を終えて得たことは、企画から活動までやり切れたという自分自身に対する自信と、どんな時も助け合えると思える友人を見つけられたことだと思っています。
　唯一の心残りがあるとすれば、お祭りに参加できる回数が計画より少なくなってしまったことです。
　コロナの影響で、どうしようもない問題だとはいえ、活動の活主動旨のと体し験てにおつ祭いりての楽しさを共有したいという思いがあったため、その点は悔しい気持ちがあります。

参加者への影響

　ランチミーティングや食事会をしたことで、活動に主体的に取り組んでくれるメンバーが増えたように感じます。
　また、宮田さんと小村さんの協力がなければできないことでしたが、甚句の意味の解説やお祭りの意味について一緒に学んでからほかの活動を行ったことで、活動への理解が深まったと感じます。
　お祭りという地域の人が長い時間をかけて大切に守ってきた文化の中に、私たちが学生というその土地の外の人間が入るという特別な経験をさせてもらっているという意識はメンバー全員で共有できたように思います。そういった文化継承をする人に対する礼儀や経緯を持つという意識付けができ、ひとりひとりが責任感をもってお祭りに参加できました。お祭りでお世話になった日本人の方たちとも交流ができ、温かく迎え入れてくださったことで、留学生にも日本滞在中の忘れがたい記憶となったようです。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

　T-ACT に挑戦した一番の収穫は、同じ目標や趣味をもって活動できる仲間ができたことです。
　企画の段階では、課題もあり難しかったり不安だったりしたこともたくさんありましたが、コンサルタントの

先生方が最後まで相談に乗ってくださいましたし、活動を続けることで協力してくれる仲間もでき、やりきることが出来ました。
　私自身、それほどアクティブな性格ではないので、はじめの一歩は勇気がいりましたが、活動に挑戦したことに悔いはないです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
　ひとりで頭の中で計画を練るだけではできなかったことが、きちんと活動として認められたことに満足感があります。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

Higa Coffee 1.5（19034A）

T-ACT プランナー　芹川　聖頼（教育研究科修士課程2年）

活動目的

【活動目的】
　最適な一杯を探すためのデータベースづくりとその運用
【活動目標】
⑴ Higa Coffee 1.0を追体験し、課題を認識する。その解決のための戦略を考える。
⑵ Higa Coffee 2.0 を提案する
【動機】
「Higa Coffee 1.0」（～2019年11月）の修正と継続
＜主な反省点＞
・スタッフの不足により、DB を活用した選択の場という趣旨の周知を徹底できなかった。
・DB システムに無駄が多く、エラーも多かった。
・当日のスタッフの動きについて、マニュアル化が出来ていなかった。
・スタッフの役割分担に失敗し、一部のスタッフに過剰な負担がかかってしまった。

具体的な活動計画

【活動計画】
・定期的にコーヒーを飲むためのミーティングを開催し、Higa Coffee 1.0を追体験する。また、その問題点を見出し改善する。
⑴コーヒーを飲み、そのデータを収集・蓄積する→ DB の拡大と充実を図る
⑵コーヒーの抽出とデータの入力を同時に行う（主にフレンチプレスを想定）→イベント時の流れを把握する
⑶ Higa Coffee の活動改善に資することを自由に話し合う
・上記活動を踏まえて、Higa Coffee 2.0 の提案を検討する。

活動場所

グローバルヴィレッジ コミュニティステーション２階キッチンを中心に検討中

活動期間

2019/12/01～2020/05/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：太田ななこ（芸術専門学群2019年度卒業）、山口紗奈子（教育研究科修士課程２年）、竹内嶺（教育研究科修士課程２年）、中村柊斗（教育研究科修士課程２年）、島亮平（教育研究科修士課程２年）、安慶名夏鈴（生命地球科学研究群博士前期課程１年）、井上智博（生命環境科学研究科博士前期２年）、丸子さくら（社会工学類２年）、菊池和弘（応用理工学類２年）
P：唐木清志（人間系）

備考

・Higa Coffee 1.0と違い、コーヒーを提供する対象をスタッフに限定する。それに伴い、食品取扱出店届は申請しない。

活動報告

実際の活動内容

　本企画は年度を跨いで行われた。便宜上、昨年度（2020年12月～３月）と今年度（2020年４月～５月）とに分けて活動を記したい。

　昨年度は全６回ミーティングが行われた。活動内容として次の二つである。第一に、コーヒーを飲んでレビューを投稿することである。98のレビューを蓄積することが出来た。第二に、Higa Coffee 1.0の企画内容を追体験した上で、2020年度も活動を継続するか検討することである。これは丸子（当時学群１年）を中心に継続するという旨で大きな合意を得ることができた。

今年度は、全９回ミーティングが行われた。また、コロナ禍の影響を受けてオンラインでのミーティングに以降した。議題は様々であるが、サークル化申請、学園祭の予算作成、ロゴの作成、サイトリニューアルのための動きなどである。ロゴの作成に関しては西城（芸専）、サイトリニューアルについては杉山（メ創）・志賀（芸専）などと協力しつつ活動している。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

コロナ禍の影響から、データの蓄積が捗らなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

オンラインでのミーティングに移行した。また当初2019年度内の活動を予定していたが、活動期限を上限の５月まで延長し、HigaCoffee2.0で行おうとしていた活動を行った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

Higa Coffee 1.0と比較して、活動主体が増えたため分担できるようになった。このことは、効率よくデータを蓄積できるだけでなく、活動の幅を広げることも可能にした。

運営は在学期間が長く意欲的な学生に、ロゴの作成は平面レイアウトが得意な学生に、UI の提案は Web デザインが得意な学生に、運用フローはシステム開発を得意とする学生に、という具合に役割を分担した。同時に、「時々コーヒーを飲むくらいでいいや」という具合にライトに関わりたいという構成員のニーズにも対応できるよう工夫した。

“If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together”という何処かの諺を想起することもしばしばであったが、together の方が活動の質も向上するので、そのことを鑑みると一概にスピードが落ちたとも言えないなあなどと考えた。

参加者への影響

参加者にどの程度ポジティブな影響を与えることが出来たかどうか、正直わからない。
しかしロゴやサイトの UI を考える活動などを通して、この団体や活動への愛着のようなものは少しずつ形成できているのではないかと思う。しかしこれはプランナーである私の「願い」に過ぎないかもしれない。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

企画目標を実現できるかどうか、というところに価値を置きすぎると迷子になる。企画目標を目指すに当たって「私一人で何が出来るのか／出来ないのか」「誰に頼れば私一人では出来ないことを実現できるのか」といったことを吟味することになると思うが、そんな経験を通じて、相互理解が深めるという点にも価値を見出すことが出来れば、きっと「やって良かった」と思えると思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

Higa Coffee1.0と比べると、支援を求める機会が少なかった。これは偏に活動内容の違いによることだと思う。以前どこかで書いた気もするが、「何者であることも強要されない」というところが T-ACT の最大のメリットであると思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

OB・OGによる選考対策講座（19035P）

T-ACTプランナー　川島　正義（就職課）

活動目的

・就職活動支援を、すこしでも学生自らがかかわり実践することで、企業や社会に接することができ、自立した就職活動ができるようにするため。
・OB・OGと学生の交流を深めるため

具体的な活動計画

・OB・OGの選定
・OB・OGへの依頼
・OB・OGとの連絡
・学生の集客
・会場手配、運営
・アンケート収集、分析

月一回、就職課で実施している就職活動実践講座が満員になる時期
実施スケジュール：以下のとおり
・開催日：2020年1月26日（日）13：00〜17：10（予定）
・対象：筑波大生 全学群・研究科 全学年対象（おもに学群3年生と修士1年）
・内容：ES添削、模擬面接と座談会
・参加企業：3〜4社 いずれもファシリテーターとしてOB・OGの皆様の参加を予定しています。
・スケジュール（変更の可能性があります）
　1．挨拶（就職課より）13：00〜13：05（5min）
　2．ES添削 13：05〜14：20（75min）
　　当日持参したエントリーシートをグループ全員で読み、OB・OGの皆様が作成者にフィードバックします。1社最大10名を担当。
　3．面接：模擬面接 14：45〜16：00（75 min）
　　個別面談か、集団面談の模擬面接（参加人数による）を実施し、OB・OGの皆様が作成者にフィードバックします。1社最大10名を担当。
　4．座談会：16：10〜17：10（60 min）2ターム
　　学生と大いに話をしていただきます。1、2年生にも参加可。

活動場所

3A棟207教室

活動期間

2019/12/20〜2020/06/19

対象

学生

T-ACTオーガナイザー／パートナー

O：長谷川航成（人文学類4年）、杉山寛大（障害科学類2年）

備考

予算およびOB・OGの選定については、就職課の管理で実施いたします。

活動報告

実際の活動内容

実施日時：2020年1月26日（日）13時〜17時30分申込者：のべ56名、
・ES対策 30名/30名（定員）
・面接対策 26名/30名（定員）
　当日参加：のべ47名
・ES対策 26名

・面接対策 21名
　内アンケート回答は22名
● ES 対策、面接対策ともにキリン HD を第 1 希望とする学生が多かった
・企業の希望を記載した20名中16名がキリンを第一志望としていた。
・参加学生のうち生命環境科学の学生が 7 名（31%）と多かったのは、キリンを志望する学生が集まったためと思われる。
　→集客のためにはキリンと同等程度の人気企業が必要である。また、企業によって参加する学群、研究科が偏る傾向があると思われる。
● ES 対策編での評価では「どちらともいえない」「あまり役に立たない」が 4 名いた。
・OB・OG へのレクチャー不足があった。良いところを伸ばそうとするフィードバックをより、改善点を中心としたフィードバックを学生は望んでいる。パレスホテルの人事担当者は前者中心のフィードバックを実施していて、ポジティブな評価をうまく表現し、優しく伝えていて良かったと感じたが、学生の満足度は高くなかった。
　→ ES は企業によって位置づけが違う。また、人事担当者の個別でもフィードバックの違いがある。
●面接対策編での評価は、総じて満足度は高かった。面接は各企業が最も重視しているため、企業ごとのブレも少ない。時間の制約から、個人面接を立候補した 2 名に限り実施し、「個人面接をやりたかった」という回答もあった。パレスホテルでは 5 名が立候補したが、結局2 名を指名して実施した。
　→面接対策はやはり個別面接を全員が実施できるとよいと感じた。その場合は ES の事前提出をしてもらい、前もって就職課と OB・OG が確認をすると良いかもしれない。
●座談会は面接対策後、そのまま第 1 クールの座談会という流れで実施した。第 2 クールの座談会では、自由に選択できるようにしキリン8 名、パレスホテル 1 名、物材研は 0 名であった。
　→座談会ではざっくばらんにリラックスした雰囲気で学生らが質問をしていた。面接からの流れについても否定的な意見はなかった。2 クール目でもキリンの人気が際立っていた。終了後も 1 時間近く歓談する姿が見られた。
●休日開催
　アンケート回答の22名中17名（77%）が休日開催をよかったと答えている。
　→休日にわざわざ大学に来るかという懸念もあったが、集客面と満足度の点からも問題はなかった。
● T-ACT の利用
・当初からパートナーとして参加していた 2 名の学生が参加した。
・実施当日は 1 名に参加してもらい、設営から運営まで手伝ってもらった。
・反省会では、さまざまな意見がでたが、ソフトバンクの ZOOM による WEB 会社説明会に参加していた学生から、今回の OB・OG による選考対策講座を ZOOM でやったらどうかという貴重の意見をいただいた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
　当日、プリンターの調子が悪くなった。
解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
　パートナーが助けてくれたので、間に合った。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
　学生と一緒に取り組むのは貴重な体験であった。
参加者への影響
・反省会では、さまざまな意見がでたが、ソフトバンクの ZOOM による WEB 会社説明会に参加していた学生から、今回の OB・OG による選考対策講座を ZOOM でやったらどうかという貴重の意見をいただいた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
学生の視点は、とても貴重であった。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
学生の意見により、オンライン化の道筋がいち早く着手できた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト Vol.2（19036P）

T-ACT プランナー　澤田　浩子（人文社会系　准教授）

活動目的

筑波大学やその周辺の研究学園地区では、留学生・外国人研究者の受け入れ拡大に伴い、夫婦や子ども連れで来日したり、来日後に結婚・出産をしたりして、子育てをしながらつくばで暮らす外国人の世帯が増えています。

教職員・学生・大学院生と子育て家族がチームになって懇話会開催を企画し、子育て世帯の外国人にとって、つくばでの生活に必要な情報や、子どもの教育等に関して困っていることなどを共有し、課題の解決にむけて一緒に考えることを目指します。

具体的な活動計画

1．活動内容

学内の留学生会などを通じて、子育てをしている留学生や外国人研究者に呼びかけ、懇話会を企画します。子育て家族同士のネットワークづくりと、そこでの意見交換により、子育てや教育に関する課題の共有と解決に向けた話し合いを行います。

前回のプロジェクトでの懇話会の実施を通じて、母語別に実施する方が話しやすいこと、おおよそ同じ年齢・学年の子供を持つ保護者に集まってもらう方が課題を共有しやすいこと、などの知見が得られた。今回のプロジェクトでは、例えば「保育園・幼稚園の入園準備」などのテーマを設定した懇話会などを試みたいと思います。

2．具体的な実施方法

今回のプロジェクトでは、オーガナイザー学生が主体となって企画を立て、プランナー、パートナー教員が適宜サポートをする方法で進めます。

半年間の期間内で、土日祝日・春休み中・夏休み中を使い、合計で５回程度の実施を予定しています。また、各回２時間程度を予定しており、10〜20名程度の留学生・外国人研究者とその家族の参加を見込んでいます。懇話会のタイムテーブルは以下のように考えています。

開始〜10分：互いの自己紹介
10分〜１時間：親子で楽しめるゲーム会
１時間〜２時間：ふだんの生活で困っていることなどの聞き取り

3．活動スケジュール

２月　新メンバー募集、オーガナイザー学生によるチーム編成、懇話会企画
３月　第２回懇話会の実施
４月　新入生募集
5-7月　懇話会の実施（５回程度）

活動場所

スチューデントコモンズ・人文社会学系棟・一ノ矢宿舎交流室等

活動期間

2020/02/10〜2020/08/10

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大城ひろ乃（日本語・日本文化学類３年）
P：松崎寛（人文社会系）、井出里咲子（人文社会系）

備考

必要となる経費については、教員の個人研究費、またはプロジェクト予算等より支出する。

活動報告

実際の活動内容

1．活動メンバー呼びかけ

学生オーガナイザーが中心になって、「つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト」の WEB サイトを開設、Google フォームで随時、活動メンバーを募集する仕組みを作り、チラシ、Facebook、Twitter 等で広報した。

8名のメンバーが登録してくれ、合わせて12名のメンバーで、2020年2月より活動を開始した。

2.「つくば日本語支援プラットフォーム」への参加

つくば市教育委員会、つくば市国際交流協会、日本語ボランティア団体、筑波学院大学、筑波大学とで構成する「つくば日本語支援プラットフォーム」が2020年2月25日に開かれ、学生メンバーが参加した。つくば市国際交流協会が中心になって進めている「日本語プレスクール・プレクラス」（就学前や編入学前の外国人児童生徒の日本語レベルチェックテストや、その保護者への学校説明などのサポートを行うイベント）の協力体制について話し合った。「日本語プレスクール・プレクラス」は2020年3月下旬の開催を予定していたが、コロナウィルス感染症拡大の影響で中止になった。

3.「第2回子育て家族のための懇話会」の企画

留学生や外国人研究者の子育て家族どうしが情報を交換できるようなネットワークづくりの企画として、2019年11月に実施した第1回懇話会に引き続き、第2回懇話会を企画した。第1回懇話会に多く参加してくれた中国人家族を中心にネットワークをさらに広げる目的で、今回も中国人家族を主な対象として企画した。2020年3月14日開催の予定で、会場の予約、ポスターの作成、掲示・配布などの広報を行なったが、コロナウィルス感染症拡大の影響を考慮して中止とし、その後、再開することができていない。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒10％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

3月ごろからコロナウィルス感染症拡大の影響で、予定していた懇話会や、日本語プレスクール・プレクラスが、いずれも中止になってしまったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

早めにオンラインでの活動に気持ちを切り替えて、活動の計画を立て直せばよかったのだが、オンライン授業の対応など初めての経験の中で、なかなか活動再会に気持ちを向けられなかった。その結果、当初の活動の意気込みを取り戻すことができなかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

本プロジェクトのvol.1は、教員が活動を立ち上げ、学生に声をかける形で進めたが、今回のプロジェクトvol.2は、学生が主導して企画・組織する形で新たなスタートを切った。オーガナイザーの大城ひろ乃さんは非常に精力的に進めてくれ、WEBサイトを立ち上げてメンバーを随時募集できる仕組みを作ってくれたり、Slackなどのオンラインアプリを活用してメンバーを組織化して情報の流れをスムーズにするなど、新たな工夫を取り込んでくれた。そこで学生・院生メンバーが生き生きとやりとりをして活動を進めている様子は、大変頼もしく思った。今回、コロナウィルス感染症拡大の影響で、企画していた活動は全て中止となってしまったが、このような学生の組織力、企画力、実践力を見せてもらえたことは、私自身とても勉強になったし、勇気づけられた。

その一方で私自身は、活動休止後、再開に向けてエネルギーを投下できないまま春学期を過ごしてしまった。この活動に関心を持って集まってくれたメンバーのことを思うと、不測時こそしっかりサポートして活動の場を維持する必要があったにもかかわらず、自分の力不足を痛感するとともに、申し訳なく思う。

参加者への影響

今回は、プロジェクトvol.1の活動報告を見て関心を持ってくださった院生の方々も加わり、新たなネットワークが広がった。学類生が、日本語教育等に関して専門的に研究・活動をしている大学院生と協働して活動を進める大変貴重な場となった。今回は、その場を十分に活かしきれなかったが、ぜひ次につなげていく努力をしたい。また、地域の小中学校の日本語ボランティアなど、別の形で関連する活動を継続してくれている学生メンバーもいて、波及効果が感じられる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

不測の事態にも備えること。困ったときは、メンバーの力を最大限頼ること。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACTサイトを見て学内の職員の方からも連絡をいただいたりなど、ネットワークが広がったのは、T-ACTならではだと思います。また、T-ACTのスタッフの方々にはいつも色々なご助言をいただいたり、広報などでサポートしていただけるので、とてもありがたいです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

つくメイク！（19038A）

T-ACT プランナー　青木　勇樹（情報科学類2年）

活動目的

メイク・ファッションの楽しさを共有したい、メイク初心者の人にも楽しさを伝えたい、という思いから企画した。

自己実現の手段としてメイクは重要だが、本学では情報が少ない。そのため本イベントを通して情報の共有ができるという意義がある。また、メイクはファッションなどの様々な領域に関係しているので、コミュニティどうしの交流を活性化できる。

具体的な活動計画

新型コロナウイルス感染症の影響で第３回は中止になり、今後も開催できる見通しが立たないため、Microsoft Teams によるオンライン開催に切り替える。

Teams の会議に参加して、好きなメイク道具などを紹介したり、メイクの方法をレクチャーしたりする。

メイクやファッションについて自由に会話できます。

カメラをオンにしてメイク実演などを行っても OK です。 聞くだけならマイクやカメラなしでも OK です。

【当日の流れ】

19：00～ 開場 / 懇親会

20：50ごろ 解散

【参加方法】

Teams 登録コード ug4cg2q を入力してチームにご参加ください。または下記のチームの URL にアクセスしてください。

活動場所

オンライン（大学の Microsoft Teams）

活動期間

2020/03/01～2020/08/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：四元祐希（心理学類３年）、土居未奈（情報メディア創成学類３年）

P：土井裕人（人文社会系）

備考

運営者の持ち出しや T-ACT のレンタルで会の実施は賄うため予算は運用しない。筑波大学の Teams 組織に参加している人しか Teams には参加できないため、会議を荒らされるといったことはなく、荒らした方の学籍番号が記録される。

活動報告

実際の活動内容

3月に教室を借りて第三回を企画したが、新型コロナウィルス感染症の流行と緊急事態宣言発令によりできなくなった。その後、オンライン授業が開始し、学生も慣れ始めた頃に、Teamsを使ったオンライン会を開催した。しかし、画質の悪いウェブカメラ越しに伝えられることは限られるし、オンライン会議の性質上、登壇者以外は喋りづらく、参加者同士の交流はあまり見込めなかった。また、第三回で予定していた初心者向けメイク体験会のような、オフラインでしかできないことができず、初心者にメイクを教えるという目標達成はできなかった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒20％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者の意見などを直接聞けない

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

チャットに積極的に反応した

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

他者のメイクの意識や思いがわかった。イベント運営の大変さがわかった。

メイクについて知りたい人との繋がりを持てた。

参加者への影響

皆さんとご飯へ行ったりと、仲良くなれた

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACTを使うと教室を借りたり、学内掲示板に貼り付けられるので、おすすめです。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

学内のサイトに掲載できるので、信頼性が上がったこと

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒1

ゆうゆうゆう会 Vol.3（19040A）

T-ACT プランナー　澤井　雪乃（人文社会科学研究科国際日本研究専攻 博士前期課程2年）

実際の活動内容

活動目的

ゆうゆうゆう会は、吃音のある子ども達の交流会である。筑波大学近辺に住む吃音のある小中高生を招き、小学生は遊びを通した交流、中高生および保護者は座談会を実施している。2019年５月から T-ACT で活動を開始し、2020年２月までの間、毎月交流会を開催してきた。2020年度においても引き続き活動を実施したいと考えている。

継続して申請する「ゆうゆうゆう会 Vol.3」は、新型コロナウイルス肺炎（COVID-19）感染防止のためオンラインで開催する予定である。その上で、活動内容をより充実させつつ、2021年度以降の活動も見据えた引継ぎの体制を整えていく（以下、詳細）

１．オンラインでの実施

オンラインミーティングアプリ「zoom」を活用し、交流会を実施する予定である。学校が休校し友達と話す機会が減ることで、吃音の状態が変化している可能性がある。吃音の状態を共有したり、子ども達および保護者が抱える日常のストレスを共有したり、話合ったりすることは有意義であると考える。

２．吃音の話題を増やす

ゆうゆうゆう会 vol.2を実施するなかで、小学校高学年の一部の参加者から「吃音の勉強がしたい」「吃音について話したい」という声があがった。これまで、小学生は遊びを通した交流を実施してきた。今後は、希望者に限り、中高生の活動に一緒に参加させるなどして吃音について話し合う機会を作る。あるいは、小学生対象の活動自体に、吃音について勉強したり話合ったりする時間を組み込む。

３．引継ぎ体制

現プランナーおよびオーガナイザーは、ゆうゆうゆう会 vol.3を最後に運営から退く意向である。ゆうゆうゆう会 vol.3の終了後は誰が引き継ぐのか、引継ぎ者が見つからなかった場合はどうするのか等、今後パートナー教員と話し合う必要がある。

具体的な活動計画

【活動内容】

●日時：毎月第３日曜日10：00-12：00

●対象者：ゆうゆうゆう会に参加経験があるお子さんと保護者

＊セキュリティを強化するため、新規の参加者の募集はしない

●スタッフ：筑波大生、教員、言語聴覚士２名、茨城言友会の方（成人吃音の自助グループ）

●内容：

（開始５分前にスタッフ・参加者を zoom に招待）

10：00-11：00 子ども達の交流（近況報告、ゲーム、吃音クイズなど）

＊ PC 操作が必要であるため保護者にも入って頂く。

11：00-12：00 保護者の zoom お茶会（子育ての悩み、自宅での過ごし方など共有）

＊各交流会には教員あるいは言語聴覚士のスタッフが最低１人入るようにする

【その他の活動】

パートナー教員と、引継ぎに向けてミーティングを実施する。具体的には、①誰に引き継いでもらうのか、②その募集方法、③引継ぎ時期、④引継ぎ者が見つからなかった場合、などについて話し合う。

活動場所

オンライン上で実施。

活動期間

2020/05/17～2020/11/15

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：遠藤優（医学類３年）

P：宮本昌子（人間系）

備考

・zoom への招待は、パートナー教員の宮本先生に依頼する
・zoom 入室時にパスワード入力を義務付けるなどして、セキュリティに注意を払う。
・運営は、吃音の臨床経験がある言語聴覚士や教員にアドバイスを頂きながら行う。

活動報告

実際の活動内容

【概要】

○日時：毎月第 3 日曜日10：00～12：00
　10：00-11：00 吃音のある子ども達の交流会
　11：00-12：00 保護者とスタッフのお茶会

○実施日：

・6 月14日（日）第 1 回
・7 月19日（日）第 2 回
・8 月16日（日）第 3 回
・9 月27日（日）第 4 回
・10月25日（日）第 5 回

【活動内容】

　各回、活動の前半 1 時間は吃音のある子ども達と交流し、後半 1 時間は保護者とスタッフとの交流会を実施した。

　子ども達の交流会では、zoom 上でゲーム（ジェスチャーゲーム・ジャンケン等）をしたり吃音のワークに取り組んだりした。

　吃音のワークでは、自分たちの吃音の状態をグラフ化するワークや、吃音の状態を絵で表現する活動などを通して、子ども達が自分の吃音に向き合うきっかけ作りを行った。また、活動の後半では、保護者の方を交えてスタッフとの交流会を実施し、近況報告、吃音に関する情報、子育てに関する悩みなどを分かち合った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

　オンライン開催ということもあり、顔出しで参加することに抵抗を感じる参加者がいた。そのため、途中退出される方もいた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

　開催前に送っている案内メールで、顔を出さなくてもよいこと、ミュート参加でも問題ないこと、見学参加でも良いこと等を事前にお知らせした。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

　今回初めてオンラインで実施したので、最初はどうなることかと不安が大きかった。スタッフや宮本先生のサポートがあり、全 5 回の活動を乗り切ることができたと感じている。オンライン開催では、対面開催では感じられた和気あいあいとした雰囲気を出すことが難しく、どのようにリーダーシップを発揮すればよいか悩むこともあった。しかし、オンライン開催によってポジティブな面も生まれたと思う。例えば毎月行っていた教室予約や用具準備の作業が減り、リーダーの負担が軽減された。また、スタッフもわざわざ遠方から参加する必要がなく、スタッフの負担も大幅に軽減したと思う。

参加者への影響

　普段は引っ込み思案の、あるお子さんが、「ゆうゆうゆう会にまた参加したい」と言ってくれた。毎回参加してくれるようになり、スタッフに積極的に話しかけてくれるようになった。保護者の方いわく、ゆうゆうゆう会だけは積極的に参加するらしく、その子の変化を通してスタッフのモチベーションもアップした。また、オンライン開催ということもあり、全国から参加者が集まるようになり、ゆうゆうゆう会の活動が全国規模になってきた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

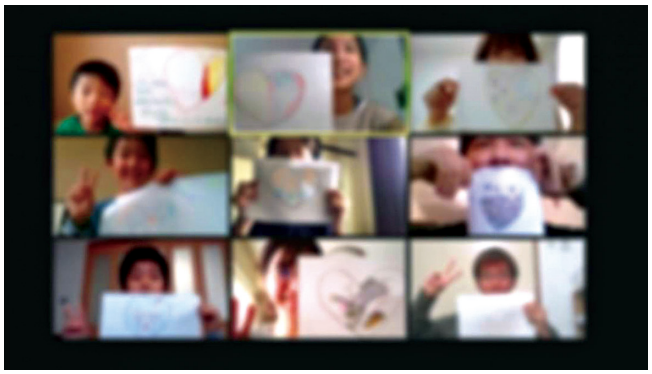
　やりたいという気持ちがあるのなら、是非行動に移すことをおすすめします。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

運営面に関して、アドバイスを頂けたので大変助かった。オンライン上でゆうゆうゆう会を継続すると決めたときも、快くサポートして下さった。また、オンラインで開催するにあたり、注意事項も教えて頂けたので助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4



BLUE ONE BEAT! 2020（仮19042A）

T-ACT プランナー　村上　達哉（人文学類2年）

活動目的

○動機

小学生、中学生、高校生の可能性は無限大であると思う。その可能性に気づけずに過ごしている児童、生徒は多いのではないだろうか。小中高生と触れ合い、自分の可能性に気づいてもらえるような機会を作りたいと思い、団体を設立した。

「普段は触れ合うことのない人やモノ、事柄に接すること」は「視野を広げる」、「興味、関心を生む」、「好奇心を育む」ことなどにつながると考える。そして、これらのことは小中高生が自分の可能性に気づくきっかけになるかもしれない。そのような考えの下、小中高生を対象として『記憶に残る経験』と『選択肢を増やす学び』が得られるようなイベントを作りたいと考えた。

今回は、地球規模の目標である SDGs（持続可能な開発目標）や今夏に開催を控えるオリンピック・パラリンピックをイベントのテーマにする。双方向的で体験型の要素も含めた学びの場を作りたい。また、大学生や地域の方々にも開かれたイベントにしたいと考える。

○来歴

2018 年に活動した「BLUE ONE BEAT ～可能性を拡げる～」では、小中高生を対象として『未来ディスカッション』というイベントを企画した。小中高生が多様な人々と交流し、自分の考えを深める ことができるような学びの場を作りたいと考えた。

2019 年に活動した「BLUE ONE BEAT!2019」では、茨城県教育委員会主催の「いばらき子ども大学」の事業の一環に携わり、小学校 4 ～ 6 年生を対象として SDGs を学ぶイベントを実施した。活動は筑波大学の SDGs に対する取り組みとして紹介された（https://www.osi.tsukuba.ac.jp/sdgs/ effort /effort-960）。

○目標

「小学生、中学生、高校生に『記憶に残る経験』と『選択肢を増やす学び』を提供する」

1．小中高生に他者との交流を楽しんでもらう
2．小中高生に地球課題やダイバーシティなど普段はあまり関わりを持たないことについて関心を持ってもらう
3．小中高生にとってイベントが自分の将来を考えるきっかけになる

○企画名について

企画名は「若者にとって胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いを持つ。ワクワクする学びの場を児童、生徒に届けたいという考えのもとこの企画名にした。

具体的な活動計画

○活動内容

・小学生、中学生、高校生を対象とするイベントを企画する。
・イベントは「普段は関わらない人や物事に関わる」ことで児童、生徒の「視野を広げる」ことを目的とする。
・ミーティングは週に一度の頻度で行う（毎週火曜日16：45 ～ / 中央図書館セミナー室）。

○企画しているイベントの内容

・茨城県県南生涯学習センター主催「子供の未来を考えるネットワークフォーラム in 土浦」内 SDGs 関連イベント（2/8 10 時～14 時、茨城県県南生涯学習センター）
＊目的：フォーラムの来場者に SDGs を知ってもらう
＊対象：主に土浦市内の小学校低学年
＊内容：県南生涯学習センターの募集で集まった高校生ボランティアとクイズラリー、SDGs ブースで来場者と交流する。SDGs ブースでは SDGs すごろくやクイズ大会を行う。（茨城県県南生涯学習センターの職員の協力の下）
・オリンピック関連イベント（6/28、7/12 13 時～16 時予定、BiVi つくば筑波大学サテライトオフィス予定）
＊目的：オリンピック・パラリンピックに関心を持ってもらう
＊対象：中学生（7/12）、高校生（6/28）
＊内容（予定）：オリンピック「体験型」のイベントを企画する。“東京2020 オリンピック”公式ライセンスゲーム『東京2020 オリンピック The Official Video Game™（対応機種 Nintendo Switch™）』を用いて参加者に実際に競技を体感してもらう。ゲーム機を用いた競技の体験だけでなく、オリンピックに関するワーク（個人ワーク、グループワーク）を行い学びも得られるようにする。オリンピック・パラリンピックの歴史や意義だけでなく、持続可能性やダイバーシティ & インクルージョンについても扱う予定である。
（筑波大学オリンピック・パラリンピック推進室、つくば市に支援をいただく予定です。）
＊タイムスケジュール（予定）：

13：00 ～ 団体の説明、自己紹介、イベントの趣旨説明
13：20 ～ アイスブレイク
13：40 ～ オリンピック・パラリンピックについて（クイズなども交え）
14：20 ～ 競技体験
15：00 ～ 持続可能性やダイバーシティについて（クイズなども交え）
15：40 ～ まとめ
○おおまかなスケジュール
２月　茨城県県南生涯学習センター主催「子供の未来を考えるネットワークフォーラム in 土浦」内 SDGs 関連イベント（2/8 10 時～14 時、茨城県県南生涯学習センター）
３月　企画、広報、準備
４月　企画、広報、準備
５月　企画、広報、準備
６月　オリンピック関連イベント【高校生対象】
（6/28 予定、BiVi つくば筑波大学サテライトオフィス予定）
７月　オリンピック関連イベント【中学生対象】
（7/12 予定、BiVi つくば筑波大学サテライトオフィス予定）
○イベント日程
2020年６月28日（日）13：00 ～16：00（予定）
2020年７月12日（日）13：00 ～16：00（予定）
（追記 2020/07/31）
・イベント「大学生と考える！スポーツと未来～つくばから世界へ～」は2021 年夏頃に延期になりました。
・つくば市オリンピック・パラリンピック推進室様、筑波大学オリンピック・パラリンピック総合推進室様のご協力の下、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会より東京2020 参画プログラム（応援プログラム）に認定していただきました。
・運営メンバーは引き続き募集しておりますのでお気軽にご連絡ください。
・ミーティングは ZOOM を用いて完全オンラインで行っています。毎週水曜日11：30 ～（30 分～１時間ほど）です。
・オリンピック関連のプロジェクトとともに、SDGs（持続可能な開発目標）に関するプロジェクト（ 小学生向けの動画作成）も進めています。興味がある方はこちらもメンバーを募集しておりますのでご連絡ください。

活動場所
ミーティングは ZOOM 上で行っています。
毎週水曜日11：30 ～（30 分～１時間ほど）です。

活動期間
2020/02/01～2020/07/31

対象
学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：安藤萌華（人文学類３年）、髙松柚子（日本語・日本文化学類３年）、田嶋尚晴（知識情報・図書館学類２年）、直井蒼太（教育学類３年）、西村大祐（人文学類３年）
P：大林太朗（体育系）

備考
○備品
基本的にはプロジェクターを用いて活動するため、プロジェクターを T-ACT からお借りします。
『東京2020オリンピック The Official Video Game ™』と Nintendo Switch™ はオーガナイザーが所持しているものを使用する予定です。
○予算

基本的に費用は発生しない予定ですが、イベントやワークショップにおいて費用が発生する場合は運営者負担とします。
〇ミーティング
毎週火曜日16：45 ～中央図書館のセミナー室で行います。
毎回のミーティングに来ることができない場合も活動には参加できます。
〇イベント
当日のイベントのみの参加（サポート / 観覧）も可能ですが、イベントのサポートをしていただく場合は打ち合わせや児童、生徒と関わるうえでの確認には参加していただきます。
〇倫理面のルール
・企画したイベントで知った個人情報は SNS 等にあげず第三者に口外しない。
・児童、生徒には徹底したルールをもって接する。

活動報告

実際の活動内容

SDGs の企画とオリンピックの企画の両輪で活動を行った。

【SDGs の企画】

・SDGs の企画では茨城県県南生涯学習センター主催の「子どもの未来を考えるネットワークフォーラム2020 in 土浦」に参加した。フォーラムは2020年 2 月 8 日（土）に土浦市の県南生涯学習センターで行われた。SDGs ブースを担当し、SDGs のクイズやすごろくを行った。10名の高校生ボランティアと協力してクイズラリーも行った。幼稚園生から小学校低学年の子どもたちと親御さんを中心とした70名以上の参加者と触れ合った。
・フォーラムの前には高校生ボランティアと SDGs についての理解を深める勉強会やクイズの作成を行った。フォーラムの準備として毎週のミーティングで低学年の小学生を想定した企画と関わり方を考えたほか、高校生ボランティアとの SDGs 勉強会の準備なども行った。（準備、本番はともにコロナウイルスが流行し、課外活動が制限される前の活動である。）
・「子どもの未来を考えるネットワークフォーラム2020 in 土浦」の当日の様子は土浦駅前でコミュニティスペースを運営する STATION LOBBY 様の「ステーションロビー通信 Vol.2」に掲載された。
・3 月には SDGs に関連した活動について筑波大学新聞の取材を受け、第355号に掲載された。

【オリンピックの企画】

・オリンピックの企画では、6 ～ 7 月にオリンピックに関連した小中高生対象のイベント「大学生と考える！スポーツと未来～つくばから世界へ～」を企画していたが、コロナウイルスの影響を受け来年2021年夏頃への延期を決めた。
・オリンピックの企画の準備はイベントの企画と外部連携を中心に行った。イベントは小中高生で別々の内容を考えた。国際オリンピック委員会公認教材「オリンピック価値教育の基礎（OVEP）」を活用したコンテンツを予定していた。
・外部連携に関して、筑波大学オリンピック・パラリンピック総合推進室、つくば市オリンピック・パラリンピック推進室にご協力をいただき、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会より東京2020参画プログラム（応援プログラム）に認定していただいた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒65％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

【SDGs の企画】

・企画：小学校低学年にどのように SDGs を伝えるか悩んだ。高校生ボランティアに対しても勉強会という関わりで何を提供するかについて悩んだ。
・外部連携：先方と企画の擦り合わせがうまくできなかった。
・参加者との関わり：社会人の方を想定した企画ではなかったため社会人の方への対応がうまくできなかった。

【オリンピックの企画】

・企画：小中高生を対象にした場合にどのようにイベントを構成するか悩んだ。また、提供したいコンテンツが多く、どれを優先すべきか、その時間配分も含めて悩んだ。
・準備：コロナウイルスの影響を受けて、対面での話し合いやミーティングを避けたためメンバー間で連携がうまくとれない面もあった。
・外部連携：自分たち主催のイベントにするか、つくば市主催のイベントの一部にさせていただくか悩んだ。

【団体運営】

・役割分担：役割分担がしっかりできていないときもあった。
・内部広報：大学構内で活動できないため内部への広報手段に困った。
・活動の仕方：コロナウイルスによる制限がある中でどのように活動するか悩んだ。
・ミーティング：オンラインのミーティングの進め方に関して、話の振り方や意見の仕方で少し苦労をした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

【SDGs の企画】
・企画：メンバーで意見を出し合って企画を考えた。小学校低学年に対して、取り組みやすいすごろくやクイズを活用して SDGs についての理解を深めてもらおうと考えた。高校生ボランティアに対しては大学生との交流、身近なことと関連付けた SDGs の理解をしてもらおうと考え、大学生を含めたグループワークで SDGs を学びながらクイズ作成をしてもらった。
・外部連携：自分たちがやりたいことをまとめ、疑問点や課題点をしっかり伝える。
・参加者との関わり：企画の段階で対象を考慮し、準備をしておく。

【オリンピックの企画】
・企画：小学生、中学生、高校生を対象に別々のイベントを設定し、対象に合わせてイベントの内容を変えた。イベントはパートナーの大林太朗先生のアドバイスを参考にさせていただき、国際オリンピック委員会公認教材「オリンピック価値教育の基礎（OVEP）」を中心に考えた。
・準備：メンバーの話し合いだけでなく、先生や外部の方との話し合いも定期的に行うようにする。外部の方には事前にその旨を伝えるようにする。
・外部連携：つくば市主催のイベントの一部にさせていただき、現在もサポートをいただいている。

【団体運営】
・役割分担：やるべきことを話し合い、一部のメンバーに負担が偏らないように役割分担をする。だれでも意見を言えるような時間をミーティング等に設ける。
・内部広報：Twitter を活用して内部向けの広報も行った。オンラインイベントの開催も計画した。
・活動の仕方：対面の活動を止め、オンラインでの活動に切り替えた。また、オンラインで小中高生に対してできること、オンラインだからこそできることを話し合った。
・ミーティング：顔出しやミュートは自由にしている。話し合いの際は全員の意見を聞くようにした。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

◎運営メンバーの感想、気づき
・「春の SDGs イベントは、高校生に教えるのではなく、共に学ぶことを重視し、新たな視点の獲得をすることができたと思います。また、その成果をイベントの中で実践することもでき、良かったです。また機会があれば参加したいと思います。」
・「土浦教育フォーラムでは、小学生などを対象に SDGs をすごろくなどのゲームで紹介することで、興味を持ってもらうことを目的にワークショップを行った。スタンプラリーや講演の合間に立ち寄る子供や保護者が大半だったため、なかなか長時間立ち止まって準備したゲームで楽しんでもらうことは難しかった。だが、取り組み自体は講演を聞きに来た教育関係者にも評価いただいたところであり、今後も実施形態を改善しつつ再挑戦したいと考えている。」
・「SDGs というテーマをより低い年齢層にも身近に感じてもらうことを趣旨として行った活動では、SDGs に対する多種多様な認識に触れ多面的な視野をもつ重要性に改めて気づくことが出来ました。」
・「オリンピック関連のイベントに関して、オリンピックをより広い層の人々に知ってもらうことでより楽しんでほしいという目標を自分なりに設定して、会議に臨んだ。ゲームを用いてのレクリエーション作りや市との連携も視野に入れた企画作りは画期的なもので自分にとっても良い経験だった。企画が実施できなかったのは残念だが、機会を見てより良いものにブラッシュアップした形で実施することを目指したい。」
・「主に新入生の勧誘を目的に Twitter 運営に携わりましたが、新型コロナウイルスの影響で新歓ムードも生まれず、Twitter に関しては手応えもほとんどないまま上半期が終了しました。活動が行えない今は企画を水面下で進める準備段階なので、ミーティングの様子などを発信しつつ、このような状況でも様々な方法で積極的に行動し続けている団体であることが伝わるよう、今後も発信を続けていきます。」
・「今回の企画はコロナ禍が大きな課題としてあった。SDGs の企画は 2 月上旬に行うことができたが、オリンピック関連の企画は準備をしてきたが実施はかなわなかった。どちらの企画も活動を快く認めていただける方々に恵まれていたと思う。学生だけではできない取り組みをさせていただけていることに感謝したい。コロナ禍において活動形態などに大きな制限があった。制限の中でできること、このような機会だからこそ生むことができる価値をメンバーみんなで考え、アクションを続けたい。」

参加者への影響
・「子どもの未来を考えるネットワークフォーラム2020 in 土浦」の来場者の方には SDGs に少しでも興味を持っていただけた。特に、親子で SDGs のクイズラリーをやってもらい、楽しみながら SDGs を知ってもらえた。

・高校生ボランティアの方々にはSDGsの理解を深めてもらっただけではなく、大学生との交流を数多くしてもらった。普段は関わらない人と話すことができ、印象深い思い出になったのではないかと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「成功の反対は行動しないこと」という言葉を耳にしました。コロナ禍、アフターコロナにおいては多くの制限があると思います。「制限」と聞くと、行動できないのではと思うかもしれませんが、制限の中でもできること、制限の中でこそみえてくることもあるかもしれません。T-ACTは自分が「やってみたい」ことを試せる場であり、そのチャレンジを温かくサポートしていただけます。

自分の中に「やってみたい」ことがあれば、一歩踏み出してみるのも良いかと思います！

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

手厚くサポートをしていただける点。BLUE ONE BEAT!はこれまでに3企画申請をしてきたが、どの企画でもやってみたいことについて話を真摯に聞いていただき、アドバイスやサポートをしていただきました。いつもありがとうございます。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

Higa Coffee 2.0（20001A）

T-ACT プランナー　芹川　聖頼（教育研究科2年）

活動目的

【目的】コーヒーに関するデータベース拡充を目指す活動の維持・発展

コーヒーの提供者と消費者とが協働して DB をつくりあげること。また、DB を手掛かりとして、消費者に「ぴったり」なコーヒーを一緒に探すこと。これが我々 Higa Coffee の活動理念である。

この企画は、Higa Coffee 1.0（承認番号19022A、2019年 8 月～11月）、Higa Coffee 1.5（承認番号19034A、2019年12月～2020年 5 月）に続くものである。それらの活動内容について手短に記すと、前者は「DB システムの開発とイベントの実施」、後者は「活動を持続するか否かについての検討」であった。後者において、持続を希望するということで合意が得られたものの、そのための課題は少なくない。それを克服するために立ち上げたのが本企画である。具体的な目標は下に譲る。

【目標】次の 4 つの小目標を達成することで、ヒト・モノに関する課題を克服する。

①新規メンバーの獲得（備考欄参照）
②学園祭への出店（学園祭中止に伴い断念）
③サークル化（備考欄参照）
④組織体制の確立

【動機】

データベースの拡充を目指す活動を持続・発展させることを望んだ際、2021年 4 月に人的・物的危機に直面することは明らかである。人的観点から見れば、組織構成員の半数が卒業・修了を迎える。物的観点から見れば、これまで設備を持ち出していた芹川が不在となる。

具体的な活動計画

■新規メンバー獲得について

小目標①達成のため、Twitter や HP を随時更新する。Instagram・Facebook・LINE 等の SNS や、ポスター・ビラの活用も検討する。

■学園祭について（学園祭中止に伴い断念）

小目標②を達成するための小目標を設定し、小目標ごとに活動計画を立て、メンバー間の連携をしながら進める予定であった。しかし、雙峰祭中止が決定されたため断念した。

▶事務的な諸手続き…… 直近で最大の課題は 5 月末の企画書提出。（丸子）
▶ DB 用サイトの新設 …… 7月末を目安に新設、8 月以降は試用期間。（杉山）
▶運営スタッフの確保 … ミーティング時に随時、抽出・入力の練習。（安慶名）
▶広報活動… ポスター作成・Twitter 運営など。

■サークル化について

小目標③を達成するための手続きを、丸子を中心に随時進める。その際、課外活動団体への道を見通す。

■組織体制について

小目標④を達成するため、グループごとに課題を設定する。

▶ Farmer（中核的な役割を担う。ミーティング原則参加）

役割分担を進める（広報、会計、Web デザイン、システム）。広報（ポスター作成を含む）担当者と会計担当者を可及的早急に選出する。Web デザイン（DB 用サイトや HP についての提案）担当者は 5 月末を目安とする。

▶ Ambassador（抽出担当。ミーティング自由参加）

可及的早急に代表者を選出する。7 月末を目安に文化祭スタッフ候補者を募る。— 8 月以降は DB 用サイトへの意見を発信し、サービス向上に努める。

▶ Drunkard（データの蓄積担当。ミーティング自由参加）

ミーティング時に、出来るだけたくさんコーヒーを飲んでレビューを投稿する。

活動場所

新型コロナウイルス感染症対策として、週 1 回の全体ミーティングは当面の間 Zoom を利用した Web ミーティングとする。

活動期間

2020/06/01～2020/11/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：丸子さくら（社会工学類２年）、井上智博（生命環境科学研究科博士前期課程２年）、島亮平（教育研究科修士課程２年）、安慶名夏鈴（生命地球科学研究群博士前期課程１年）、中村柊斗（教育研究科修士課程2 年）、傑田勇斗（生命地球科学研究群博士前期課程１年）、増田甚八（生物資源学類４年）、志賀英人（ 芸術専門学群４年）、西城裕太（芸術専門学群３年）、開發功太郎（情報メディア創成学類３年）、日浅翔太郎（医学類１年）、南健太（応用理工学類２年）

P：唐木清志（人間系）

備 考

団体参加希望者は、次のいずれかの方法で連絡をお願いいたします。

① Twitter アカウント（@HigaCoffee）の DM

②団体 HP に設けた Google フォーム

③団体メールアドレス（higa.coffee@gmail.com）

なお、新型コロナウイルス感染症拡大への影響が懸念される活動については、その際の社会状況を鑑みて実施の可否を判断する（実施の１週間前に T-ACT に実施の可否を最終確認し、それに従う）。

活動報告

実際の活動内容

Higa Coffee2.0は当初、次の４つの目標を立てていた。すなわち、①新規メンバーの獲得、②学園祭への出店、③サークル化、④組織体制の確立である。②は学園祭の中止に伴い断念したが、①④は一定程度達成し、③は予定通り達成することが出来たと考えている。

①の新規メンバーの獲得については、大々的な勧誘活動が出来ないため苦戦した。コーヒーに関心のある学生を対象に SNS を通じて発信したり、専門的な技術が求められるデザインやシステムを担いうる学生を対象にメッセージを配信した。結果、学群１年生を含む７名が新たに加えることが出来た。

③のサークル化は、コロナ禍にも関わらずスムーズに申請が通り、７月１日に目標を達成した。したがって、Higa Coffee2.0の活動期間は（６月～11月）のほとんどは、実質的には T-ACT としての活動ではなくサークルとしての活動であったと捉えている。それに伴い、代表を丸子に引き継ぎ、感染対策を講じながら活動の幅を広げた。

④の組織体制の確立については、とりあえず来年度主導的に動いてくれるであろうメンバーに引き継ぐことが出来たため、及第点だと考えている。一方で、活動の幅が広がり、デザインやシステムに関する専門性が向上したため、引き継ぎの難しさが増大した印象を受けている。来年度以降もしばらくは、新規メンバーの獲得および引き継ぎの問題に直面すると思う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

a：学園祭の中止

b：T-ACT による INFOSS の指示

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

a：サークルとしてのアイデンティティを活用することで解決を図った。学園祭への出店という目標を失った中、この方針を取らなければ、今頃引き継ぎも上手くいかず、新規メンバーも獲得できず、頭を抱えていたと思う。

b：利用しているツール（Slack）において、全ての構成員に提出を呼びかけ、呼びかけに応じた人をプライベートチャンネルに招待した。 結果、いたずらに排他的になることなく、運営を続けることが出来たと考えている。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

思い通りに進むとは限らないことの楽しさを知ることが出来た。このことが、Higa Coffee としての活動における最大の収穫だったように思う。

これまで T-ACT の承認を受けて一年以上にわたって活動を続けてきたが、決して順風満帆だったわけではない。「コーヒーデイズ」におけ る資金繰り、活動継続にあたっての人的・物的資源の不足、コロナ禍に伴う計画の変更など、様々な問題に直面してきた。これらの問題は予め想定していたものではなく、都度、手持ちの資源

とアイディアで場当たり的に対処してきた。一つの問題を解決するとまた新たな問題が立ち現れるため、常に何かに悩まされてきたし、今も、これからもそうであろうと思う。

しかし「思い通りに進まないかもしれない」という危険性に身を晒すことは、思い通りに進んだ時の喜びを増幅させるし、予想以上にワープする可能性を開く。……このように記すと陳腐であるが、それを経験に基づいて語ることが出来ることは、有り難いことだと思う。叩き割らんばかりに石橋を叩きがちな私の傾向を鑑みると尚更である。

思い通りに進むとは限らないことは、アサーティブなやりとりの特質らしいが、嗜好品や課外活動は、それを楽しみやすい領域なのだと思う。それを楽しむこと、すなわち自分とは違う感じ方をする他者を異質なままで尊重することは、きっとこれから求められる能力なのだろうと思う。その領域を拡大させ、その能力を高めることが「大人になる」ことなのかも知れない、などとあれこれ考えさせられた。

参加者への影響

「私のどの働きかけが他の参加者にこんな影響を与えた」などと明示的に語ることは出来ない。しかし、来年度の活動を担う人が居なかった状態から、居る状態になったことは重要な変化だと思う。現在の活動において、丸子さんが運営を、西城さんがデザインを、開發さんがシステムをリードしてくれていることはその象徴である。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

思い通りにいかない状況を楽しんでください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

情報倫理の必要性に異議を唱えるものではありませんが、INFOSS 提出の意義に関する疑義は払拭できません。T-ACT として活動することを 検討する学生の障壁にならないことを願っています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

筑波の春を取り戻せプロジェクト（20002A）

T-ACT プランナー　水谷　奈都乃（教育学類1年）

活動目的

新型コロナウイルスの蔓延に伴い、私たち2020 年度入学者はキャンパスでの合格発表や入学式への参加が叶いませんでした。そこで、学生主体で実施するという意味を込めて「入学祝賀式」として自分達なりのイベントを行いたいです。加えて、例年の様式を踏襲するというよりも「これをやりたい！」という意見を参加希望者から募り、それを反映できればと考えています。

しかし寄せられる意見への対応や周知のことを考えるとアイディア募集とイベント実施は切り離すべきであるという結論に至り、まずはその第一弾として SNS を用いたアイディアの募集を行うこととしました。

具体的な活動計画

入学祝賀式を行うための前段階として、SNS 上で企画内容のアイディア募集を行う。その際はイベント自体の活性化を狙い、真剣に実現を望むものからユーモアに富み笑いを誘うものまで広く募る。

6 月13 日：SNS を用いた企画内容の周知＆アイディア募集開始

アイディア募集に関しては、その時点では期限を明記せず「寄せられたアイディアに関しては時期や内容を鑑みて判断を行うため、実現を保証することはできません」と明記しておく。

活動場所

Twitter

活動期間

2020/06/13～2020/12/12

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：田宮保孝（教育学類 1 年）滝口理奈（教育学類 1 年）増村裕（障害科学類 1 年）良本翠（教育学類 1 年）安田彩乃（心理学類 1 年）小山田琴美（障害科学類 1 年）遠藤友咲（社会工学類 1 年）

P：遠藤優介（人間系）

活動報告

実際の活動内容

新型コロナウイルスの蔓延に伴い2020年度の新入生向け行事の多くが中止されたことを受けて、それらを学生主体で実施することを目指した。当プロジェクトではその前段階として、SNS 上で企画内容のアイデア募集を行った（6 月13日：企画内容の周知＆アイデア募集開始）。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒60％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

活動範囲が SNS 上に限られるなかで、如何にして知名度を高め学生を巻き込んでいくのかという課題は非常に大きなものであり、現在に至 っても明確な答えは出ていない。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

コンサルタントの先生や先輩方に、経験に基づいたアドバイスを頂いて自身の活動に活かすことを試みた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分が運営側に立ってみないと分からないことや見えない景色が本当にたくさんあるのだと感じた。加えて、当プロジェクトを通して様々な出会いがあったことも大きな収穫であると考えている。

参加者への影響

運営の仲間に対して明確に役割や責任を割り振ってからは、活き活きと動いてくれるようになった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

話が進むうちに義務感や責任感のようなものも生じてきて苦しくなることもあるかもしれませんが、初めに「やりたい」と純粋に思った時の気持ちを忘れないでください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

利用して良かったと感じられたこと：

・アドバイスやノウハウを伝えて頂くことができたこと。

・様々な人を紹介して頂けたこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

Tsukuba × Sweets Project 3（20003A）

T-ACT プランナー　藤井　七彩（生物資源学類3年）

活動目的

『筑波大学生×？？？×スイーツ』をテーマに、企業に協力を仰ぎ、スイーツの開発・販売をすることを通じて、つくばの新しいスイーツを生み出すこと。

学生だけで一から考える商品を企業とコラボして商品開発することで、商品開発に関する知識や渉外活動の経験が得られる。

また、自分たちで全て作り上げることで商品開発に関する確かな自信をつける。

今回は昨今の情勢を踏まえ、つくばのスイーツ屋さんやカフェの広報を行い、つくばの魅力発信・店舗の利用拡大・売り上げ増加に貢献することを目的とする。

また、前回の活動でコラボを前向きに検討していただいた「粉とクリーム」さんとのつながりを絶やさず、活動を通じて知名度の向上を図り、今後の商品開発につなげる。

具体的な活動計画

8月　対象企業（店舗）を決める。
　　店舗の SNS や他サイトの記事を予習する。オンラインインタビュー
　　宣伝する記事などを書く。
9月　投稿開始（定期更新）
10月～ 投稿を続ける

【具体的な活動内容】

企業（店舗）にメールでオンラインインタビューのアポイントメントをとる。その後、Zoom などを用いてインタビューを行い、SNS に記事を投稿する。

・対象
　筑波大学生（新入生）をはじめとして若年層
・広報媒体
　当団体の SNS（Twitter、Instagram ）、ウェブサイト
・対象企業
　つくばにあるスイーツ屋、カフェ、パン屋など
・インタビュー内容
　お店とつくばの関わり、なぜつくばにあるのか、つくばの特産品の使用について（他の紹介サイトと TSP を差別化するための質問）
　おすすめ、アポールポイント、どのような人が来店し、どのような人に来て欲しいか、お店のコンセプト（お店側が求めているものと自分たちのイメージが一致しているか、お店の広報をするための質問）
　店舗の感染症対策を聞き、記事を見た人が安心できるようにする。
・コンテンツ内容
　見やすい、堅苦しくないもの。
　お店の紹介だけでなく、おすすめランキング、TSP 割（企業側と要相談）なども取り入れる。
・インタビュー時の注意事項質問の意図を共有する。
　先方がオンライン（ZOOM）に対応できるか確認する。
　インタビュー内容は40 分の時間制限を考えたものにする。礼儀・マナーの確認を全員で行う。
　インタビュー情報の用途を伝える。
　投稿をアップする前に店舗に確認してもらう。各企業に合わせたスタイルでやり取りする。
・その他
　週に 1 回程度、Zoom によるミーティングを行い、進捗報告や礼儀・マナーの確認を行う。
　本申請の活動においては、販売行為に直接関与しないようにします。

活動場所

Zoom などのオンライン、学生控え室など

活動期間

2020/08/01～2021/01/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：菅野楓音（生物資源学類３年）、山田竜輝（生物資源学類４年）、頼永萌々佳（生物資源学類３年）、林里奈（生物資源学類３年）、髙津あゆみ（生物資源学類３年）、及川浩輝（社会学類２年）、尾坂みなみ（応用理工学類２年）、神山颯斗（社会学類２年）、早川礼菜（社会工学類２年）、野津眞衣（国際総合学類２年）、山内翔真（生物資源学類２年）、佐内寛太（社会学類２年）

P：高谷直樹（生命環境系）

備考

本団体は、半年間ごとにメンバーの募集を行う予定です。（次回１月頃）

活動報告

実際の活動内容

今回はコロナという情勢の中、つくばのスイーツ屋やカフェの広報を行い、つくばの魅力発信・店舗の利用拡大・売り上げ増加に貢献することを目的とし活動をしてきた。

実際、7つの店舗にインタビューをして記事を書くことができた。

記事を見せることで特典がもらえる、という TSP 割を実施してくださった店舗もあり、店舗の広報だけでなく本団体の知名度向上にも繋がったと感じる。

一方で、前回の活動でコラボを前向きに検討していただいた「粉とクリーム」さんには積極的にメールを送ったものの、返信が途切れてしまい、このような情勢も考えて今後の商品開発に繋げることはできなかった。

全体会議の結果、2年生の数名が団体を引き継ぐ。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒50％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

コロナや緊急事態宣言で行動範囲が制限されたこと。HP を作成できるのが1人だけだったため、不測の事態にすぐ対応できなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

Zoom を用いてオンラインインタビューを実施できるように、団体内で共通認識を高めた。HP については対応できなかったため、進行が遅れた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

コラボを前向きに検討していただいた「粉とクリーム」さんからの連絡が途絶えたこと、さらにコロナという情勢でモチベーションが下がっていたが、今自分たちにできることを考えて広報に舵を切れたのは良かった。

全くやったことのないことで手探り状態ではあったが、インタビューした店舗から感謝されることも多く、役に立てたと実感できた。予想外の困難に屈しず、最後までやりきることができた体験だったと感じる。

参加者への影響

途中からはグループに分け、それぞれが主体となって動いてもらっていた。

そのため、能動的に活動することが求められ、メンバー全員が最後まで主体性を持って取り組んでもらうことができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

情勢を踏まえた行動を常に考える。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

方針転換の際はかなりの勇気がいったので、その際に背中を押してもらえたことは非常に助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

ドコイコ（20005A）

T-ACT プランナー　熊谷　充弘（工学システム学類2年）

活動目的

大学の食堂やキッチンカー等の店舗情報やメニューを、一括でアプリから見たり検索したりができるようにし、筑波大学の学食の活発化を図る。

具体的には今までは存在しなかった、筑波大学周辺の飲食店に特化したメニュー検索サービス（アプリとWeb サイト）をチームメンバーと共に開発する。

そのサービスでは、学食のメニューや栄養情報などが閲覧することができ、今まで行ったことのなかったお店を発見し、他者とその体験を共有することができるような機能を提供する。

また、食べたメニューを記録する機能を実装し、学生や教職員への栄養バランスの取れた食生活のサポートのために「今週はたんぱく質が足りていないようなので、○○食堂の△△定食はどうですか？」といった健康管理を兼ねた広告機能を実装する。

店舗側には人気のメニュー情報や、エリアごとのユーザー層（男女比や年齢層、健康意識の高さ等）のデータの表示を行い、広告掲載機能の提供を行う。

具体的な活動計画

T-ACT 実施期間では、フェーズ 1 のみを行う。（画像 3 参照）

将来的には産学連携本部の協力を依頼し、フェーズ 2、3 へと移行する予定。

【アプリ関連】

・マップとサーバーとの通信（バックエンド）の開発
・売上管理などのサイトを制作
・その他のページのデザイン

活動場所）各自自宅、または対面活動時間）空き時間
活動内容）各自自宅にてパソコンを用いて作業を行う

対面でのミーティングを行う際にはソーシャルディスタンスの確保やマスクの徹底検温や健康管理シートを持参し感染しないように最大限の努力をします。

【店舗へのアプローチ】

・店舗へのメールや Zoom を用いたアンケート調査を実施、対面での打ち合わせ
・店舗側へ提供するサービスの模索
・お店のメニュー登録

活動場所）各自自宅、またはつくばスタートアップパークを利用した対面での打ち合わせ活動時間）随時決定する
活動内容）対象店舗にメールや Zoom にて、作成済みの本サービスの提案書を用いて現時点で提供したいと考えているサービス内容を説明し、その上で現状の不満点のヒアリングと本サービスに対してのアンケート調査を行う。

チームメンバーとの相談の後に、対象店舗からいただいた不満点を改善するシステムを本サービスに組み込み、ユーザーと店舗双方にとってより使いやすく、便利なサービスの模索を行う。

また、メニューの聞き取り調査を行い、その情報を本サービスに登録する。

聞き取り調査の具体的な方法として、初めにコンタクトを取らせていただく予定の「粉とクリーム」様に対しては、以下の「粉とクリーム」様の Web サイトに記載されている電話番号もしくは FAX にてご連絡をさせていただきたいと考えている。

http://www.konakuri.com/company/index.html

対面での話し合いについての新型コロナウイルス感染対策に関しては「活動場所」に記載した感染予防対策を行う。

【定期ミーティング】

・各種調査結果や進捗状況の共有
・サービス内容の議論

活動場所）各自宅、または対面
活動時間）毎週水曜日15時～16時（テスト前等を除く）
活動方法）zoom や teams を利用しオンライン会議で人と人の接触が生じないようにする。対面の場合は前述した上記の内容に留意し、感染症対策を万全にして行います。
活動内容）進捗の確認や今後進行していくことの取り決めを行ったり、サービスの内容を議論しあったりする

【作ろうとしているアプリケーションの概要】

［アプリケーション上でできること］

ユーザー
　食堂の場所やメニューの確認＜食堂の利用を活性化＞
　店舗や食事の感想を実装予定のタイムライン機能で共有
　食べたメニューの記録機能を用いて、過去の食事履歴に基づく健康管理を目的としたメニュー提案（例：「今週はたんぱく質が不足しているようなので○○食堂の□□メニューはいかがですか？」）
　店舗ポップアップ広告やバナー広告による集客
　メニュー登録や売り上げ管理（同時並行で開発する予定の、店舗専用サイトにて利用可能）
［サービスの魅力］
　筑波大学生の食堂利用をより快適で柔軟なものにし、新たな食堂へ赴くきっかけになる。また、栄養管理機能を用いることで健康的な毎日を送ることが可能となる。
　店舗側は広告掲載機能やメニュー表示による、これまで距離が遠くて存在を知らなかった新規学生等の集客が期待でき、店舗情報（キャンペーンや営業時間のお知らせ）の掲載が可能となる。

活動場所

　基本的には各自自宅から Zoom や Teams を用いたミーティングや開発を行う。国や自治体、大学等から自粛要請などが発せられている期間は対面および外出を伴う活動を行わない。
　対面での打ち合わせや店舗様との交渉を行う際には、日程が決定後、すみやかに T-ACT に報告を行うとともに直近の二週間の健康管理シートを持参し、当日も参加者全員の検温を実施した上で37.5℃を超えていないことを確認し、超えていた場合は参加しません。
　健康管理担当者は中村凌也が率先して行い、開催前日12：00までに体調の記録の確認を行い、メールにてパートナーおよび T-ACT フォーラムへ報告を行います。前後二週間はチームメンバーも人込みを避け、アルコールでの消毒をするなどの感染症対策には万全を期します。
　なお、開催当日は参加者全員のマスクの着用と手の消毒を行った上で物品共有の回避、ソーシャルディスタンスを徹底し、飲食や大声でのやり取りは避けます。
　活動履歴管理者である中村凌也が日付、場所、時間、参加者氏名、手で触れることの出来る距離で15分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管を行います。
　換気やその他の会場が定める感染対策ガイドラインに沿います。
　対面での活動が終了した際には T-ACT 推進室への報告を中村凌也が行い、その後２週間の時点で参加者にその同居者を含めた感染の有無の確認を行います。
　万が一参加者に新型コロナへの感染が発生した場合、発生状況をパートナー及び T-ACT 推進室に報告するとともに、活動を停止します。

活動期間

2020/07/01～2020/12/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：飯塚友也（社会工学類２年）、中村凌也（社会工学類２年）、島村和惟（社会工学類２年）、表陸人（工学システム学類２年）、藤永弥太郎（情報メディア創成学類１年）
P：尾内敏彦（国際産学連携本部）

DOKOIKO

活動報告

実際の活動内容

【マーケティングチーム】

・筑波大学周辺の飲食店に対して情報掲載許可のお願いを電話で行う際の原稿を作成
・Twitter での Google フォームを用いた「メニューの見れる飲食店検索アプリの需要」や「キャッシュレス決済の需要」等に関するアンケートを実施
・将来的に導入予定である「キャッシュレス決済」の、ユーザー / 店舗双方にとって利用のしやすい具体的な決済手順等の決定
・広告プラン等の大まかなシステムの料金形態を決定
・学食の担当者の方との打ち合わせの際に用いる、ドコイコについてわかりやすく説明したパンフレットの作成

【エンジニアチーム】
・基本的なシステム構成を決定（lalavel と決済システムには Stripe を使用）
・メニュー、店舗情報の登録と、登録された情報の閲覧機能の開発
・検索画面、メニューボタン、検索結果画面の UI デザインを開発

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒30％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
新型コロナ感染症の影響もあり、チームメンバー同士での十分な話し合いを行うことが難しく、サービスの方向性を決めることに想定以上の時間を要した。
また、実装したい機能に対してエンジニアの数が不足しており、かつ店舗側の協力をいただく必要があるため、準備時間がかなり必要となり、そのためいくつかの実装予定であった機能を断念する必要があった。
解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
チームメンバー全員が集まれる日を待つのではなく、こまめに集まれる人だけでもミーティングを行い、何もしない時間を減らすようにした。
また、実装予定であった機能のいくつかを断念し、ドコイコのサービスの核となる部分の開発に集中することにした。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
これまでこれほど大きなシステムをチームで開発したことがなかったので、まずチームをまとめるということにとても苦労しました。適切な仕事量の分配や、目標の共通認識化など、これまで意識してこなかった問題が浮き彫りとなり、活動を進めながら自分なりの解を模索していました。現時点ではまだ最適解が見つけられていませんが、今後さらに活動を進めていく中で見つけることができればいいなと考えています。
また、趣味で行うサービス開発に比べて、本格的に実社会の中で運用を目指す何らかのサービスを開発する際には協力をいただく相手様との連絡や、セキュリティといった様々な問題や手順が必要であることを痛感し、「起業をする」と言うだけなら簡単でも、そこから先、成功するためには並外れた熱意と根気が必要であることがわかりました。
参加者への影響
この活動を始めた当初はそれぞれに決まった役割などがなく、モチベーションの低い時期がありましたが、チーム内で一人づつ役割を持たせたことにより、より活発な意見交換や仕事の分担ができるようになりました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
活動を進める中で、メンバーの離脱や断念すべき事が出てくるかもしれませんが、そこで諦めずに粘り強く原因と解決策を考えることが非常に重要だと思います。
また、メンバー間で「この活動の目標は何なのか」ということをよく話し合い、思い違いのないように心がけるべきだと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
学生の段階から複数人で何かの活動を企画し、様々な人との交流を深めながら目標達成に向かって努力するという大変貴重な経験をすることができ、T-ACT を利用して良かったと感じています。また、適度な活動に対してのアドバイスをいただき、新たな考え方や認識の甘さを 学ぶことができたと思います。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

オンライン性教育～意外と知らない私たちの性について～（20006A）

T-ACT プランナー　佐久田　幸空（教育学類1年）

活動目的

性に関する教育は発達段階に合わせて行われる必要があると考える。つまり、性に関する教育は高校までで完結するものではなく、大学においても重要なものである。しかし、現状ではいわゆる性教育と呼ばれるものを大学生に対してはあまり行われていないように思われる。また、高校までの学習も各学校において状況は異なり、もしかしたら十分な教育が行き届いていないかもしれない。

そこで、この活動では改めて性教育とは何かということを問い直しながら、性について考える場所を提供していきたい。また、性教育の性と生殖に関する事項である「避妊」「中絶」に焦点を当て、具体的なアプローチを紹介する。参加者により興味を持ってもらえるようにすると同時に、個人が何かあった時に適切に対処できるような内容に構成していきたい。

最後に、この活動を通じて少しでも性についてポジティブなイメージを持つ人が増えていくように心がけたい。

また、この企画に携わってみたい方、性に関する教育に興味がある方は、気軽にご連絡ください。

（参加する気はないけれど、ただ話を聞いてみたいとかでも大丈夫です。）

具体的な活動計画

Zoom を用いたオンラインでのワークショップの実施を前提に検討する。

実施する活動内容のアウトライン（仮）
前半（性教育の目的と課題について改めて学んでいく）
1. 性教育とは何か
性教育は妊娠や避妊だけではなく、心身の発達や価値観など幅広いものであることを今一度確認する。
2. 小中高校までにおける日本の性教育の現状と課題
よく保健の教科書の内容が批判されることが多いが、本当に問題なのだろうか？学習指導要領などを踏まえながら、日本の教育内容のを改めて振り返り課題をみつけていく。 3. 日本における性の現状と課題性に関して教育を施す上で、日本の性に関する現状を把握する必要がある。後半の内容に入る前に、性と生殖に関しての日本社会の課題を考えてみる。4. このオンライン性教育の目的なぜ大学生で性教育をするのかを考える。

後半（具体的な避妊方法、性感染症対策、中絶などについて学んでいく）
1. 具体的な避妊方法
低用量ピル、コンドームについて詳しく話していく。意外と知らない、教わらない、けれども知って欲しいことを中心に紹介する。
2. もし、避妊に失敗してしまったら
緊急避妊薬、中絶について学んでいく。身体的・精神的な負担が大きい選択肢でもあるが、その選択は尊重されなければならないと考える。現実の課題を踏まえながら考察していく。
3. まとめ

前後半それぞれ30分程度で行い、途中で10分程度の休憩を設ける。

前半で、性に関する内容故の悪意のある行為やいたずらについては絶対に行わないことを確認するので、それを踏まえた上で後半の活動をおこなっていく。

上記はあくまでも予定である。
参考図書としては、
学校指導要領に基づいた保健体育の教科書
『「若者の性」白書』
『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』
『教科書にみる世界の性教育』
『性教育』はどうして必要なんだろう？ などである。
信頼性のおける出典明記などを心がける。

活動予定について
11月中に、ポスターを製作し広報活動をスタートさせる。
12月中に、発表原稿の作成、また内容面について片岡先生からご指導をいただく。また、引き続き広報を行なっていく。

1 月22日（金）に 1 時間程度を使って企画を行う。

活動場所

zoom を用いてオンライン上で行う。
下記が申込フォームとなっていますので、少しでも興味があればご参加お待ちしております！
https://forms.gle/Frscuvit5VYFCLKq5
（2021年 1 月19日 追記）
参加できる方は筑波大学の学生および教職員のみとなっています。
申し込みフォームの情報から筑波大学の学生および教職員ではないと判断される場合は参加できないこともあるのでご了承ください。
申し込みフォームから入力した情報は本企画に関することにしか用いず、その他の用途には用いません。
申し込みフォームから入力した情報は、本企画終了とともに適切に削除いたします。
期日までに本会場の URL 等が送られてこない際は、申し込みフォームに入力した連絡 先が間違っている可能性があるので、企画のメールアドレスに個別にご連絡ください。
（2021年 1 月20日 追記）
申込は締め切らせていただきました。 zoom の URL につきましては、21日（木）までに記載されたメールにお送りする予定です。
当日、オンライン上ですがお会いできることを楽しみにしております。

活動期間

2020/10/01～2021/02/28

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：稲見洸紀（社会工学類 1 年）、森本悠介（応用理工学類 1 年）、IQBAL MD MUMIT（社会学類 1 年）
P：片岡千恵（体育系）

備考

懸念事項として、
①企画で扱う内容やオンライン開催ゆえの、いたずら行為、学則で禁止されている活動などの悪意ある介入を目的とする参加者
②内容の信頼性の担保
の 2 点が挙げられる。
①についての対策として以下のことを行う。
・事前に注意事項に記載したり、当日にも注意を促したりし、企画を妨害する参加者に対しては、強制退出などの措置が行える体制を整えておく。また、参加者が悪意ある行為の被害にあった時には、学生生活課や私たち（企画の責任者）に報告することなども合わせてアナウンスしておく。
・参加者の情報や連絡先（学籍番号やメールアドレス、所属学類など）を事前に把握できるようにしておく。また、その時に当日の zoom のアカウント名も記入してもらう。
・参加者同士の個人的な連絡が行われないように準備する。
②の対策として以下のことを挙げる。
・出典を明示する。

・片岡先生との吟味を行った上で活動を行う。
・受講者に対しては誠実な態度を求める。
　また、T-ACT にも事前に発表内容を伝えておく。

活動報告

実際の活動内容

日　時：2021年 1 月22日（金）18：30～19：30
開催方法：Zoom を用いたオンライン開催
対象者：学生、ほか
主な内容：
（1）性教育の目的と課題
（2）日本の学校における性教育の現状と課題
（3）日本における性の現状と課題
（4）具体的な避妊方法について
（5）もし、避妊に失敗してしまったら

当日には、参加者の匿名性を担保した上での Zoom での講座を行った。

また、オンライン上でかつ匿名の中でも双方向の話し合いを活発にさせるために、Zoom のチャット機能を使い、共同ホストを経由しての投稿が参加者にできるようにした。そうしたところ、チャットの中で参加者同士が活発的に議論を繰り広げる場面もあった。

前半の35分に講義を行い、残りの時間をチャットの意見に対して反応したり、質問に対して答えたりした。また、片岡先生にもチャットをみていただき、それに対してご意見をいただいた場面もあった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと
・想定よりも多くの申し込みがあったこと
・メール出しなどの手続き、メールアドレスが間違っていたときの対処法
・Zoom のチャット機能について（共同ホストを経由して、全体に投稿するようにしたが想像以上にチャットが活発だった。）

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
・回答の締め切りを早めに設定し、残りの期間で学生の確認を行った
・今回は人力で全てのメールを送った。間違っているものに関しては、そのままにしておく。
・PC 担当が頑張って全ての仕事をこなしていた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

企画を計画した時には、10人程度が参加すれば十分だと思っていたので、申込者数が100人弱集まっていて非常に驚いていた。それとともに、性に関する事象に興味を持つ学生が多くいること、学類や学年もさまざまなことが興味深かった。メール出しなどの事務的な作業が、想像以上の申込者数だったのでとても大変で、次回以降の課題であると感じた。

企画当日には、チャットを用いて参加者が交流できるようにするかどうか特に悩んだ。実際には PC 担当を経由してチャットを開放したところ、こちらも想像以上のチャットの数で、対応が後手に回ってしまった。しかし、チャット内においてそれぞれが意見を共有してそれについて返答したり、講義についてのコメントをしていたり、質問なども活発にされていたりして、自分自身も非常に勉強になった。講義をしている中で、コメントが多かったので、30分程度にまとめて意見を共有する場面を多くとり、片岡先生からもチャットについてご意見を伺える機会を作れたことは非常によかった。ただ、コメントを全部追い切れていなかったので、その点についても反省としてあげられる。事後について、アンケートをとったところ46件ほどの回答を得ることができ、お褒めの言葉をもらえとても嬉しかった。また、匿名性を保ちつつも話し合える場を創出していくことや意見が共有できる場を継続して作り続けていくことの重要性を再認識した。また、1 年間、オンライン授業が続き、オンラインに嫌気が指していたことも事実としてあり、Zoom を上手に用いることで相互作用も活発になるなど、オンラインの可能性を改めて知った。講義形式ではなく、現状を簡単に説明した後に話題を提示し議論するという流れをオンライン上でもできるのではないかと考えた。最後に、今回ご参加いただいた方々や企画の運営に関わったオーガナイザー、内容面でお世話になった片岡先生に感謝申しあげるとともに、今後もこの企画を継続させていくために頑張っていきたいと思う。

参加者への影響

T-ACT オンライン性教育～意外と知らない私たちの性について～の参加者の感想をまとめると、
「普段は恥じらいがあってなかなか話せない内容について意見を交わすことが出来た。」
「性に関する基本的なことを確実に教えてもらった」
「チャットにより他の学生の考えを知ることができた、多くの学生が関心を持っていることに気づいたため」があった。

オンラインでの活動である点については、
「オンラインでの良さも対面での良さもある」
「オンラインだと匿名で言いやすいが、対面でも話すべき内容である。」
「オンラインの方が参加しやすい。匿名性が保てる。」
「匿名性を保ったまま、チャット用いて議論できたことがよかった」という意見があった。

全体を通じて、まずは、性に関する事象に自分だけではなく多くの人が関心を持っていることに気づけたこと、次にチャットなどで匿名性を保ったまま意見を共有できたり、議論ができたりすることをポジティブに捉えるようになっていた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

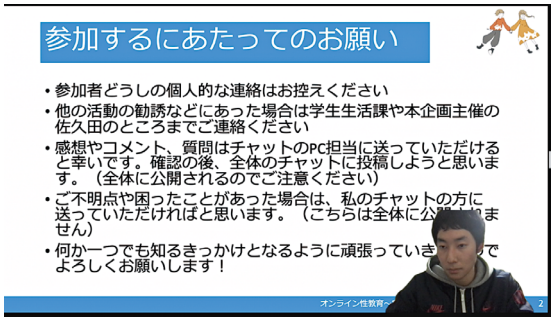
何かしてみたい、やってみたいと思ったら、ぜひ行動しましょう！

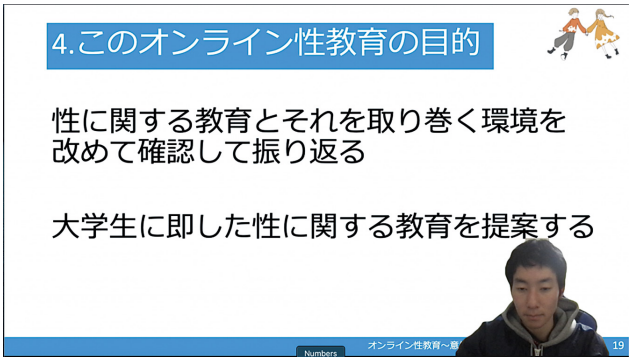
T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

困ったことが生じた時にすぐに、T-ACT の先生方に相談ができることがよかった。その他にも、今回は性に関する内容であったため、オン ライン性教育の企画の信頼性を担保する上でも、T-ACT の企画として行うことには非常に意義があったと考える。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





ビブリオバトル筑波杯 秋の陣（20007A）

T-ACT プランナー　土屋　深優（人間総合科学学術院人間総合研究群情報学学位プログラム博士後期課程1年）

活動目的

最終的な目標は、筑波大学生を対象にビブリオバトルの大会を開催することです。

ビブリオバトルでは、発表者（バトラー）がおすすめ本を持ち合い、1人5分の持ち時間を使い自分たちの言葉で本の魅力を伝えます。このとき、原稿やスライドなどは使いません。それぞれの発表後に質疑応答を行います。全員の発表が終わったあと、発表参加者と観覧参加者の投票でチャンプ本（一番読みたくなった本）を決定します。（https://youtu.be/uKmO5SziWdE）

筑波大学は知識情報・図書館学類や図書館情報メディア系など、図書館や本に関する教育、研究が盛んであり、知識情報・図書館学類の推薦入試の集団面接においてビブリオバトルが採用されているにも関わらず、大学内でビブリオバトルの大会等は開催されていません。

今年はコロナウイルスの影響により、オンライン開催をする予定です。

昨年より多くの参加者を集め、ライブ配信も行い、ビブリオバトルや筑波大学について、より多くの人に知っていただくための機会として、実施したいと考えています。

具体的な活動計画

【9～10月 参加者の募集、地域住民への観覧広報】
・参加者（本を紹介する人「バトラー」）を筑波大学内で募集します
・バトラー募集は SNS 上での広報、筑波大学新聞への寄稿、大学や附属図書館への Web サイト掲示交 渉を行います
・参加者（観覧する人「オーディエンス」）は大学内だけでなく、地域の方々も募集します。そのため、SNS を通じた広報を行います
【11/4 オンライン上での筑波大学大会開催】
・ツールは Zoom を使用します
・予選開催時間は1～2時間程度を予定しています。流れは以下の通りです
①司会による挨拶とレギュレーションの説明（10分）
②バトラーごとに本の紹介（5分）と質疑応答（3～5分）を行う（参加人数によって変動）
③バトラー、オーディエンス含めた参加者全員で投票を行い、チャンプ本を決定する（15分）
・開催前に運営側でマイクやタイマーの確認、当日の流れの確認を行います（20～30分）（オンライン上なので会場準備はありません）
・開催後にチャンプ本と紹介者に対して、本の情報を聞き取ります（5～10分）
・開催後に運営側で反省点の共有を行います（15～20分）
【活動内容に関して】
・活動場所：自宅（Zoom を使用したオンラインミーティング）
・活動時間：毎週木曜日17時～18時 など
・活動方法：Zoom を使用してミーティングを行う
・活動内容：進捗状況の共有、イベント進行に関する打ち合わせを行う

活動場所

自宅（Zoom を使用したオンラインミーティング）

活動期間

2020/07/01～2020/11/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：片野樹理（知識情報・図書館学類2年）、末益朋佳（知識情報・図書館学類2年）、永山賀子（知識情報・図書館学類2年）
P：池内淳（図書館情報メディア系）

活動報告

実際の活動内容

最終的な目的は筑波大学でビブリオバトルの大会を開催することでした。

今年度はコロナウイルス感染拡大のため、開催までのミーティング及びイベントはオンライン（Zoom）で開催しました。

9 月頃から Twitter とポスターでバトラー（発表者）とオーディエンス（観覧者）の募集告知を行いました。バトラーは 6 名、オーディエンスは15人程度を目標としていました。

バトラーは 7 名集まり、開催の時間を鑑みて、抽選で 6 名を決定しました。

オーディエンスは防犯のため登録制として、当日開始時間まで募集し、10人集まりました。

当日のタイムテーブルは以下の通りです。
18：15 開場
18：30～18：40 ルール説明と注意事項説明
18：40～18：50 一人目の発表と質疑応答
18：50～19：00 二人目の発表と質疑応答
19：00～19：10 三人目の発表と質疑応答
19：10～19：20 四人目の発表と質疑応答
19：20～19：30 五人目の発表と質疑応答
19：30～19：40 六人目の発表と質疑応答
19：40～20：00 投票の集計と休憩
20：00～20：15 結果発表と終わりの言葉

当日はスムーズな進行で滞りなく進みました。

チャンプ本に選ばれたバトラーは、全国大学ビブリオバトルオンライン大会予選に、抽選なしで参加することができます。

終了後、プランナーとオーガナイザーでミーティングを行い、今後継続的に開催するための意見交換を行いました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

オーディエンス、特に学外からのオーディエンスを集めるのが難しい。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

ポスターや Twitter で広報を行い、2、3 人の学外からのオーディエンスがいらっしゃいました。今後同様のイベントを行う際にはより宣伝を強化したいと思います。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

T-ACT の授業は学部生の頃に受けたことがありましたが、実際に企画を主催したのは初めてで緊張しました。

T-ACT コンサルタントとの打ち合わせは綿密で大変助かりました。特にオンラインで行う以上、防犯のためオーディエンスは登録制にした ほうが良いというのは私たちの間でなかった考えだったのでありがたかったです。これ以降もイベントを主催していくのであれば、リスク管理の勉強が必要だと感じました。

ただ、オーガナイザーの人数が増えるほど日程を合わせるのが難しかったのは困ったポイントでした。もしオフラインだったら春日から T-ACT のところまで行くのも大変なので、可能ならチャットで打ちあわせができる環境があればもっと助かります。

今年はオンラインを主体とした企画運営でした。参加者の反応が見えない部分、個人情報保護により気を使わなければならない部分、回線やデバイスの問題、学外からの参加者が得られにくい点はデメリットでした。反対に、集まらなくても開催が可能なため、学生の参加が容易なこと、場所の確保が必要ないこと、準備・後片付けの人手が不要なことはメリットだったと思います。

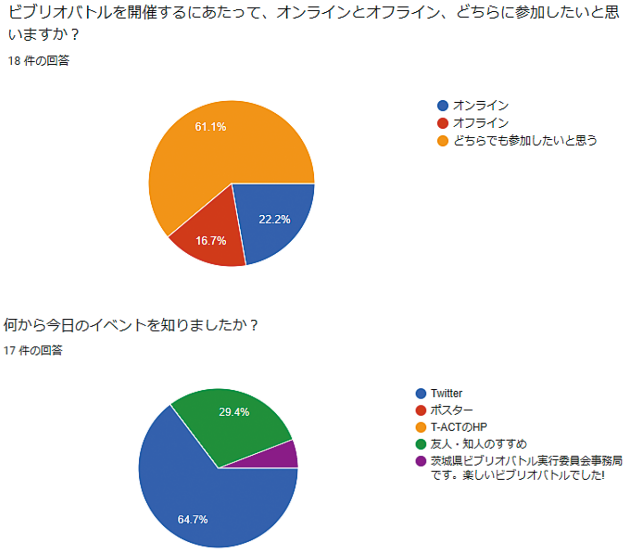
終わってから考えると、オンラインならでは、例えば紹介された本の URL を参加者に提示する、ビデオではなく3D モデル等での参加も可能 にする（希望はありましたが、今回は円滑性を重視したためビデオのみとしました)、県外の人へもオーディエンス参加をアピールする等の対応を進められたら良いかと思いました。

初めは T-ACT ではないところで話を進めていたので、T-ACT 承認を待って対応が後手に回った部分もありました。次回開催するときは T- ACT コンサルタントの打ち合わせ、計画、承認等を考慮してもっと早い段階から進めたいと思います。そういう点では自身の計画性・スケジュール管理といった点にも影響があったと思いま

す。
　また、T-ACT を通して、普段交流のない学部生と話ができたのはとても良かったです。今後はもっと幅広い学年・学類の人も巻き込めたら 良いとは思いますが、人数が増えるとその分意思統一も難しくなるので、悩みどころではあります。

参加者への影響

　これまでどちらかというとビブリオバトルでバトラーとして参加したい側だった方たちが、運営として参加してくれたのは意外でした。終了後も「バトラーとして参加したい」という気持ちがありつつ、「来年も運営したいです」という声を聞いたので、オーガナイザーの中でも心境の変化があったとは思います。
　バトラーとして参加してくださった学生は概ねイベントを楽しんでくださったようで、「来年も参加したい」「悔しかった」「楽しかった」等の声を受けました。元々ビブリオバトルに興味がある学生がほとんどだとは思いますが、「ビブリオバトルが楽しい、もっとやりたい」という気持ちを持ってくださったのであれば、企画として大きな成功であり、ありがたいです。来年度以降のバトラー、オーディエンス、運営の参加者増加に繋がったり、このビブリオバトルの企画を通して企画運営の経験を積んでほしいとも思います。
　また、バトラーの個別聞き取りでは「オフラインのほうが良い」という意見がほとんどだったのですが、オーディエンスを含めた全体アンケートでは、「どちらでもよい」が61%、「オンラインの方が良い」が22%、「オフラインの方が良い」が17%でした。オーディエンスにとっては、オンラインでも楽しいイベントが開催される！ということを知るきっかけになったのかもしれません。（画像欄にアンケートのスクリーンショット載せておきます）



未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

　T-ACT で企画を運営することはけっしてハードルの高いことではありません。
　個人で運営するときに問題となる場所、機材等を貸していただける場合もありますし、T-ACT を通して仲間を集めることもできます。
　一番のメリットは実際に様々な企画を見てきた大人のプロの意見を聞くことができる点です。自分では思いもしなかったようなリスク、宣伝の方法、開催に関するアドバイスを受けることができます。しかもお金もかかりません。
　サークルにするほどではない単発の企画、試してみたいことがあるけど失敗するのが怖い時、やってみたいことがあるけど方法が分からない時、相談だけでも良いので、まずは T-ACT コンサルタントの方にお話してみると良いと思います。
　ぜひ授業も受けてみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

　活動体験にも書きましたが、コンサルタントとの打ち合わせの方法について、もう少し選択肢が増えると良いと思いました。また、オンライン上であれば、Teams を通話でしか使用しなかったので、タスク管理や進捗報告に利用しても良かったのではないかと思います。
　また、このような報告書、企画書等について、作成したものを PDF でアップする方法をとりたいです。Web 上で入力すると何かのはずみで 消えることがあります。もちろん、Word 等に入力したものをコピペすることもできるのですが、それよりは Word で様式をいただいて入力して、PDF にする方が手間が少ないです。
　コンサルタントの方には色々とご迷惑もおかけしましたが、フォローしてくださってありがとうございました。いつでも対応や話し方が丁寧で、落ち着いて話すことができ、大変助かりました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

筑波大生アクションのススメプロジェクト（20008A）

T-ACT プランナー　村上　達哉（人文・文化学群人文学類3年）

活動目的

「大学に入学したけど学校を身近に感じられない」「今年度に入って学生と全く交流していない」「何か活動をしたいけれどなかなか勇気が出ない」…そのように思っている学生は多いのではないでしょうか。

T-ACT で活動した経験、T-ACT サポーターという立場を活かして以上のように感じている筑波大生のために「きっかけづくり」をしたいと考えました。「きっかけづくり」において想定しているつながりは以下の３点です。

１．学生と大学のつながり「“大学”をより身近に」
２．学生と学生のつながり「“学生間”をより近くに」
３．アクションとアクションのつながり「“活動”をより充実したものに」

そして、このきっかけの場としてひとつのオンラインイベント「T-ACT のススメ～大学生の可能性を探る～」を考えました。イベントは Microsoft Teams 上で開催し、「アクションを知る / 広める / つなげる」をテーマに T-ACT で活動されている学生の方々にご登壇いただきます。イベントの対象は筑波大学の学生、教職員の方々です。大学で行われている学生のアクションを知ることができ、コロナ禍における活動への取り組み方、考え方について実際に活動している学生の生の声を聞くことができるイベントです。学生、団体、アクション、大学の可能性が拡がる一助になればと考えております。

具体的な活動計画

〇活動スケジュール
10月　参加団体募集、準備、広報
11月　準備、オンラインイベント（11/21）
12月　まとめ
〇イベントのタイムスケジュール
11/21（土）13：00～15：30
13：00～　イベントの説明
13：10～　アクションの紹介（登壇者８名）休憩
14：15～　フリートーク
「学生生活について」「学生に向けてのメッセージ」など
14：45～　まとめ、アンケート
15：00～15：30　懇談会 ＊参加は任意

活動場所

運営ミーティングは ZOOM 上で行う（週に一時間ほどを予定）。 オンラインイベントは Microsoft Teams 上で行う。

活動期間

2020/10/01～2020/12/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：川合福太郎（社会学類３年）
P：加賀信広先生（人文社会系）

備考

〇オンラインイベントに関して
・参加者の方々には顔出しや発言を求めることはありません。入退室も自由です。
・終盤には各団体に分かれての懇談会を予定しているので参加者の方々は質問や相談をすることもできます。
・オンラインイベントにおいて悪意ある行為を防止するため、参加者の学籍番号やメールアドレスを控えておきます。その旨は事前に参加者にお知らせをします。
・イベントに際して知り得た情報については第三者に口外しない。

〇イベントの運営に関して
・T-ACT サポーター、T-ACT で活動している（していた）方々にご協力いただきたいと考えていますが、T-ACT に関わりがない方も不自由なくメンバーとして活動していただけます。
〇予算に関して
オンラインイベント含め活動において費用はかからない予定です。
〇オンラインイベントの参加について
以下の参加フォームへの回答をお願いいたします。https://forms.gle/Prktzdbufde2S5g67

活動報告

実際の活動内容
〇実際のスケジュール
9 月末～ T-ACT を利用した団体に登壇依頼
9/23 パートナーの先生と面談（@ZOOM）
10/1 T-ACT を利用した方々に運営、登壇を依頼（T-ACT 推進室黒田先生にメール文を送っていただく）
10/6 ミーティング #1（@ ZOOM）
10/12 パートナーの先生へのご報告（@ Microsoft Teams）
10/13 ミーティング #2（@ ZOOM）
10/14 T-ACT 推進室相談（@ Microsoft Teams）10/15 企画承認
10/20 参加申請フォーム完成
10/20 ミーティング #3（@ ZOOM）
10/23 参加団体確定（11/15までに発表スライドを作成していただく）
10/27 ミーティング #4（@ Microsoft Teams）
10/27 フライヤー完成
（10/27 大学の課外活動開始ガイドラインにより T-ACT における活動制限が緩和）
11/1 Twitter 広報開始（参加団体紹介11/9～11/17）
11/6 スライド回収完
11/10 ミーティング #5（@ Microsoft Teams）
11/15 登壇者リハーサル（@ Microsoft Teams）
11/17 ミーティング #6（@ Microsoft Teams）
11/17 T-ACT 推進室相談（@ Microsoft Teams）
11/21 オンラインイベント本番（@ Microsoft Teams）、振り返り（@ Microsoft Teams）
11/21 筑波大学新聞取材（@ Microsoft Teams）
12/19 登壇者の方々から振り返りシート回収
（1/30 T-ACT 交流会 #0 実施（@ ZOOM）⇒ 今後は月に 1 ～ 2 回程度の頻度で交流会を開く予定）
〇オンラインイベント「T-ACT のススメ～大学生の可能性を探る～」の内容
◇登壇者
・T-ACT について 黒田卓哉先生（T-ACT コンサルタント）
・つくばランウェイプロジェクト 杉山理佐さん（芸術専門学群 3 年）
・Everyday Tsukuba Project 古畑翼さん（博士前期課程教育学専攻 2 年）
・BLUE ONE BEAT! 天野隼太さん（比較文化学類 1 年）
・つくばの春を取り戻せプロジェクト 水谷奈都乃さん（教育学類 1 年）
・Higa Coffee 丸子さくらさん（社会工学類 2 年）
・つくばお笑い集団 DONPAPA 桑田和哉さん（生物資源学類 2 年）
・盆 LIVE 実行委員会 駒野樹さん（比較文化学類 3 年）
◇タイムスケジュール（以下敬称略）
11/21（土）13：00～15：30 @ Microsoft Teams
①13：00～ イベントの説明
②13：10～ アクションの紹介（ 7 分×約 8 名）
【休憩】14：15～14：20
③14：20～ フリートーク
④14：50～ まとめ、アンケート
⑤15：00～15：30 セッションに分かれて懇談会 ＊参加者任意
《詳細》
⓪～12：45 入室
①13：00 開始、注意事項説明、イベントの説明（村上）

②13：10 アクションの紹介
1．T-ACT について（黒田先生）
2．つくばランウェイプロジェクト
3．Everyday Tsukuba Project
4．BLUE ONE BEAT!
5．つくばの春を取り戻せプロジェクト
6．Higa Coffee
7．つくばお笑い集団 DONPAPA
8．盆 LIVE 実行委員会
＊各自で画面を共有する。
＊持ち時間は 8 分ほどを想定。
＊団体紹介の間、参加者はチャットに自由にコメントをすることができる。
③14：20 フリートーク
（天野・桑田・駒野・古畑・丸子・水谷・村上）
チャットに記入された質問を拾い、登壇者の方々にうかがう。
〈実際に話し合った内容〉
・今まで活動してきたなかでぶつかった大きな壁と、それを乗り越えたエピソード
・授業、サークル、生活などのバランスのとり方について
・企画やってみてよかった！と思った瞬間はどのようなときか
・学生に向けてのメッセージ
④14：50 まとめ、アンケート（村上）
＊ Google フォームのアンケート
⑤15：00〜15：30 セッションに分かれて懇談会
参加者は興味がある団体のセッションに参加し、質問や相談を自由にできる。
＊ Teams のセッションに分かれる（天野・水谷・丸子・桑田・駒野・古畑）
＊15：30になったら本セッションに戻る→振り返り（16時に終了）
◇イベントを通しての注意事項
・参加者の方々は基本的に顔出しや発言をすることはない。入退室自由。
・登壇者はカメラをオンにする。
・撮影は行わない。
◇参加者計18名
学生：8 名（学類一年生 5 名、二年生 1 名、三年生 1 名、四年生 1 名）、教員：1 名、登壇者：9 名（学類一年生 2 名、二年生 2 名、三年生 3 名、大学院生 1 名、教員 1 名）

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒85％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
○イベント準備
・運営メンバーが二人であること。二人での運営であり、それなりに負担があった。
・登壇依頼。アプローチの仕方が難しかった。
・広報。多くの学生に参加していただくことは叶わなかった。
○イベント本番
・時間配分が難しかった。
・ファシリテーション。複数の登壇者の方々にバランスよく話を振ることが難しかった。
・伝え方。イベントのまとめと想いの伝え方が難しかった。
○イベント後
・巻き込み方。プロジェクトをどのように締めくくるか、どのように今後につなげるかを考えるのに苦労した。
解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
○イベント準備
・運営：イベント企画、広報に役割分担をして、限られた時間の中で二人でできることをした。今回の場合は開催すること自体にも意味があると考えていたので、やるべきことの優先順位を立てて二人で協力して企画した。
・登壇依頼：黒田先生にご依頼し、T-ACT に携わったことがある在校生にメールを送付していただいた。メールの文面は親しみが持てるよ うにキャッチャーなものにした。ただ、一斉メールよりも個別に連絡をした方がうまくいく。地道に連絡をとってみることも重要である。登壇者の方々には目的、意義、計画等を明確に伝

えることを意識した。
・広報：Twitter での広報を重点的に行った。基本的にオンライン授業で構内には学生は全くいないのでポスター等は作成しなかった。Twins の「在学生へのお知らせ」で周知できればよかったが申請が複雑で今回は活用できなかった。運営二人でできることを念頭において活動した。
○イベント本番
・時間：タイムスケジュールを考える際にはバッファを設けて余裕を持たせておく。
・ファシリテーション：時間を意識しつつ、内容を深められそうなところは問いかけを繰り返す。登壇者の方々にバランスよく話題を振る。
・伝え方：基本的なことではあるが、イベントの開催前には最も伝えたいことを明確にしておく。今回はオンラインでの開催であり、画面共有ができたため、スライドを示しながら伝えることができた。
○イベント後
・巻き込み方：今回ご協力いただいた方々との関わりを途絶えさせないように工夫する。特に、1、2 年生を中心に交流会などの企画ができるように継続的にコミュニケーションをとっていく。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

2020年 4 月16日に緊急事態宣言の対象が全国に拡大した。COVID-19の影響は筑波大学の学生生活にも例外なく影響を及ぼした。入学式がなくなり、授業がオンラインになり、人との接触を避けながらの生活を余儀なくされた。今回の活動はこのようなコロナ禍がなければ存在しなかった。活動の際の原動力は「大学を身近に感じられているか」という問題意識であった。特に、今年度に入学してきた一年生の現状を知り、彼らのことを考えるといたたまれない気持ちになった。「自分が過ごしてきた学生生活とは全く違う。」「彼らのために自分ができることは何だろう？」と、自粛期間中にはそのようなことに思いを巡らしていたものだった。制限下でもできること、今の自分だからできること、今だから意義があることを考えた。そして、自分が一年生の時から関わっている T-ACT をアピールする場を作りたいと思った。これまで複数のアクションを企画し、現在も T-ACT で活動していることは見方を変えれば大きな価値であると思った。また、コロナ禍の制限下でアクションを起こしてみること自体に意味があるのではないかと考えた。

そのような流れで始めたアクションであったが、困難な点もいくつかあった。とりわけ大変だったことは、登壇者を集めること、参加者を集めることである。賛同を得るということは、前提として企画の趣旨がはっきりしており、且つ、その伝え方が適切である必要がある。登壇を依頼する際も、広報をする際も自分の「やってみたい」をわかりやすく伝えることを意識した。活動を行う上で感謝すべき方は T-ACT 支援室の先生方、登壇団体の方々、イベントに参加していただいた方々と大勢いるのだが、当初から企画を温かく見守って下さった古畑さん、オーガナイザーを引き受けてくれた川合くんには特に感謝したい。突拍子のない企画であっても温かく見守ってくれるフォロワーは大切な存在である。また、そのような存在に出会える T-ACT という場はやはりとても良い環境であると思った。

多くの方々のご協力の下、2020年11月21日にオンラインイベント「T-ACT のススメ～大学生の可能性を探る～」を開催することができた。参加者という点ではより多くの学生に参加していただきたいと思っていたので少し残念であったが、自分も、参加者の方々も満足度は高かった。T-ACT という共通点を持った登壇者の方々とお話をさせていただく中で「やってよかった」という気持ちになった。自分こそが「大学を身近に感じたい」と切に願っていたのかもしれない。「大学を身近に感じる」ことができる、意味のある場を作れたと思っている。イベントの終盤では、「人に会う」ということの大切さを強調した。コロナ禍ではあるが、昨今ではオンラインで気軽に「人に会う」ということはできる。少しの勇気を持って様々な人に会うこと、その出会いから始まる経験を大切にすることが「大学生の可能性」につながるのではないかと考えた。参加者は多くはなかったが、これからの生活につながる何かを持って帰っていただけていたらそれ以上の喜びはない。

今回のアクションでは、3 つのつながりを想定した「きっかけづくり」を活動目的として設定していた。その 3 つとは、「学生と大学のつながり」、「学生と学生のつながり」、「アクションとアクションのつながり」であった。イベントを通して、「学生と大学のつながり」、「学生と学生のつながり」を生むきっかけは作れたと思う。そして、「アクションとアクションのつながり」に関してであるが、イベントに登壇していただいた団体の 1、2 年生を中心に T-ACT の横のつながりを強めるような交流会の企画が始まっている。T-ACT のアクション同士のつながり、学生のつながりが強くなることで T-ACT はもっと魅力的で活発なものになると考えている。これから企画していく交流会などが、一歩を踏み出そうと悩んでいる学生の力になる可能性もあるだろう。それは大学生活の充実につながり、大学の新たな可能性にもつながるのではないか…と、妄想を膨らませるが、これはこれからの筑波大生の取り組みに懸かっていると思う。今回の企画の名前は「筑波大生アクションのススメプロジェクト」というものであったが、企画が終了しても「筑波大生のアクション」をこれからも応援していきたい。

参加者への影響

○オーガナイザーの感想
・川合福太郎（社会学類 3 年）

今回、イベントの広報として主に活動させていただきました！

偶然 T-ACT サポーター宛てに来たメールから興味が湧いて活動に参加し、今年なかなか会えなかった T-ACT 関連の方々に久しぶりに会えたり、新しい出会いがあったりとオンラインでも楽しく企画を進めることができました。ほとんど村上君任せになってしまったので申し訳ないと思いつつ、広報だけはシッカリ自分がやらねばと思い Twitter アカウント運営をしていましたが、なかなかオンラインイベントの告知というのは難しいなぁと痛感しました。周りの人とか参加団体さんにめちゃめちゃ声かけて協力していただいたおかげでなんとか、イベントとして成立するくらいの人数は集められたかな、と思ってます。

自分としても忙しい時期で毎日投稿が負担になったりもしましたが、3 年生になってからのオーガナイザー、結構おススメしたいです。今までやったことのないチャレンジをさせてもらえる機会はそうそうなくなってくるので、何らかの形で T-ACT の企画に携わることは自分にとってまた少し成長するきっかけになりました。また T-ACTer さんたち集めて打ち上げやりたいですね。

〇登壇者の方々の感想

・つくばランウェイプロジェクト　杉山理佐（芸術専門学群 3 年）

コロナ禍で筑波大生同士の繋がりを感じることが難しい年でした。しかし、このイベントに誘っていただき参加した事で少しそういった繋がりを感じることができ楽しかったです。そういった意味で今年入学した一年生方に向けたイベントであるとともに、在学生にも嬉しいイベントだったと思います。参加させていただきありがとうございました！

・Everyday Tsukuba Project　古畑翼（博士前期課程教育学専攻 2 年）

2019年 3 月の下半期活動報告会で、私がプランナーを務めた「Everyday Tsukuba Project」は、T-ACT の最優秀賞企画として表彰されることになりました。ひょんなことから飛び込んだ「茗渓会筑波事務所」でのアルバイトが、「大学の同窓会」という存在と私との出会いでした。ただのバイトがいつのまにか卒論の題材になり、自分だけではなくもっと多くの学生と卒業生との繋がりを創りたいという思いから、「同窓交流研究会 Dam」というサークルの設立へと結実していきました。「同窓交流研究会 Dam」の代表的な活動となったのが、「Everyday Tsukuba Project」でした。色々な方に注目され、喜んでもらい、かつ多くの仲間と取り組んだ結果の表彰は、いつのまにか学業と課外活動の垣根を超えた私のライフワークが、かけがえのない宝物になったことの象徴でもあったように思えました。と同時に、1 年間の団体活動、そしてその後の企画の成り行きは、あくまでこの「同窓交流」というテーマが、極めて私一人の個人的熱意から生まれたものであったために、自然に受け継がれていくことが難しいと感じさせられるものでした。このような、ある種の失望と、大学院生活の慌ただしさから、まともな活動が行えないまま日々は過ぎていきました。そして今年…。

新型コロナウイルスの影響により、昨年度末の活動報告会から始まり、あらゆる T-ACT 関連のイベントがたち消えになりました。私にとって一番大きかったのは、「フルタイム学生として（おそらく）最後の 1 年間、『もう院生だから…』と躊躇せずにやり残したことは全てやりたい」という思いから、パーソナリティに立候補した T-ACT ラジオ番組の収録が、初回以降 1 度も行えなかったことです。このやるせなさに忸怩たる思いを抱えながらも、修了に向けた学生生活そのものが先行き不透明となってしまったことに対する不安を、日々粛々と飲み込んでいきながら2020年は過ぎていきました。

しかし、少なくとも 5 年間、筑波大学のキャンパスライフを自由に、存分に楽しんできた自分と、夢や希望に胸を躍らせて受験勉強に励んできた新入生と、この一年に対する思いは決して同じではなかったのではないか、と思います。筑波大学に進学してきてよかった、と一人でも多くの学生に感じてもらうために、先輩としてできることはなんでもしてあげたいと思いながらも、人と人との交流の機会が著しく絶たれてしまった（時には人目を気にしなければならなくなった）状況の中では、自分にできることは何もないと無力感を感じるだけでした。

そんな時に私のもとへ話が転がり込んできたのが、「T-ACT のススメプロジェクト」でした。このプロジェクトは、大学生が世間から憐憫と冷笑の眼差しで見られている状況でも、あくまで純粋に、決して前に進むことを諦めない学生たちの姿に、私を向き合わせてくれたものでした。そして、2 年前、「Everyday Tsukuba Project」の終了以降止まっていた時計の針を、再び前に進めてくれるものでした。上級生だからと格好つけず、背伸びせず、とはいえ自信は決して隠すことはせず、「Everyday Tsukuba Project」を通じて私が得たものを真っ直ぐ伝えよう、と臨んだのが、T-ACT とのご縁が始まって以来初のオンラインイベントとなったのでした。

初めての試みであったこのイベント、本来私たちの声を届けたかった新入生の参加者は決して十分なものではありませんでした。しかしながら、多くの素晴らしい企画のプランナー同士の交流は、私たちの「春」が確実に未来に待っていることを感じさせられるものでありました。その意味で、失われた青春を過去に求めて彷徨う存在に堕することへの私の恐怖を一部和らげてくれることになりました。これが「楽しんだ者たち同士の成功体験」にならないように、いつか何らかの形で、この一年間やるせない思いを抱えていた学生たちに届くことを心から願っています。

・BLUE ONE BEAT!　天野隼太（比較文化学類 1 年）

今回のイベントを通して、サークルに発展したアクションや、学内問わず人々の思いをつなぐアクションなどを知り、あらためて T-ACT は可能性の開かれた場であると感じました。またフリートークの場では、多種多様な活動を手掛ける人たちと意見交換をすることで、今後活動をする上での新しい視点を得たり、それぞれの方が

持つ活動への思いを伺ったりすることができました。このイベントで学んだことを今後の活動に取り入れ、より良いものにいていきたいと思います。

・つくばの春を取り戻せプロジェクト　水谷奈都乃（教育学類 1 年）

自分のものと全く異なるタイプのプロジェクトであっても、そのプランナーさんが抱える悩みは共通している部分も多く、共感と新たな学びの両方を得ることが出来たのがとても嬉しかったです！

・Higa Coffee　丸子さくら（社会工学類 2 年）

準備期間を通して、自分の団体の目的を見つめ直すいい機会になりました。

Higa Coffee は設立して数ヶ月の団体で、代表も二代目に変わったところでした。そのため、目の前の活動にバタバタ取り組んでいて、目的を見失いかけていたかもしれません。

なんでこの活動をやっているのか？他の人を巻き込んでやりたいのか？考えるいいきっかけをいただきました。

当日は他の団体の方のお話をお聞きできて、共感できる部分や参考になる新しい発想などがあり、とても興味深かったです。組織運営や企画立案の立場の方々とお話することが少なかったので、個人的にとても勉強になりました。

・つくばお笑い集団 DONPAPA　桑田和哉（生物資源学類 2 年）

このイベントの前に、あまりサークルの成り立ちがわかっていなかったので、調べてみると、4、5 年ほど T-act のお笑いに関する企画があって、そこからこのサークルが生まれたとあり、長い間、T-act に支えてもらっていたことがわかった。私は大学でお笑いをすることができて本当に良かったと思っているが、長い T-act の協力がなければ、このサークルが生まれてはなかったことを考えると、T-act という存在は、大学で好きなことをしたい人にとって、非常に強い味方であり、大きな存在であると思う。そのようなことを本番でも伝えることができて、本当に良かったと思う。

・盆 LIVE 実行委員会　駒野樹（比較文化学類 3 年）

まずは、この度のオンラインイベントに参加させていただき、本当にありがとうございました。学生同士で交流することが難しい昨今、学生の生の声を交わすことができたのは、大変貴重な機会でした。

今回のイベントを通じて、T-ACT をスタートに、とても多様で面白い活動が行われていることを改めて知りました。学生生活を送る中で、誰しもがふと「○○をやってみたい！」という気持ちを抱くはずです。そうした日常の些細な気持ちを大切にし、実際に活動に発展させるというのは、とても重要なことだと思います。T-ACT を発端に活動を始めた皆さんからは、そうした意欲がひしひしと伝わってきました。また、学生のあらゆる「やりたい！」を尊重し、親身になってサポートしてくれる T-ACT の存在の偉大さも、当イベントを通じて感じることができました。

大学生の期間というのは、時間にも体力にも比較的余裕のある期間です。だからこそ、大学生の間に様々なことに挑戦し、見識を広げるべきだと思うのです。その挑戦の第一歩を踏み出させてくれるのが T-ACT なのだと、今回のイベントを通じて感じました。

○参加者の方々の感想（イベント後のアンケートから抜粋）

・「なかなか準備ができていない中の登壇でしたが、とても楽しい時間を過ごせました〜！企画していただきありがとうございます。」
・「とてもいい刺激になりました。ありがとうございました！」
・「自分の知らないところで、様々な活動が行われており、どれも興味深いものでした。」
・「他団体の方々の活動、思い、苦労がすごく伝わってきました。貴重な機会を頂きありがとうございました。」

○イベント後のアンケートの回答

・満足度：89%
・T-ACT（つくばアクションプロジェクト）をより身近に感じることができましたか？：はい100%
・学生生活や大学をより身近に感じることができましたか？：はい100%
・このようなイベントがあればまた参加したいですか？：はい100%

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「やってみたい」ことがある、ということはそれだけですごいことだと思います。ぜひ行動に移して学生生活を充実させてください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

温かくご相談に乗っていただき、利用して良かったと感じています。いつも大変お世話になっております。ありがとうございます！

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

令和2年度茨城県警察大学生サポーターの募集について（19031V）

受入団体名：茨城県警察少年サポートセンター（13005G）

活動内容

当職員と共に

・街頭補導活動
・小学校等での非行防止教室
・スポーツや農業、学習支援等による立ち直り支援活動
・街頭キャンペーン

などを行います。

なお、活動自体は学生の皆さんの都合に合わせて参加していただけます。

・街頭補導活動～主に水戸、つくば、土浦市内
・非行防止教室～県内の小学校等
・立ち直り支援活動～主に水戸やつくば市内の農場、スポーツ施設、当センターなど
・キャンペーン～主に水戸、つくば、土浦市内

活動期間

4/1～3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：1 人

活動報告

●受入団体担当者

茨城県警察が県内の学校で実施する非行防止教室・薬物乱用防止教室用のパワーポイント資料のイラスト作成を実施した。

パワーポイントの内容に即した薬物のイラスト（タバコやアルコールのイラスト）や、インターネットに関係するイラスト（OA 機器やスマホを操作する人物のイラスト）の作成を行った。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

非行防止教室・薬物乱用防止教室で使用するパワーポイントの挿絵作成を行った。本プロジェクトに参加した目的は、活動を通して中高生とコミュニケーションをとることだったため、当初の目標を達成することは出来なかったが、少しでも中高生の役に立てば嬉しいと感じている。

今後の課題

コロナの影響で研修会や活動が自粛になり、思うように活動できなかった。今後はオンラインでも参加できるようになれば良いと感じた。

学生が作成したイラスト

外国籍子ども校外学習サポート教室（20001V）

受入団体名：非営ボランティア団体 伴の会 in Tsukuba（18010G）

活動内容

外国からつくば市に転校してきた子どもは、日本語が不自由で、コミュニケーションの難しさや文化の違いに、学校での学習と生活に戸惑うことが多くあり、学校で満足な学習ができないこともあります。私たちの校外学習サポートにより、安心感を持てる居場所を作ることで、子どもがのびのびと自己表現したり、不安な気持ちや緊張を取り除くことができます。子ども達の心身の健全な成長を見守るとともに、日本一の教育都市に貢献し、安心で魅力ある「国際都市つくば」を目指して活動しています。

毎週日曜日（15：00〜16：30）

吾妻交流センターで有志の方が市内外国籍小中学生を対象に
日本語、学校の授業、宿題の手伝いをする。

活動期間

12/1〜2/5

参加学生

T-ACT ボランティア：3 人
（10/18　1 人、11/8　3 人、11/15　1 人）

活動報告

●受入団体担当者

コロナの影響により活動を縮小の中、3 回程ご協力していただきました。

・日本語のカルタを使って日本語を教えてくださいました。
・小学生の算数プリント、漢字プリント、学校宿題などの学習を丸付け、説明などのお手伝いをしていただきました。
・本ボランティアの主な目的である外国籍の子どもたちに居場所を提供すると言う意味で、勉強以外の活動においてもゲームなどを通して、子どもたちに優しく対応してくださいました。
・学生さんは、活動内容をよく理解していただき、子どもたちに優しく、笑顔でサポートし、素晴らしいと思いました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

一年ぶりに子供たちと会えて、学習について話し合いして子供の成長を見られたことは何よりも嬉しかったです。短い時間ですが、少しでも楽しく過ごせて子供の相手にできて良かったと思う。

多くの人と会えなくなった寂しいコロナ禍の中で、一度でも子供たちの元気な姿見られると自分も頑張ろうとやる気が出てくる。

茨城県のひきこもり支援をもりあげよう（20002V）

受入団体名：一般社団法人 アイネット（18007G）

活動内容

不登校児童生徒はますます増えています。茨城県ひきこもり相談支援センターでは、困難を抱える若者に早期から一貫した包括的支援を試みていきたいと思っています。

1．不登校、ひきこもりの方の居場所活動（※1）への協力。（毎月第一、第二土曜日）
2．センターの支援員と連携した不登校児童生徒、若いひきこもり者への支援
3．学習支援の手伝い
4．不登校、ひきこもり問題の周知活動（※2）への協力

※1　開始前に研修を行い、居場所活動において、利用者が楽しめるようサポートする。活動は、ボードゲームを行ったり、おしゃべりしたり、趣味の活動（水彩画、色鉛筆画）、その他利用者が望むものを行う。居場所活動は、ここに来たら、活動時間はやることがあり、それが強要されず、自分がやりたいことが自由に行える場所、ここで他者と触れ合う練習をする。

※2　講演会やひきこもり支援フォーラムにおいて、スタッフとしてサポートする。受付、会場準備、席への誘導、アンケート回収等

活動期間

11/17～3/31

・ひきこもり者への訪問支援同行（9/25、11/2、11/26、1/4）
・ひきこもりを持つ親の会への参加（12/16）
・オンライン討論会への参加（1/19）

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

活動報告

●受入団体担当者

訪問支援同行　：当方の支援員と同行して、ひきこもり状態にある中学生、高校生世代の家庭への訪問。世代が近いので、ゲームの話やフィギィヤの話等でお兄さん的役割を果たしていた。）

親の会への参加：月例で開催されているひきこもりの子を持つ親の会への参加、親御さんからの質問に答えていた。）

オンライン討論会参加
：ひきこもり状態にある中学生、高校生世代と長くアイネットのボランティアをしていて昨年から大学教員になった先生、当方の支援員とでオンライン座談会を実施、それに篠田君が参加）

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

不登校の学生宅への訪問、引きこもりの人が住むシェアハウスでの生活など。

引きこもりの人とそうでない人の距離を感じた。一方つながりさえできれば引きこもりの人も前に進めるという手応えも感じた。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

不登校・引きこもり支援についての研修に参加させていただき、不登校、ひきこもりの現状や支援する際の注意すべきポイントなどについての知識を得ることができた。

今後の課題

今回得た知識を実践できるよう、理解を深めていく必要がある。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

不登校・ひきこもりの方々の居場所づくりをオンラインで支援、オンラインでの学習支援、フリースクール立ち上げの支援などが活動内容。研修を通して、不登校・ひきこもりの方々の現状や政府・団体の取り組みなどを学んだ。

今後の課題

研修を通して、不登校・ひきこもりの方々との接し方が課題であると考えた。個人的に不登校・ひきこもりの経験はあるが、同時に大学生であるという立場から、安易に共感するのではなく慎重に言葉を選んで接しなければいけないという意識を持たなければならないと考えた。

新型コロナ禍における学生への食事支援事業（20004V）

学内組織名：学生部学生生活課、T-ACT

活動内容

2021年１月22日（金）に実施した第１回食事支援事業において、約3000名の学生に食料品の配布を行った。配布日には、当初の想定を超える多くの学生が来場し、食料品を受け取れなかった学生がいたこと、また、配布日が１日だったため、来場できなかった学生もいたことから補完事業として2021年２月17日（水）、18日（木）に追加支援を行った。この支援事業において、準備や配布等のための学生ボランティアを募集した。

【日　　時】設営　２月16日（火）
　　配布　２月17日（水）、18日（木）
【場　　所】平砂学生宿舎共用棟１階食堂
【配布対象】１月22日（金）の配布で支援を受けられなかった学生及びお米の受取りができなかった学生
【配布予定】１人あたり【お米、カップ麺、レトルトカレー】等
【配布方法】待ち時間の短縮及び新型コロナウィルス感染症対策強化のため、事前登録制による配布とする。
【募集人数】各日10人程度

活動期間

２月16日（火）～18日（木）

参加学生

T-ACT ボランティア：26名

活動報告

●学生部学生生活課：大手昇一

本事業により、多くの学生のみなさんに食料品を届けることができたことを大変嬉しく思うと同時に、ボランティアに参加してくださったみなさんに感謝申し上げます。

第１回食事支援事業において支援を受けられなかった学生を対象に、今回の第２回目を開催する運びとなり、前回の開催経験を踏まえ、教職員と学生ボランティアが一丸となってこの支援事業に取り組みました。新型コロナウィルス感染症対策に万全を期しながらも、短い準備期間の中で支援事業を円滑に進めることができたのは、ボランティアのみなさんの協力のおかげです。

また、第１回目と同様に今回も地元地域のみなさまや企業様をはじめ、多くの方々にご協力・ご支援をいただきました。みなさまのおかげで多くの学生に食料配布を行うことができましたこと、改めて感謝の気持ちをお伝えいたします。

みなさまからのご支援により、本学の学生がより一層勉学に励みながら他者を思いやる心をもって、社会に貢献できる人材となるよう期待します。

これからも多くのみなさまの暖かいご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

● T-ACT 推進室長：加賀信広

新型コロナウィルス感染症の再拡大（いわゆる第３波）への対応として、近隣の住民・企業・卒業生・教職員など多くの方々のご協力により、学生への食事支援が行われましたが、その際のボランティア募集を学内組織である学生部学生生活課が行い、それを T-ACT ボランティアの枠組みに載せるという初めての試みが実施されました。これまでは、もっぱら募集情報を学外団体からいただくという形でしたが、今後は学内組織によるボランティアの実施も視野に入れていきたいと考えています。

今回の活動には、26名の学生さんが参加され、第１回の食事支援で支援を受けた学生が今度はボランティアとして支援する側にまわったり、また留学生がボランティアとして参加してくれたりなどのことがあったと聞いています。コロナ禍でたいへんな状況ではありますが、こんな形で人の輪が広がっていってくれればと思います。

● T-ACT ボランティアアドバイザー：木田江里華

今回の食事支援事業に携わっていただいたみなさまのおかげで、多くの学生に食料品を届けることができました。地域のみなさま、企業様、本学 OBOG、教職員の方々から前回に引き続き多くのあたたかいご支援をいただけことに感謝しております。

ボランティアに参加した学生から今後の支援体制がよりよいものになるようにと、開催後にフィードバックを

いただきました。みなさんからのご意見を基に、今後の活動が更に実りの多きものとなるように私達も努めていきたいです。また、私としては 1 回目の時に支援を受けた学生が、今回はボランティアとして参加してくれたことをとても嬉しく思っています。T-ACT ボランティアでは、学生のみなさんが今後もこういった活動に積極的に参加し、学内外の方々と協力して地域を盛り上げていける環境を整えながら、フォーラムスタッフ一同でサポートしていきたいと強く思います。ボランティアに関する質問や、情報を得たい等ありましたらいつでも T-ACT までお問い合わせください。

●学生参加者：織田くれは（看護学類　2 年）

活動の成果

コロナ禍の中、あらゆる活動が中止せざるを得ない状況であり、またボランティア活動も対面でのボランティアは中止になっているものがほとんどの中で、この食糧支援事業のボランティア活動がありました。多くの方々が賛同し協力してくださったことで、多くの食糧がたくさんの方の手に行き届く瞬間を間近で見ることができました。また、この活動はたくさんの人の思いや、熱意のおかげで行えたことを感じることができました。食糧を支援していただき、そしてこの活動に参加させていただけたことをきっかけにして、一人一人が勉学や研究、スポーツ、ボランティア活動など次の何かに繋げられるような循環が生まれていく活動をし、将来は何かの形で社会に貢献ができればと思います。

今後の課題

今回、食糧を入れる袋は持参でありましたが、袋が足りていない人が多く見られ、袋が足りないことで食糧をもっと欲しくても持ち帰れない人もいたと思います。そのため、事前にどのくらいの食糧が支援されるのか、またどのくらいの大きさの袋が必要なのかを伝えておく必要があると思いました。

また、身体障害者など支援が必要とする方への対応や雨天時の想定もしておく必要性があると感じました。

●学生参加者：細谷綾乃（看護学類　3 年）

活動の成果

コメントブースを担当していたこともあり、コロナ禍で多くの学生が経済面や精神面で我慢していて、この食事支援事業が果たす役割がとても大きいことを知った。自分自身もコロナで留学が中止になったり、学類の特性上行動制限が必要であったりして、1 年間今の生活や将来のことに不安になっていた。そんな中で大学を通して支援事業に関わり、学生の今の思いを知れたことが貴重な機会となった。

今後の課題

継続的にこのような支援を続けていけるかどうかが課題となると思う。コロナ禍での生活が予想以上に長引いていて、心の面でも筑波大生が元気になるようなイベントがあれば良いと思う。また、コメントブースを設置していたが、3 密対策や荷物が多いこともあり、そのコメントを共有する機会が少ないように感じた。

●学生参加者：滝史恵（看護学類　3 年）

活動の成果

積み上げられた食料品の数に驚くと同時に、支援してくださる方々がたくさんいることを実感した。多くの人がコロナ禍において自分のことで精一杯になっているのにも関わらず、周りに手を差し伸べてくれる人がいることに感銘を受けた。

今後の課題

学生と地域の方々が支え合ってこのコロナ時代を乗り切っていく必要があると考えるため、感染症対策上今まで通りにはいかないかもしれないが、学生が多いことを強みに地域とつながるような取り組みがあるといいと思う。

●学生参加者：ALAWI ASEEL WALEED（生命地球科学研究群 博士前期課程２年）

活動の成果

一回目の配給の時、私はただの受取人に過ぎませんでした。配布の列に並んでいる時に、受け取ることではなく与えることに協力したいという想いを強く感じていました。だからこそ、食事支援ボランティア募集のメールを受け取ったときには、喜んで参加しました。

１日しか参加できなかったのですが、とても良い経験になりました。新しい友人を作り、教授やボランティアの方々と交流することもできました。支援食糧の前に立って、受け取りに来る学生に挨拶し、カップラーメン等を配ることで、大きな満足感と喜びを感じることができました。コロナ禍で多くの人が苦労している中で、少しでも困っている人の為に役立つことができて嬉しかったです。

2020 年度　実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図 1 ）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援―学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生―」にある。学生支援 GP が終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

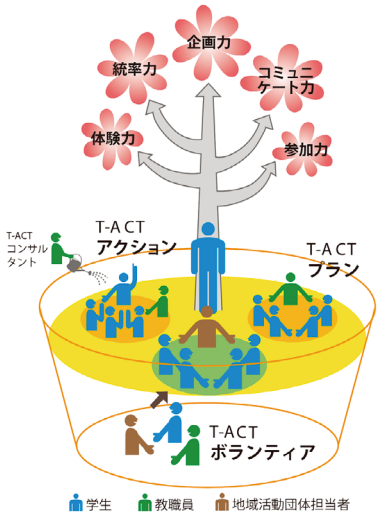


図 1　共創的コミュニティ形成による T-ACT の展開と学生の成長

T-ACT には、学生が企画立案し展開する T-ACT アクション、教職員が企画立案し展開する T-ACT プラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をする T-ACT ボランティア（2012年度から開始）の 3 種類の活動がある。

T-ACT が支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティヴな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケート力、人をまとめ率いる統率力、ヴィジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACT アクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2020年度の T-ACT の支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2021年 3 月までに T-ACT 推進室で把握できたものに限られる。その中でも過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、これまでの活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っているわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

1．T-ACT で申請された企画等の状況

2020年度の T-ACT アクション・プランの企画申請数は35件（アクション35件、プラン 0 件）であり、そのうち11件（アクション11件）が承認された（図 2 ）。また、2020年度までの累積承認企画数は881件となった。2020年度に申請された企画における、プランナーは35名（重複者を除く実数は32名）であった（図 3 ）。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数よりも多いのは、前年度に申請された企画が次年度に承認される等によって、年度の申請数と認められる企画数が異なってくるからである。学生オーガナイザーは117名（実数は99名）、教職員パートナーは22名（実数は17名）であった（図 4、図 5 ）。T-ACT ボランティアに登録されて

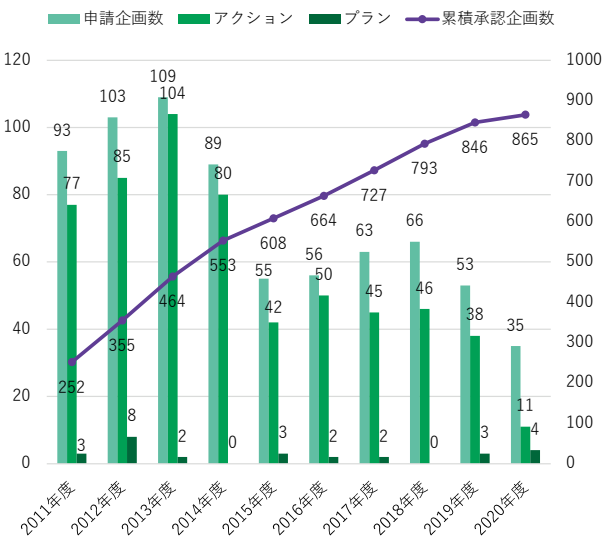


図 2　アクション・プランの企画承認数の変遷

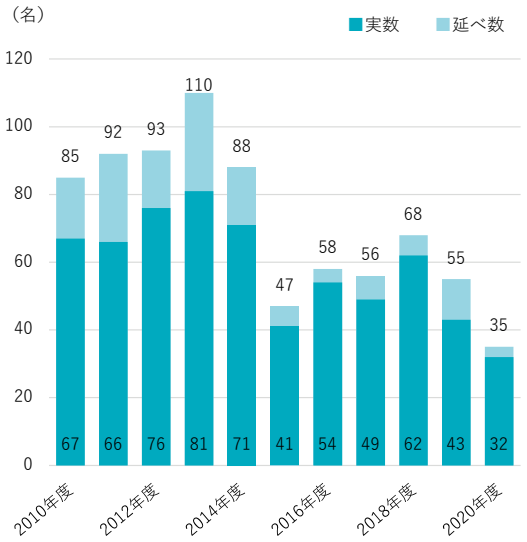


図 3　プランナー数の変遷

いる団体数は20件であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は3件であった（図6）。T-ACTボランティアに参加した筑波大学生の実数は14名であった（図7）。

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、全学的に課外活動が制限されることとなった。T-ACTにおける各種の活動も課外活動の一環であることから、全学的な制限の中での活動となったため、全ての活動において例年を大きく下回る企画数・参加者数となった。

T-ACTアクション・プランにおいては、年度の前期はオンライン上での活動のみを認める体制を構築した。そのため、進行形の活動は今までの活動形態の変更が求められ、円滑に活動形態を変更できた企画もあれば、対面での実施にこそ意義があるため変更が難しく、継続的な活動を断念した企画もあった。新規の活動に関しては、当初より活動形態をオンライン上のものとして考えることができたものもあれば、対面での実施という学生の希望に添えないものもあった。年度の後期においては、全学的な課外活動への制限緩和にともなって、感染予防対策を万全としたうえでの対面や外出を伴う活動であれば認める体制を構築した。前期よりも学生の活動の幅も広がったため、企画申請数の回復にはつながったと考えられる。一方で、企画承認のために考慮しなければいけない事項は増えたため、承認まで至る難しさは増したと言える。そのため、承認数の回復は緩やかであったと言える。

T-ACTボランティアは、より新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたと言える。全学的な課外活動への制限下であった年度の前期においては、学外に出て、地域の人々との活動が前提となるT-ACTボランティアの実施はいっそう困難であると考えられ、T-ACTボランティアの活動の募集を停止せざるをえなかった。また、T-ACTアクション・プランとは異なりT-ACTボランティアでは、主催である地域団体においてまずは実施の可否が検討されるが、多くの地域団体が活動を縮小、断念していたと言える。このことはT-ACTボランティア登録団体数の減少にも影響したと考えられる。また、課外活動への制限が緩和された年度後期においても、T-ACTボランティアで募集される活動は少なかったという結果にも影響したと言えよう。こういった状況下であっても特筆すべきは、大学が主導となって実施した食料支援事業へのボランティア参加者数である。地域団体主催のボランティア活動ではないが、T-ACTがボランティア募集の窓口となるとともに、参加した学生のうち

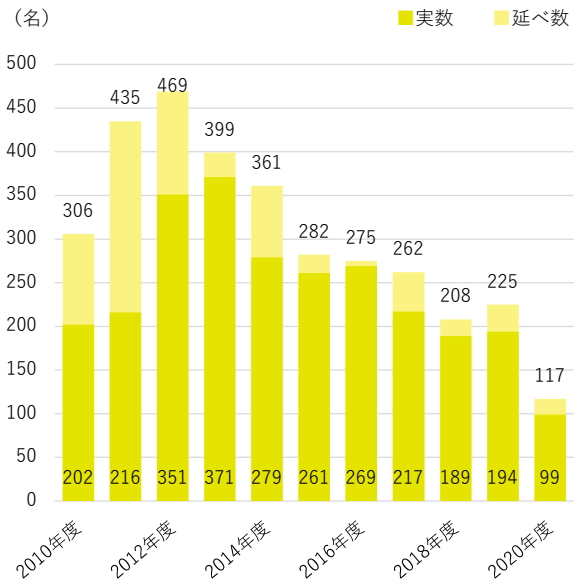


図4　学生オーガナイザー数の変遷

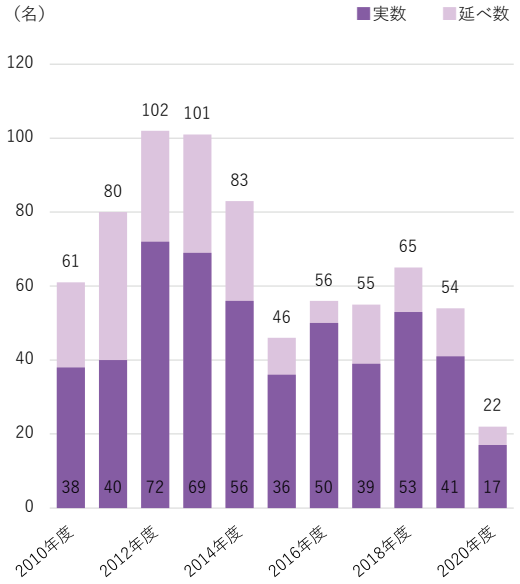


図5　教職員パートナー数の変遷

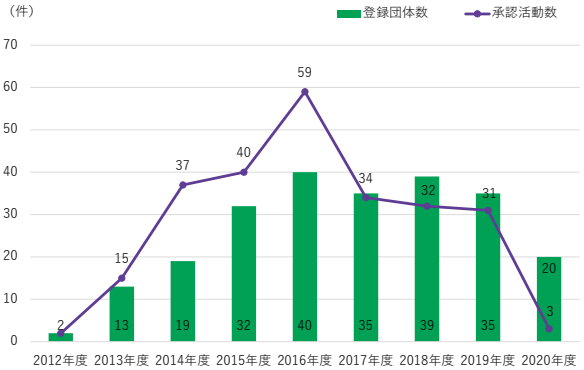


図6　T-ACTボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

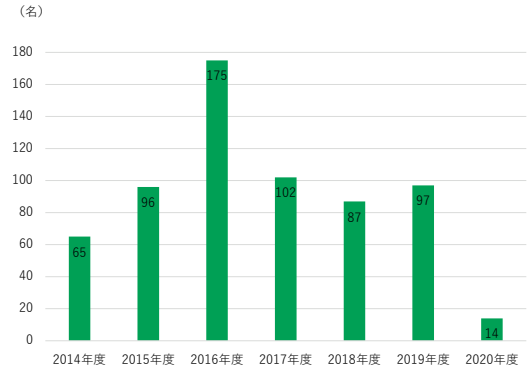


図7　T-ACTボランティアに参加した学生数の変遷

希望する学生に対して T-ACT からの認定証（ボランティアに参加したことを証明するもの）を発行したり、後述する活動報告会で報告の機会を設けるなどを行い、特例的に T-ACT ボランティアに準ずる活動として取り組むことができた。この食事支援事業には26名の学生がボランティアとして参加しており、ボランティア活動参加のニーズがあることを示している。また、参加した学生の動機や感想を聞くと、ボランティア活動を通じての人との交流を求めていることが示唆される。

2021年度においても、引き続き新型コロナウイルス感染防止のための制限下で、T-ACT の活動を進めていくことが余儀なくされるであろう。T-ACT アクション・プラン・ボランティア、それぞれの特性に合わせて、学生の活動できる機会をどのように確保していくかを検討し続けることは、引き続き喫緊の課題であると言える。

２．T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図 8 に示した。2020年度は新型コロナウイルス感染防止のために、年度の前期においては来室を基本的に控えてもらい Web システムを用いた遠隔相談での相談とし、後期においてもできる限り遠隔相談を行うような体制とした。そのため、2020年度からは実際に来室した者と遠隔相談を行った者とを合わせて、利用者数として計上することとした。2020年度の延べ利用者数は229名であり、実利用者数は186名であった。そのうち、遠隔相談で利用した者は156名であった。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図 9 に示した。T-ACT アクションの新規申請に関する相談などの利用（A 新規）が54.1%、T-ACT アクションの運営のための相談や作業といった利用（A 継続）が27.9%、T-ACT プランの新規申請に関する相談などの利用（P 新規）が 0 %、T-ACT プランの運営のための相談や作業といった利用（P 継続）が 0 %、T-ACT ボランティアに関する学生からの相談（V 学生）が4.4%、T-ACT ボランティアに関する地域団体からの相談（V 団体）が0.9%、T-ACT サポーターの来室（サポーター）が3.1%、総合科目に関する利用（授業）が4.4%、その他の理由による学生の利用（その他（学生））が 4 %、その他の理由による教職員の利用（その他（教職員））が 0 %、その他の理由による学外からの来室者の利用（その他（学外））が1.3%であった。

T-ACT 各種活動への申請数や参加者数と同様に、T-ACT フォーラムへの来室者数も例年に比較して大きく減少した。新型コロナウイルス感染予防のために、T-ACT フォーラムへの来室制限を行ったことが大きな理由であると言える。したがって、感染拡大防止のために人の往来を最小限にしたという点では、むしろ望ましい数字であると言える。来室者数の減少や T-ACT 活動の制限によって、利用目的の割合にも変化が見られたと考えられる。特にオンライン上での活動やできる範囲を模索する余地の多かった、T-ACT アクションに関する遠隔相談の数が多いと言える。遠隔相談の活用は今後も必須であり、その数が多いことは、T-ACT が今後も有効に活用されうる証左になると考えられるが、遠隔相談だけでは代替できない支援も T-ACT には多い。たとえば、物品の貸し出しや印刷機の使用などは、T-ACT フォーラムに来室することが前提となる。学生との相談の中では、こういった T-ACT フォーラムに来室して受けることのできる支援を受けられなくなったことが、個別具体的な困難として挙がることが多かった。また、2019年度以前は、T-ACT フォーラムに来室することで、T-ACT のスタッフや学生同士の交流も生まれ、そこから新たな人間関係や活動の充実につながることもあった。こういった T-ACT フォーラムで人と対するからこそ得られる支援や機会を喪失していることは、学生の体験にとって痛手であると考えられる。今後は、感染予防を念頭に置きつつも、2019年度以前は自然に行うことのできていた、対面で会うからこその効果を、どのように補強していくかも検討する必要がある。

３．T-ACT による人間力の成長

T-ACT アクション・プランの利用者の活動終了後の人間力の成長に関する調査を、Web アンケートで行って

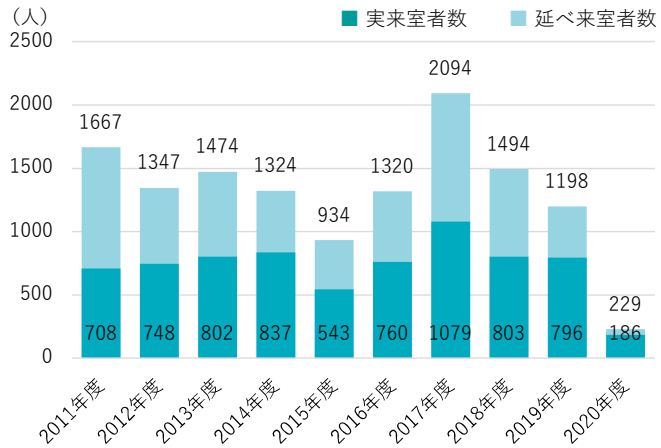


図８　T-ACT フォーラム来室者数の変遷

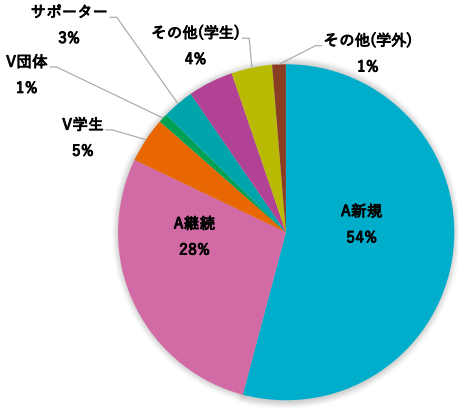


図９　T-ACT フォーラム利用目的

いる。参加力、体験力、コミュニケート力、統率力、企画力の5つを人間力の指標として想定し、それにくわえて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている（表1）。

調査対象はT-ACTアクション・プランの活動を終えた学生もしくは教職員であった。活動中に表1の質問項目をどの程度感じたかを4件法で尋ねた。5つの人間力についての回答結果は図10から図14までに示した。自己理解の深まりについての項目の結果については図15に示した。2020年度の調査対象は32名であり、そのうちプランナーが14名、オーガナイザーが12名、パーティシパントが6名であった。なお。パーティシパントは6名であったため、パーティシパントのみの回答状況は示さないこととした。

全体の回答状況をみると、いずれの項目も「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が70%を越えており、T-ACTへの参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。役

表1　人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた
活動に積極的に関わることができた
活動の実行に貢献することができた
活動にできるだけ多く参加できた
互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して，新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた
活動を通して，自分の改善すべき点を知ることができた
活動を通して，喜怒哀楽を感じることができた
活動を通して，なんらかの新しい発想を得ることができた
いろいろな出来事を見聞きできた
活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケート力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた
他のメンバーと積極的に関わることができた
自分の気持ちを伝えることができた
他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた
孤立したメンバーがいないかどうか注意を払うことができた
指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた
活動の目的、あるいは目標を達成させることができた
リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた
活動を実現するために適切な計画を立てられた
活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた
ある程度計画通りに活動を遂行できた
活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

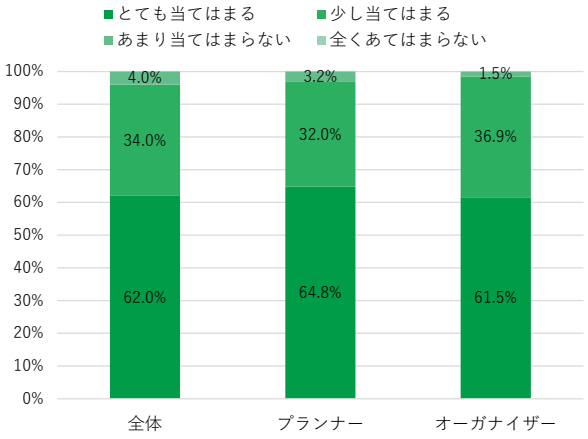


図10　T-ACT参加時の役割毎における参加力の成長

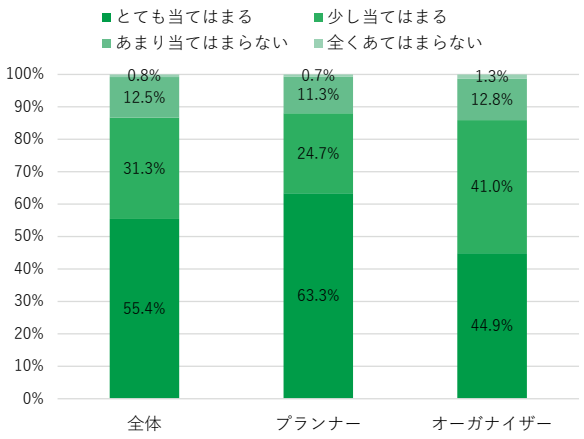


図11　T-ACT参加時の役割毎における体験力の成長

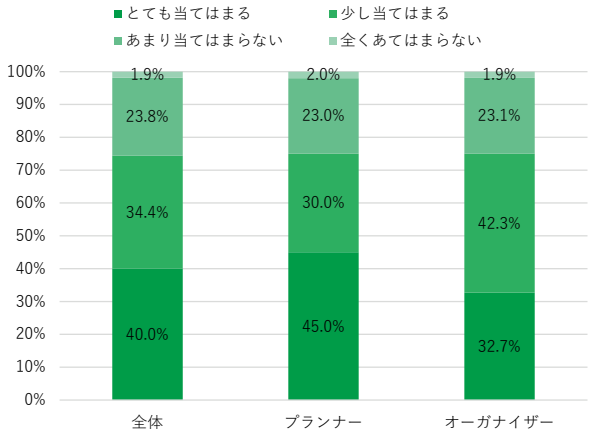


図12　T-ACT参加時の役割毎におけるコミュニケート力の成長

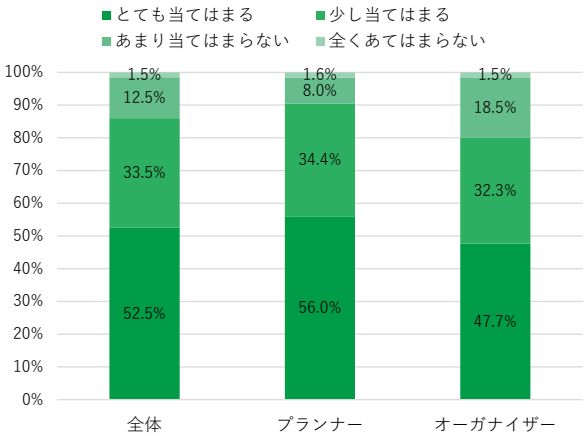


図13　T-ACT参加時の役割毎における統率力の成長

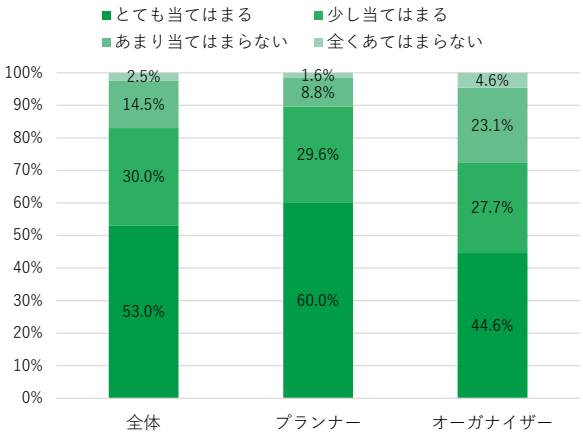


図14　T-ACT 参加時の役割毎における企画力の成長

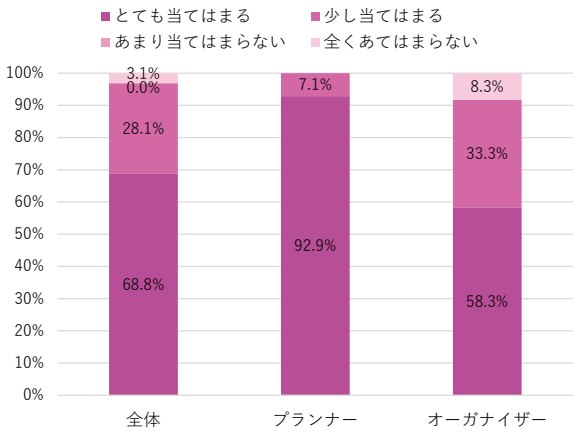


図15　T-ACT 参加時の役割毎における自己理解の深まり

割別でみると、オーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られている傾向があるのは例年通りである。プランナーといった、企画においてより重要な役職にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができることは、体験型の学習機会を提供している T-ACT ならではの特徴であると言える。各人間力を見てみると、より高次の力であると定義されている統率力、企画力といった能力の方が、達成が難しい傾向にあることも想定通りの結果である。より高次と考えられている人間力についても、T-ACT に参加して役割をステップアップしていくことで、徐々に達成できるようになると言えるであろう。こういった結果は、毎年の活動報告で確認できる。特に今年度においては、新型コロナウイルス感染拡大の影響があったため、活動そのものへの制限が多かったが、例年通りに各人間力の発揮が見られる。したがって、活動する機会さえあれば、多くの学生が人間力の成長や自己理解の深まりを得られることが、あらためて示されたと言えよう。

4．公開シンポジウムの開催

T-ACT 推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動と T-ACT の成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にも T-ACT の支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。今年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインによる実施を行った。

○開催概要

日時：2020年12月11日（金）14：45～16：15
場所：Microsoft Teams を用いたオンライン形式での開催

○当日の様子

2020年度の公開シンポジウムは「人間力を育む学生支援のために　T-ACT の“これまで”と“これから”」というテーマのもとで開催した。本学大学生および教職員、広く一般の来場者などあわせて計59名が参加した。

佐藤忍副学長（学生担当）の挨拶後、第 1 部では「T-ACT による学生支援：これまでの展開」として T-ACT 推進室員の青柳悦子教授から、これまでの T-ACT の支援実績と効果について紹介した。第 2 部「T-ACT の意義：卒業生からの声」では、在学中に T-ACT を活用し、学生の自発性から生まれる地域貢献活動を先駆的に行った

佐藤副学長による開会の挨拶

第 1 部 T-ACT 推進室員による T-ACT 紹介

第２部「T-ACT の意義：卒業生からの声」

第３部「大学教育と学生の自発性：総合的な学生支援の構築を目指して」

卒業生の金岡孝浩氏をお招きし、ご自身の T-ACT の体験や社会人となった卒業生の立場から言える T-ACT の意義について、ご講演いただいた。第 3 部「大学教育と学生の自発性：総合的な学生支援の構築を目指して」では、20数年にわたって学生相談・学生支援に携わられてきた東京工業大学の齋藤憲司教授から、これからの大学教育に求められる学生支援と T-ACT の独自性や意義について、ご講演いただいた。以上のプログラムを通じて、学生の「やってみたい」を応援する学生支援制度である T-ACT について、“これまで”の支援を振り返り、“これから”の学生支援において学生の自発性を育てる意義を確認することができた。

５．活動報告会および企画表彰

2020年度の活動報告会は、例年通り、上半期と下半期の 2 回実施するのではなく、2020年度の 1 年間分の活動を対象とした 1 回のみの実施となった。活動報告会は 3 月24日（水）（13:30～16:30）に、Zoom を用いたオンライン形式で開催された。参加者は筑波大学生21名、本学教職員33名、学外参加者 7 名、計61名であった。

2020年度に活動を行った T-ACT アクション21件と T-ACT ボランティア 3 件、および本学主催の食料支援事業に参加した学生のうち、報告することを希望した学生により、11の活動報告が行われた。新型コロナウイルス感染拡大による様々な影響を受け、大きく制限される中での活動であったが、そういった中でも自分たちのできる活動を考え、「やってみたい」活動に取り組んだ報告がなされた。それらの報告から、様々な困難がある中で、うまく実現できた部分だけでなく、理想的にはできなかった部分も含め、自らの経験として生かす学生の姿が伝わってきたと言える。また、参加者間の交流を深めるために、オンライン形式で気軽な交流ができる時間も設けた。その時間では、発表を行った学生と参加者間とで積極的な質疑応答や交流がなされていた。

例年行っていた、T-ACT アクション・プランへの表彰（活動奨励を目的に、参加者の人間力をより高めたと評価される企画への賞の授与）は行わなかった。代わりに T-ACT アクション・プラン・ボランティアにおいて活動をした全ての学生に対して、その敢闘を称えることとした。そのため、活動に参加した学生のうち、希望する学生に対して、T-ACT 推進室からの表彰を行った。あわせて学生の「やってみたい」実現のために尽力いただいた本学教職員や地域団体に対し、感謝の意を表する賞も贈呈した。これらの表彰や感謝状の贈呈については、表 2 にまとめた。

６．外部評価委員会の開催

2020年度には、今までの T-ACT の支援活動や支援体制の整備、特に2016年からの支援体制について、有識者による外部評価委員会を開催した。外部評価委員会の実施概要および外部評価総括は、本報告書の「外部評価委員会報告書」に記載した。

この 5 年間の T-ACT の支援体制は、学生の「やってみたい」を実現させるために、学内にとどまらず学外の機関とも協力関係を築きながら、学生の様々なニーズに応えられるような幅の広さを身に着けてきた。多くの学生にとって社会実践力や人間力を身に着けることのできる支援体制である一方で、課題として、支援制度を受けるにあたっての心理的なハードルの高さや、実際の手続き上の難しさ、広報不足といった点も挙げられた。これらの課題が利用者数の伸び悩みの一因になっていると考えられるが、利用者数を伸ばすのではなく、利用する個々の学生の体験と成長を支援することこそ、重要なことであるとの指摘もなされた。総じて、短期的で試行錯誤を歓迎する T-ACT のコンセプト通り、チュートリアル的な丁寧な指導と支援によって、何かしらの活動を始めるということに対して入門的な体験ができ、その体験の範囲も幅広いものであることが、高く評価されたと言える。

T-ACT への高い評価がなされただけではなく、T-ACT の課題に対して様々な提案が、具体的になされており、非常に有意義な外部評価であった。今回の外部評価の結果を受けて、今後の T-ACT のさらなる支援体制の充実を図っていく必要がある。

表２　2020年度に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
T-ACT 推進室表彰	19025A	Tsukuba × Sweets Project2
T-ACT 推進室表彰	20003A	Tsukuba × Sweets Project3
T-ACT 推進室表彰	19029A	ゆうゆうゆう会 Vol.2
T-ACT 推進室表彰	19040A	ゆうゆうゆう会 Vol.3
T-ACT 推進室表彰	19031A	使い捨てプラスチックごみ削減キャンペーン
T-ACT 推進室表彰	19033A	Tsukuba Mikoshi Club
T-ACT 推進室表彰	19038A	つくメイク！
T-ACT 推進室表彰	仮19042A	BLUE ONE BEAT! 2020
T-ACT 推進室表彰	20002A	筑波の春を取り戻せプロジェクト
T-ACT 推進室表彰	20005A	ドコイコ
T-ACT 推進室表彰	20006A	オンライン性教育～意外と知らない私たちの性について～
T-ACT 推進室表彰	20007A	ビブリオバトル筑波杯　秋の陣
T-ACT 推進室表彰	20008A	筑波大生アクションのススメプロジェクト

2020年度に表彰されたボランティア参加者

T-ACT 推進室表彰	20001V	外国籍子ども校外学習サポート教室　参加学生１名
T-ACT 推進室表彰	20002V	茨城県のひきこもり支援をもりあげよう　参加学生４名

グッド・パートナー賞	片岡千恵 （体育系）	20006A　オンライン性教育～意外と知らない私たちの性について～
グッド・パートナー賞	尾内敏彦 （国際産学連携本部）	20005A　ドコイコ
ボランティア感謝状	茨城県警察 少年サポートセンター	19031V　令和２年度茨城県警察大学生サポーターの募集について
ボランティア感謝状	非営利ボランティア団体 伴の会 in Tsukuba	20001V　外国籍子ども校外学習サポート教室
ボランティア感謝状	一般社団法人　アイネット	20002V　茨城県のひきこもり支援をもりあげよう

筑波大学人間力育成支援事業
つくばアクションプロジェクト（T-ACT）
外部評価委員会報告資料

令和２年12月
筑波大学 T-ACT 推進室

目　次

2020年度つくばアクションプロジェクト外部評価委員会実施概要 …… 78

2020年度つくばアクションプロジェクト外部評価委員会評価総括 …… 79

評価資料抜粋

資料 1　T-ACT の主旨と成り立ち …… 83

資料 2　T-ACT 支援体制および中期計画達成状況など …… 86

2020 年度つくばアクションプロジェクト外部評価委員会実施概要

【はじめに】

筑波大学つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）では、筑波大学全体の特色ある人間力育成支援事業としてより一層の充実を図るため、社会貢献活動（ボランティア活動等）の活性化を推進するだけでなく、学内外の関連組織との連携のもと国際交流支援体制の構築や、経済界等からの資金獲得の枠組みの構築を進めてきた。T-ACT 事業の成果については、これまで T-ACT 公開シンポジウムや学生に対するアンケートの実施に加えて、学生の活動報告及び連携先である登録地域活動団体からの活動報告等によって検証してきた。2020年度においては、第 3 期中期目標・中期計画の最終年度を前に総合的な事業評価を行う必要があるため、外部評価委員会を設置し検証することとなった。本報告書は、外部評価委員会による検証結果及びそのために用意した評価資料をまとめたものである。

【日程】

1．日時　2020年12月11日（金） 13：15～17：00
2．場所　Microsoft Teams を利用したオンライン開催
3．実施内容
（1）評価資料に関する事前質疑（13：15～14：15）
・評価ポイントに関する T-ACT の説明
・質疑応答
（2）つくばアクションプロジェクト公開シンポジウム（14：45～16：15）
（3）外部評価委員会　本会（16：30～17：00）
・評価委員による評価および総括

【外部評価委員】※ ○印が外部評価委員長

金岡　孝浩　氏	筑波大学人文・文化学群人文学類2013年度卒業生
齋藤　憲司　氏	東京工業大学保健管理センター　教授
武田　直樹　氏	NPO フュージョン社会力創造パートナーズ　理事長
小林　千洋　氏	公益財団法人せたがや文化財団世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター　劇場部長
横田　能洋　氏	特定非営利活動法人茨城 NPO センター・コモンズ　代表理事
池田　潤　氏	学長補佐室長 / 筑波大学人文社会系　教授
○坪内　孝司　氏	教学デザイン室長 / 筑波大学システム情報系　教授

2020年度つくばアクションプロジェクト外部評価委員会評価総括

外部評価委員長　坪内　孝司

※評価点：5 特筆すべき　4 十分達成された　3 ほぼ達成された　2 ある程度達成された　1 達成されていない

（1）取組の趣旨・目的について

〔評価項目：成果状況〕学生の自主的活動の創生及び学生の社会貢献活動の推進や人間力の成長の達成状況、大学への貢献度等、目的が達成されているか。

学生自身の関心に基づく多種多様な自発的活動の実現を支援することで、学生の人間関係の広がり、学生生活の充実、人間力の育成を促進するという、つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）の趣旨、目的は十分達成されている。第3期中期計画に基づいた実行を確実に果たしてきた。学生の潜在的な力を見出しては育て、学生間・学生と教職員・大学と地域を結ぶ交流を促し続けることで、大学コミュニティにとってもはや欠くことのできない位置を占めるに至っていると言え、大学全体への貢献も着実に果たしている。T-ACTで成長した学生が社会で活躍することで、大学のブランド力向上にも寄与するであろう。その実践は交流のある他大学や地域にも良い影響を与えており、我が国の学生支援の歴史においても高く評価されるべき実績を積み上げてきたと言える。

一方で、（2）以降に記すように、より多くの学生の参加や活動内容の多様化に関しては多くの課題が認められ、今後の伸びしろに期待したい。

【評価点：　4.5　】

（2）取組の有効性・効果

〔評価項目：実施内容〕目的を達成するための体制づくり、支援ツールの企画・作成を実施するなど、効果的な取組の推進方法が構築・実施されているか。

【2016年度から2019年度における個別の取組に対する評価】

・国際交流支援体制構築について

留学生の適応や学生の広い視野の育成に対して果たしうる貢献は大きい。しかし、多言語でのインフォーメーションや日本人学生とのマッチングなど、留学生がアクセスしやすい環境の整備はさらに必要である。

・学生が活動するにあたっての資金獲得体制構築について

資金そのものを大学側が用意するのではなく、資金を獲得する手段をサポートする体制が適切であると言える。卒業生などで資金獲得のプロとして活躍している方のサポートも活用するなどのさらなる工夫も考えられる。

・社会貢献活動をさらに活性化させる体制構築について

関係機関との連携を深め、学生のニーズに合わせた情報提供や窓口紹介を可能にしている。今後はより学生が地域の活動や住民の方々に触れる機会を提供できると良いであろう。地域社会の中で課題意識を有する当事者との出会いの中で、誰かの役に立ちたいという気持ちが生まれ、地域に興味を持ってチャレンジする学生がより多く出てくることが予想される。

・大学間連携の強化について

シンポジウム等を通して大学間連携の強化にも努めている点が評価できる。学生間で連携する試みが増えることが望ましく、学生同士が自由闊達に繋がるのが理想であるが、立地を考えると市内を超えた繋がりは物理的な難しさもあろう。

【総合的な評価】

学生にとっての成長促進的な意義を太い主柱に据えつつ、同時に連携・協働する教職員、大学コミュニティや地域コミュニティ、他大学関係者に対しても極めて大きな貢献をなしている。T-ACTアクション・プランにおける支援については、二段階承認制度へと改定を行い手厚い支援を可能にした。また、T-ACTボランティアにおいては、専属のボランティアアドバイザーもおり、きめ細かい対応を行っている。

一方で課題もある。ビジネス体験を志向した企画の承認件数が少ない点はその代表であろう。また、学生のボランティア意識を高める方策も検討されたい。たとえば、大学を代表・象徴するような活動をいつでも学生が行える枠組みなどを設けることでボランティア意識を育むことに加え、大学のブランド化にも寄与すると考えられる。「意識高い系」の学生が関わる場所と見られがちな状況は、積極的になれない学生にとって近づきにくくなるという問題につながる。企画申請の件数を増やすことに固執すれば、そういった積極的な学生へと目が向きがちになり、さらに「意識高い系」の学生が関わる場所というイメージが強くなる懸念もある。むしろ、積極的になれない学生をつなぐ機能の充実が望まれる。

【評価点：　4.2　】

（3）取組の紹介・広報活動

〔評価項目：情報発信〕Webサイト等の広報ツールの構築やシンポジウムの開催等、取組の積極的な情報発信が行われているか。

Webサイトの恒常的な運用や定期的なイベントの開催によって、学内外に対して着実に知名度を高めている。企画数の横ばい傾向は、T-ACTが学内ネットワークの中で確固たる安定的な貢献を果たしていることの表れと肯定的に評価できる。

学内に対する広報の課題として、英語ページをWebに用意する等、留学生を対象とした広報は強化する必要がある。また、積極的になれない学生の参加を促すためにも、あと一歩踏み込んだ情報周知が必要であろう。入学当初の支援制度紹介の充実を図ることに加え、教職員全体が授業や日常的交流の中で学生たちの自発性を後押するような風土の醸成などが求められる。

学外に対する広報においては知名度を高めているとは言え、T-ACTを知っている地域団体や市民はまだ少ないと考えられる。学生や大学関係者と地域団体との顔の見える関係を増やすことで、地域での認知を高めることができるであろう。T-ACTを利用した卒業生に対しての働きかけも開拓の余地がある。

【評価点：　3.2　】

（4）取組の改善・評価

〔評価項目：評価体制〕取組の評価体制の構築・実施状況は適切に行われているか。

毎年度の取組のデータ化や適切な頻度での外部評価などを行っており、理想的なPDCAサイクルを回している。そういった毎年度の評価や外部評価を受けての支援体制の改善について、その変化の過程を整理することで、学生支援制度としての発展という観点からの貴重な事例研究になりうる水準に達していると考えられる。

外部評価委員会の構成については、T-ACTに関連し、その実践についてよくわかっている委員と、先入観なく評価できる委員が混在する構成がより望ましい。

また、今後の発展のために、効果研究として意味のある評価指標や方法を検討する必要もあり、活動に伴う学生の成長の評価指標や方法を多角化することも求められる。その際は、学生一人ひとりの確かな変化と成長を、学生たちとの日常的な交流の中で支援者が感じ取ることこそ、最も意味のある評価方略であることを大切にされたい。

【評価点：　4.2　】

（5）取組の将来性

〔評価項目：将来性〕今後の発展的運営が期待できるか。

T-ACTの支援体制は、時代の変化、学生のニーズや気質に合わせて常に進化するよう、大学が一丸となって取り組んできたと言える。今後も、学生への接し方や広報のあり方、支援体制を柔軟に調整しうる体制や態度をT-ACTが持ち、筑波大学の教職員全体がともに、学生の自発性や挑戦を支援する意識を高めることで、自ずと学生の意識も高まるであろう。T-ACTの枠組みを求める学生がいる限り、本活動は継続されるべきである。

一方で、T-ACT創設当初の基本理念でもあった、積極的になれない学生たちに対するアプローチにはいまだ課題がある。学生のもやもやした思いと、心のうちに秘めている希望に寄り添って、学生同士がつながる機会を充実させることも求められる。そういった学生たちの主体性や人間力の成長を測定・評価する手法の開発も急務であろう。また、参加した学生たちや卒業生の方々も加えた大きなネットワークを活用することも、将来性の保証につながると考えられる。

将来性を考える際に忘れてはならない点は、T-ACTに関与する教職員の負担が過大にならないよう配慮することである。また、専任教員においては、今後のキャリアパスも含め、学生支援特有の専門性を有する教員像を描けるような体制づくりも非常に重要である。

【評価点：　4.3　】

（6）総合評価・特記事項

教職員が一丸となり合意形成を図り、学生が挑戦し、アクションを起こしやすい環境を整えることはいつの時代のどこの大学教育においても普遍的に必要なことであり、T-ACT はそれを実現してきた。教育の本質は対話であり、学生が自ら学べるようになるためには、教育機関からの何らかの仕掛けや工夫、そして働きかけを洗練させていくことが不可欠と言える。すなわち、学生に活動の舞台を用意することが必要であると考えられる。これまでの T-ACT は学生に活動実践の枠組みを与え、行動することの重要性と、活動が一筋縄ではいかない難しさ、達成した時の喜びを伝えていると言える。卒業生からの報告からも、本取組で得た知見の深さや視野の高さを、社会において発展的に活かすことができていることがわかる。総合的な学生支援の理念を揺るぎなく共有し、実践と組織化を行ってきた T-ACT の支援体制と活動実績は、我が国の学生支援において貴重な輝きを放っていると言えるであろう。

出来ることは可能な限り行っていると言って良いが、広報など積み残した課題もある。たとえば、広報体制の充実や現役生と卒業生とを結ぶネットワーキングを検討することも求められる。さらに、本学の長期計画では、学生との個別相談によるチュートリアル教育も標榜されている。T-ACT の活動は、その端緒となる要素が豊富に含まれていると認められる。今後、学内の様々な取り組みとより一層のタイアップを行うとともに、先導的な役割を果たされることを切に願う。

また、元より積極性を有する学生だけでなく、積極的になれない学生への波及効果も強めていくことが必要である。学生が他者と関わって課題を共有し、共に活動する体験を通じて、他者とつながる感覚や対話による相互理解の可能性を感じられるようにすることこそ、T-ACT の目指す人づくりにもつながっていくであろう。

【総合評価： 4.3 】

評価資料抜粋

つくばアクションプロジェクトの主旨と成り立ち

つくばアクションプロジェクトの主旨

つくばアクションプロジェクト（以下，T-ACT）は，学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を，新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで，学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である。

T-ACT は，学生が企画立案し展開される T-ACT アクション，教職員や大学組織が企画立案し展開される T-ACT プラン，地域活動団体が実施する社会貢献活動への自発的参加を支援する T-ACT ボランティアの 3 種がある（図 1-1）。活動においては 4 つの役割があり，企画立案者をプランナー，プランナーとともに企画を運営する筑波大学の学生をオーガナイザー，企画された活動に参加する者をパーティシパント，T-ACT アクションに協力する教職員をパートナーと呼ぶ（図 1-2）。学生は自らの「やってみたい」という意欲や能力に応じて，気軽な参加者たるパーティシパントから企画の先導役となるプランナーまで，好きな役割で参加が可能である。複数の役割を経験することで，多様な役割を体験したり，自らの能力のステップアップをしたりすることができる。

T-ACT の諸活動は，学生・教職員・学生支援組織・地域による共創的コミュニティを舞台とした，半年以下の単発的・短期的活動であるため，アクティヴな流動性をもつことを特徴としている。学生は，T-ACT の諸活動を通して，諸活動への積極的な参加力，経験から感じ取る体験力，他者と関わり協調するコミュニケート力，人をまとめ率いる統率力，自らの思いを創造しそれを具現化する企画力といった，社会実践的な人間力を養うことが可能である。T-ACT での体験を通じて，学生は自主性と社会性を備え，将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。

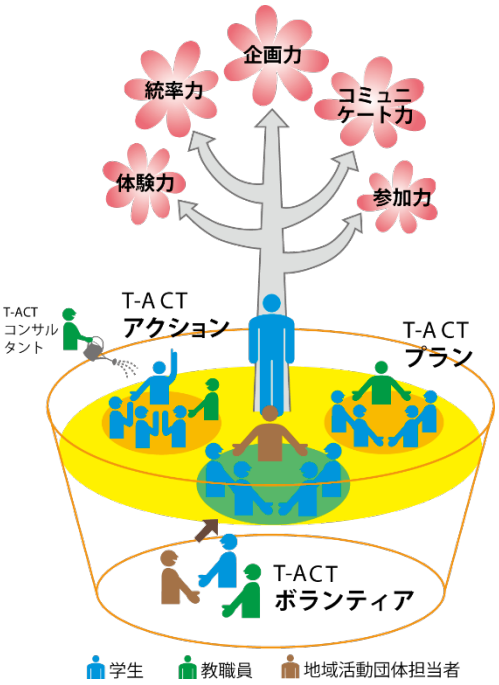


図 1-1　T-ACT の展開と学生の成長

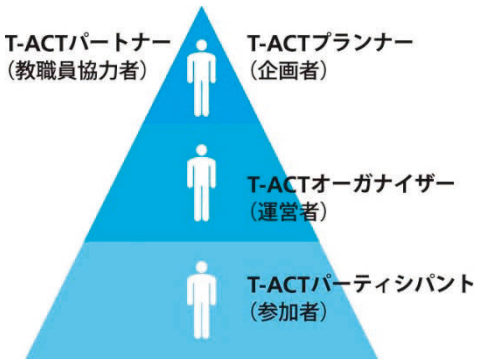


図 1-2　T-ACT における 4 つの役割

つくばアクションプロジェクトの成り立ち

T-ACT の始まりは，2008 年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（以下，学生支援 GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援―学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生―」にある。学生支援 GP の採択に伴って，その事業を遂行するために，学生の自発的活動の創出を支援するコンサルタントと事務スタッフを配置した。学生支援 GP が終了後も，筑波大学の人間力育成支援事業の一環として学生支援が続けられている。

T-ACT を推進するため，2012 年度および 2013 年度には，学生生活支援室に T-ACT 部会が設置された。T-ACT 部会は，学生生活支援室長，学生生活支援室に勤務する教員，保健管理センターから選出される教員 1 人，各学群から選出される教員各 1 人，学生部から選出される職員 2 人で組織された。また，2012 年度には，学生のさらなる活躍の場を創出するとともに，筑波大学の地域貢献に与するために，T-ACT ボランティアの制度の模索が始まり，2013 年度には本格的に始動することとなった。それに伴って，新たにボランティアアドバイザーを雇用することとなった。2014 年度は学生担当副学長補佐の下につくばアクションプロジェクト推進室（以下，T-ACT 推進室）が設置され，副学長補佐，学生生活支援室に勤務する教員，保健管理センターから選出される教員 1 人，各学群から選出される教員各 1 人，学生部から選出される職員 2 人，その他学生担当副学長が推薦する本学の教員若干人で組織された。2019 年度からは，保健管理センターから選出される教員が，学生相談室から選出される教員へと変更された。

2020 年度 10 月 1 日時点での T-ACT 推進室の構成員は資料 1 の T-ACT 推進室名簿の通りである。また，現在の T-ACT の支援体制については，資料 2 の通りである。

T-ACT推進室名簿

2020年10月1日

NO	根拠・選出母体	氏　名	所属・職名	任　期	備　考
1	4－(1) 副学長補佐	◎加　賀　信　広	人文社会系　教授	職指定	
2	4－(2) 人文・文化学群	木　村　周　平	人文社会系　准教授	2020.4.1～2022.3.31	
3	4－(2) 社会・国際学群	星　野　　豊	人文社会系　准教授	2020.4.1～2022.3.31	
4	4－(2) 人間学群	○杉　江　　征	人間系　教授	2020.4.1～2022.3.31	
5	4－(2) 生命環境学群	石　川　　香	生命環境系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
6	4－(2) 理工学群	中　内　　靖	システム情報系　教授	2020.4.1～2022.3.31	
7	4－(2) 情報学群	後　藤　嘉　宏	図書館情報メディア系　教授	2020.4.1～2022.3.31	
8	4－(2) 医学群	村　田　知　弥	医学医療系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
9	4－(2) 体育専門学群	坂　本　拓　弥	体育系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
10	4－(2) 芸術専門学群	上　浦　佑　太	芸術系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
11	4－(3) 学生相談室	田　附　あえか	人間系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
12	4－(4) 学生部学生生活課	葛　山　清　光	学生生活課長	職指定	
13	4－(5) 副学長指名	黒　田　卓　哉	T－ACT専任教員　助教	2020.4.1～2021.3.31	
14	〃	青　柳　悦　子	人文社会系　教授	2019.4.1～2021.3.31	
15	〃	土　井　裕　人	人文社会系　助教	2020.4.1～2022.3.31	
16	〃	唐　木　清　志	人間系　教授	2020.4.1～2022.3.31	
17	〃	慶　野　遥　香	人間系　助教	2020.7.1～2022.3.31	
18	〃	田　中　　博	計算科学研究センター　教授	2020.4.1～2022.3.31	
19	〃	桶　谷　雅　人	人間系　助教	2020.10.1～2021.9.30	新規

備　考　：　◎印は室長、○は副室長

(オブザーバー)

NO	所属等	氏　名	所属・職名	備考
1	総務部総務課	倉　持　かおり	地域連携　一般職員	
2	(学外者)	横　田　能　洋	茨城NPOセンター・コモンズ 常務理事・事務局長	
3	(学外者)	武　田　直　樹	NPOフュージョン社会力創造パートナーズ 理事長	

資料2

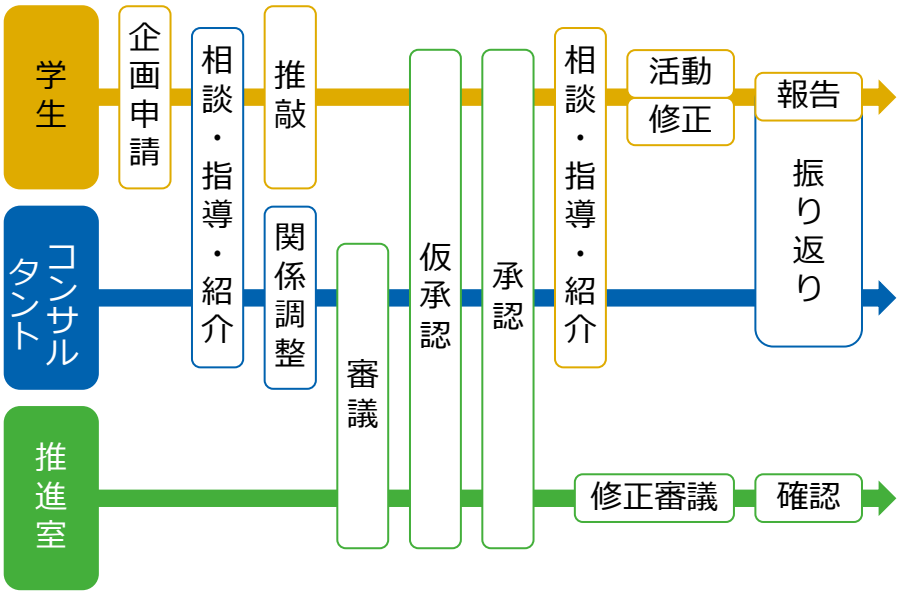
T-ACT支援体制および中期計画達成状況など

【現在のT-ACTの支援体制】

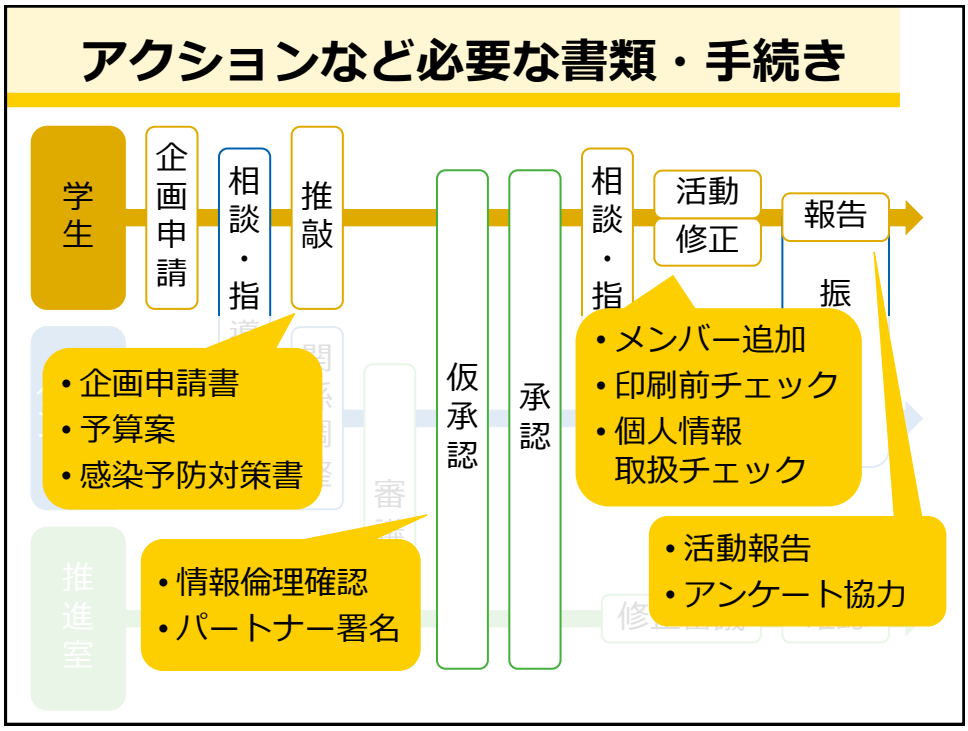
※ 外部評価委員会事前説明スライドから抜粋

1

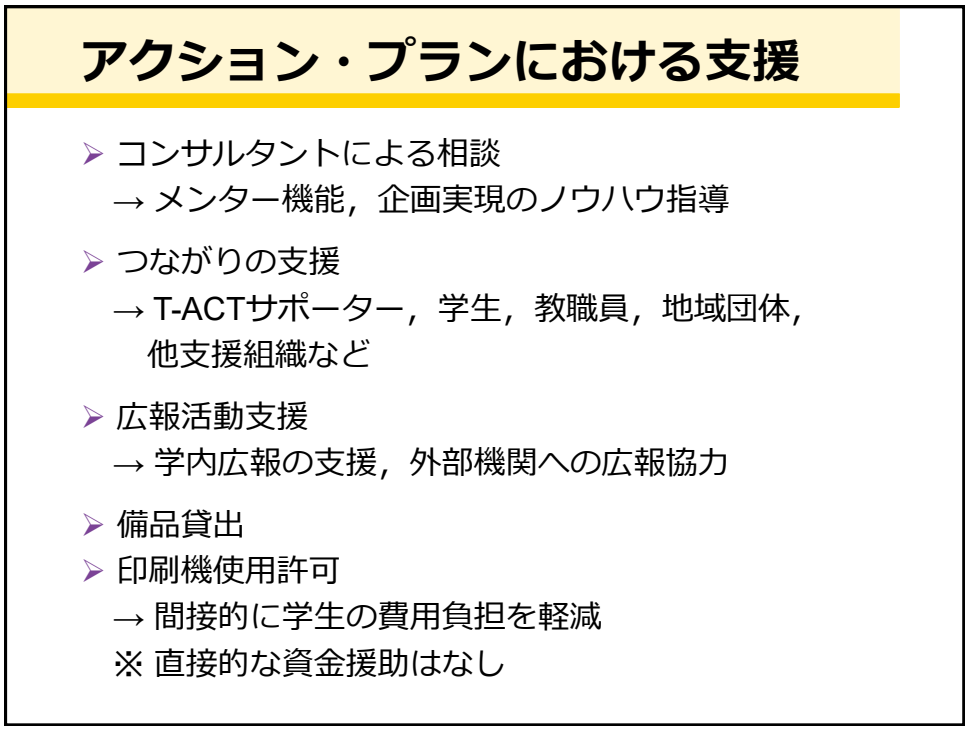
アクション・プラン実行の流れ



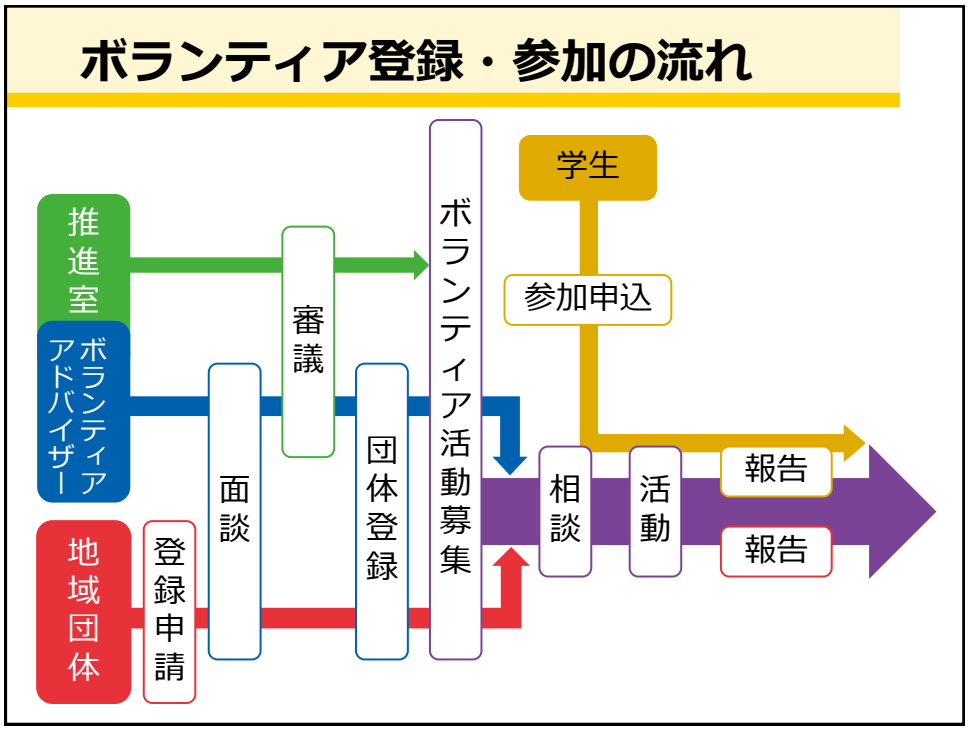
2


アクションなど必要な書類・手続き
学生
企画申請
相談・指導
推敲
仮承認
承認
相談・指導
活動
修正
報告
振り返り
• 企画申請書
• 予算案
• 感染予防対策書
• メンバー追加
• 印刷前チェック
• 個人情報取扱チェック
• 情報倫理確認
• パートナー署名
• 活動報告
• アンケート協力
推進室

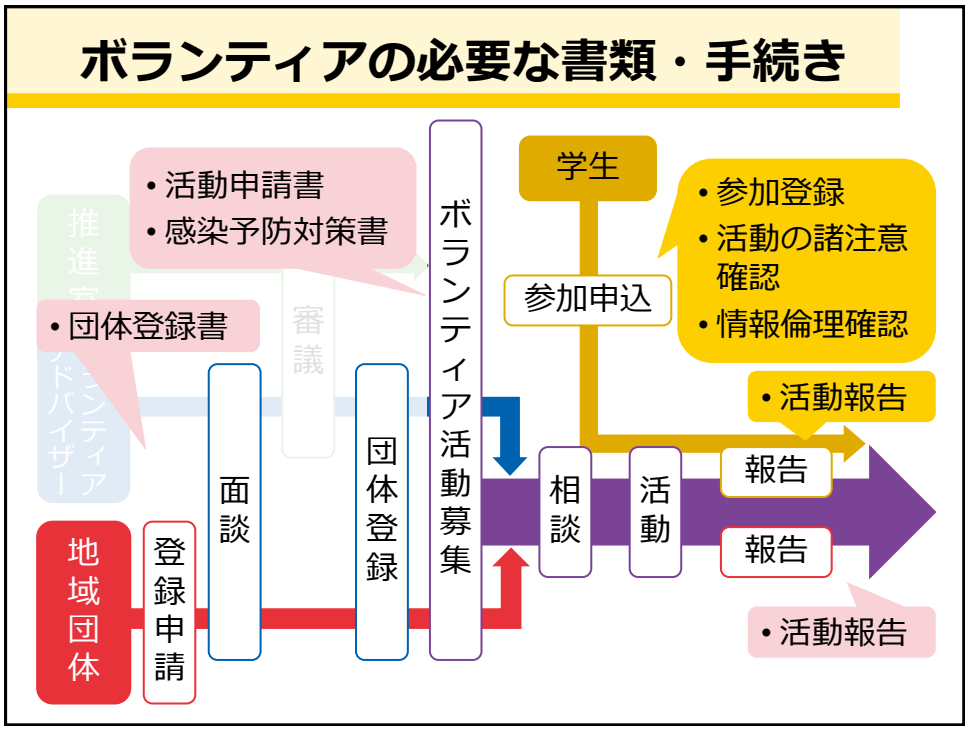
3


アクション・プランにおける支援
➢ コンサルタントによる相談
→ メンター機能，企画実現のノウハウ指導
➢ つながりの支援
→ T-ACTサポーター，学生，教職員，地域団体，
他支援組織など
➢ 広報活動支援
→ 学内広報の支援，外部機関への広報協力
➢ 備品貸出
➢ 印刷機使用許可
→ 間接的に学生の費用負担を軽減
※ 直接的な資金援助はなし

4


ボランティア登録・参加の流れ
推進室
ボランティアアドバイザー
地域団体
審議
面談
登録申請
団体登録
ボランティア活動募集
学生
参加申込
相談
活動
報告
報告

5


ボランティアの必要な書類・手続き
• 活動申請書
• 感染予防対策書
• 団体登録書
地域団体
登録申請
面談
団体登録
ボランティア活動募集
学生
参加申込
• 参加登録
• 活動の諸注意確認
• 情報倫理確認
相談
活動
• 活動報告
報告
報告
• 活動報告

6

ボランティアにおける支援

- ボランティアアドバイザーによる相談
  → 学生に対しては活動参加への配慮事項の指導，
  地域団体に対しては情報発信への助言
- つながりの支援
  → 地域団体と学生間での交流促進・トラブル予防
- 募集活動の広報活動支援
  → T-ACTによる学内広報，参加学生による学内広報
- 備品貸出
  → 災害ボランティア時の備品貸出を検討中

7

【中期計画達成状況】

T-ACTの特筆すべき取組み（2016年度以降）

※ 外部評価委員会事前説明スライドから抜粋

8

2016年度の取組

中期計画

国際的な視野に立てる学生を育成するために、学内の関連組織と連携し、国際交流支援体制を強化する

- 学生交流課と連携し，学内の留学生がどのぐらい課外活動に関われているかを調査
- 留学生にもT-ACTの活動や課外活動の情報を広報する重要性を確認
- **学生交流課との連携体制を構築**

⇒ 2020年現在も継続的な連携体制がある

- T-ACTのWebページの英訳化は不十分

9

「国際化」にかかわる事例

学生交流課との情報交換体制の確立

・学園祭における共同の情報発信

・互いに支援を要する学生の紹介

国際化を志向した活動の例

2016年「MENA Week」

中東・北アフリカ地域に関する
様々な文化への理解を促進するイベント週間

2017年「Omochi Language Club」

母国語を教え合うことで，相互交流
サークル化も支援し，現在も活動を継続

10

2017年度の取組

中期計画

T-ACTの外部支援団体との連携を深め，
経済界等からの資金獲得の枠組みの構築を検討する。

- 学生による**クラウドファンディング**の報告窓口を学生生活課が設置。T-ACTにおいても相談対応
- **助成金情報**の提供にも力を入れる
- 他大学のボランティアセンターを視察

⇒ 学生に地域活動の機会を与えるだけではなく，
学生の「やってみたい」を地域活動につなげるという機能にT-ACTのオリジナリティがあると確認

11

「資金獲得」にかかわる事例

クラウドファンディングを活用した例

2017年「響け！つくばの調べ」

演奏者120名，観客300名を越えるコンサート

予算の一部として28.5万円の支援を受けることに成功

助成金を活用した例

2018年「つくばごみばこぷろじぇくと」

わかりやすい分別を示すごみばこを作成

2018年「つくばテーブルゲーム交流協会」

株式会社カスミの支援事業に採択。イベント開催

12

2018年度の取組

中期計画

学生の社会性を育成するために、地域等への
社会貢献活動をさらに活性化させる体制を構築する。

- つくば市役所や社会福祉協議会などとの連携を深め，
  学生のニーズに合わせた情報提供や窓口紹介が可能に
- アクションを**二段階承認制度**に改正し，
  より丁寧な支援を可能とした
- **ビジネス体験支援**も行うようにし，支援の幅を広げた
- 学生主体の活動とボランティア活動の垣根が低くなり，
  ボランティアとアクションの支援が重なり始めた

13

「承認制度」「支援対象拡張」の例

二段階承認制度によって仮承認を活用した企画

2018年：16件　2019年：16件（うち6件が仮承認のみ）

2020年：1件

ビジネス体験を志向した活動の例

相談はあるものの承認にいたる活動は少ない

※ 2018年度申請数4件

2019年「Feedal」　エンジニア向けサイト開発

2020年「ドコイコ」　フードマップアプリの開発

14

2019年度の取組

中期計画

学生の自立性を育成するために、大学間連携を強化し、
人間力育成支援体制のさらなる充実を図る。

- 大学間連携を検討するための公開シンポジウムを開催。
  学生支援についての知見を共有する重要性を確認
- ボランティアとアクションの活動の重なりが強くなり，
  学生の活動と地域連携がますます深まる
- 茨城県県南生涯学習センターと連携し，
  小学生とT-ACTの活動をつなげる機会を設けた
- つくば市の事業「つくばSTEAMコンパス」と連携し，
  学生の広報活動の選択肢を広げた

15

学生の活動と地域連携の深まりの例1

ボランティアからアクションとなった例

2018年「第4回小中学生将棋大会」

「つくばボードゲーム愛好会」の協力を受けて行っていた活動を
自立して実施

学生主体で地域との連携協力を深めた例

2019年「つくばアスリートレストラン」

地域の方々のご協力も得ながら，
アスリート向けの食事を提供し，食育活動も

2019年「あそび探検がはじまるよ！」

T-ACT登録団体「星の子」と連携し，
発達障害のある子どもとレク・イベント実施

16

学生の活動と地域連携の深まりの例2

学生のニーズをきっかけに連携を深めた例

2018年「竹水鉄砲合戦～夏の陣～」 などなど

企画活動以外にも，学生の個別の求めに応じて紹介することも

例：サークル活動として協力・指導を求める，

　　卒業研究につながる活動として協力先を求める

地域のニーズをきっかけに連携を深めた例

2016～2019年「盆LIVE」⇔「トワイライト音楽祭」

2017年　登録団体の提案による教職員への講習会

2018年　筑波学院大学の学生とサポーター学生の交流

2019年　茨城県県南生涯学習センター主催イベントにて
T-ACTアクションの実施 などなど

17

2020年度の取組

中期計画

当該活動の総合的な検証・評価の実施

- 新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け，
各種支援活動が大きく制限された
- **オンラインでの活動体制**および
新しい生活様式下での活動体制を整えた

18

新しい生活様式にあわせた試み

オンライン活動を試みた例

2020年「ゆうゆうゆう会」

継続的活動の実施。吃音をもつ方々の自助グループ活動

遠隔会議アプリを用いて，全国各地から参加者あり

2020年「ビブリオバトル筑波杯」

イベント型の実施。遠隔会議アプリを用いて，
ビブリオバトルを実施した

感染予防対策の上での活動を試みた例

2020年「筑波の春を取り戻せプロジェクト」

学生に対して求める感染予防対策をどうクリアしていくか模索中

19

編集後記

2020年初頭からCOVID-19の影響は筑波大学の学生生活にも及び、授業がオンラインになり、入学式は中止となり、課外活動は大きく制限されました。感染防止対策の万全を期するために、T-ACTでも企画の承認基準の変更を余儀なくされ、企画実施までのハードルは高くなったと言わざるを得ません。心を躍らせ入学してきた学生が、希望を挫かれぬよう私たちとしても「やってみたい」を応援して参りました。企画を終えた学生がT-ACTフォーラムに来室した際に、「T-ACTで企画を立案し、実行できたから胸を張って大学生活を送れている。T-ACTがなければ何のために入学したのかわからなかった」と語ってくれたこともありました。今年の企画には、コロナ禍だからこそ「やってみたい」を形にすることに意味があるのではないかと考えた学生が多かったように思います。まずは、このような制限下において創意工夫を凝らし、モチベーションを保ち、活動を最後までやり遂げた学生を称えたいと思います。

今年度で14年目 となるT-ACTフォーラムの変化としては、コンサルタント、ボランティアアドバイザー、フォーラムスタッフが総入れ替えとなったことが挙げられます。就任後に挨拶回りをさせていただく中で感じたことは、T-ACTが、これまで関わってきた学生、OBOG、教職員、筑波大学内外の組織によって支えられているという事実です。学生の自発性に触れた折に「そのアイデア、T-ACTでやってみるといいんじゃない？」と促してくださったことに感謝いたします。地域・社会とのつながりの中で、T-ACTをご紹介いただけたことは、筑波大生への温かいサポートとして結実しているのだと考えられます。フォーラムのメンバー一同は、初心に返り、何かやってみたい、活動に参加してみたいと思って勇気をふりしぼって来てくれる学生さんを丁寧に支えていきたいと思っております。これまで築かれてきた心強いつながりを感じながら、新しい生活様式に向けた学生支援を行っていく所存でございます。

T-ACTコンサルタント
田中　圭

活動報告書をお読みいただきありがとうございました。2020年度は、COVID-19の影響で今までの日常が大きく変容し、学生のみなさんにとって大変な年だったと思います。つらかったことや苦しかったことについつい気持ちが囚われて、ご自身の成し得たことがよく見えなくなったかもしれません。ですが、みなさんが感じた気持ちやこれまでの経験は素晴らしいものだと思います。迷いや失敗にはマイナスなイメージがありますが、その経験がなければ人は成長できません。うまくいかない事があったとしても、それはその人が何かにチャレンジした証でもあります。私はみなさんの行動や姿勢から多くのものを学んだ年でもありました。

私自身も様々な問題にぶつかり、迷いも失敗もたくさんありました。ですがその度にフォーラムメンバーに支えられ励まされたことにとても感謝しています。これからもT-ACTがみなさんの心の成長の場として活用してもらえるように、私自身も新しいことへのチャレンジを恐れず、みなさんが充実した学生生活を送れるように努めて参ります。

そして、コロナ禍にあっても、これまで通りあたたかく学生を見守ってくださっている地域活動団体のみなさまからのご支援･ご厚情は感謝の念に堪えません。T-ACTに携わってくださっている方々との繋がりを大切に、また、新しいご縁を育みながら地域の方々と学生の絆がより深まる場所であることを目指してT-ACTフォーラムメンバー一同でみなさまの活動をサポートしていきます。

T-ACTボランティアアドバイザー
木田江里華

2020 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室長	加賀　信広	人文社会系	教授　学生生活支援室長
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室員	木村　周平	人文社会系	准教授
	星野　　豊	人文社会系	准教授
	石川　　香	生命環境系	助教
	中内　　靖	システム情報系	教授
	後藤　嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田　知弥	医学医療系	助教
	坂本　拓弥	体育系	助教
	上浦　佑太	芸術系	助教
	田附あえか	人間系	助教
	青柳　悦子	人文社会系	教授
	土井　裕人	人文社会系	助教
	唐木　清志	人間系	教授
	慶野　遥香	人間系	助教
	田中　　博	計算科学研究センター	教授
	桶谷　雅人	人間系	助教
	黒田　卓哉	学生生活支援室	助教　T-ACT 専任教員
	葛山　清光	学生部学生生活課	課長

2021 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室長	加賀　信広	人文社会系	教授　学生生活支援室長
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室員	木村　周平	人文社会系	准教授
	星野　　豊	人文社会系	准教授
	石川　　香	生命環境系	助教
	中内　　靖	システム情報系	教授
	後藤　嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田　知弥	医学医療系	助教
	大林　太朗	体育系	助教
	大友　邦子	芸術系	准教授
	田附あえか	人間系	助教
	青柳　悦子	人文社会系	教授
	土井　裕人	人文社会系	助教
	唐木　清志	人間系	教授
	慶野　遥香	人間系	助教
	田中　　博	計算科学研究センター	教授
	桶谷　雅人	人間系	助教
	田中　　圭	学生生活支援室	助教　T-ACT 専任教員
	鷹巣　明美	学生部学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2021 年 10 月発行

筑波大学　T-ACT 推進室
〒 305-8577　つくば市天王台 1-1-1
TEL　029（853）2222

外国籍子ども校外学習サポート教室

Tsukuba Mikoshi Club

Tsukuba×Sweets Project 2

新型コロナ禍における学生への食事支援事業

茨城県のひきこもり支援をもりあげよう